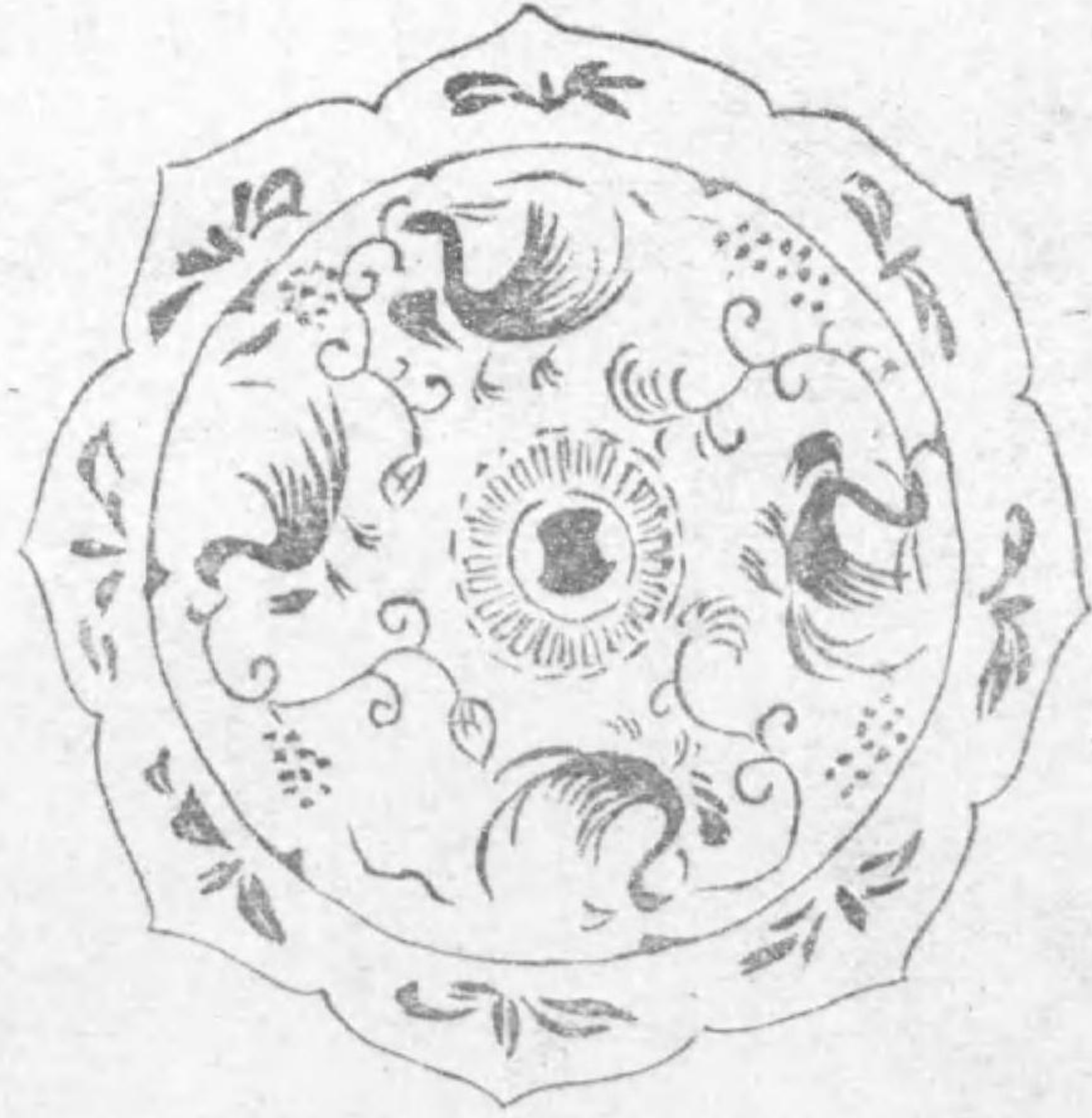


# みいか手相人

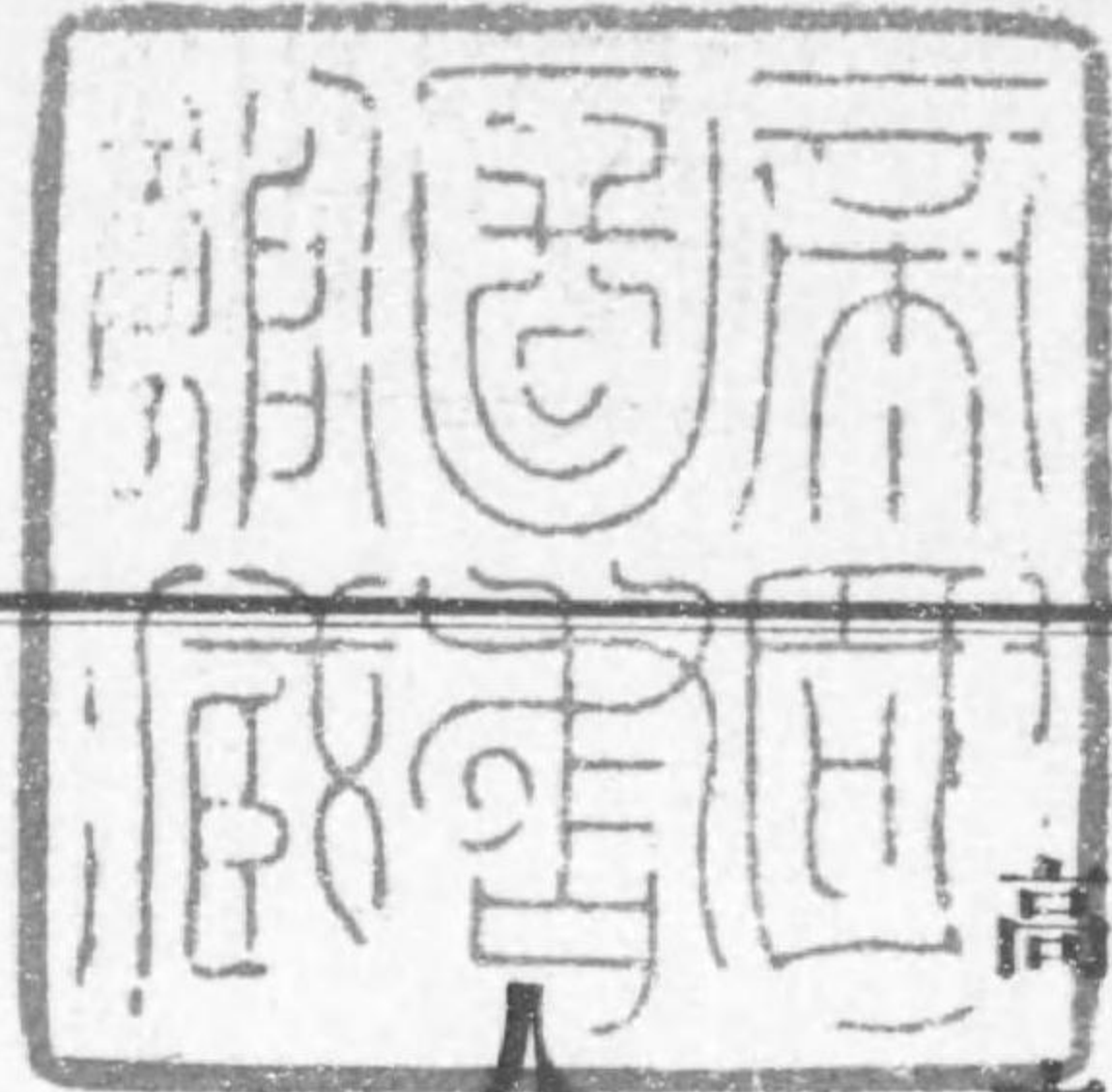
著 乘 木 高



始



時216  
723



高木

乘著

人

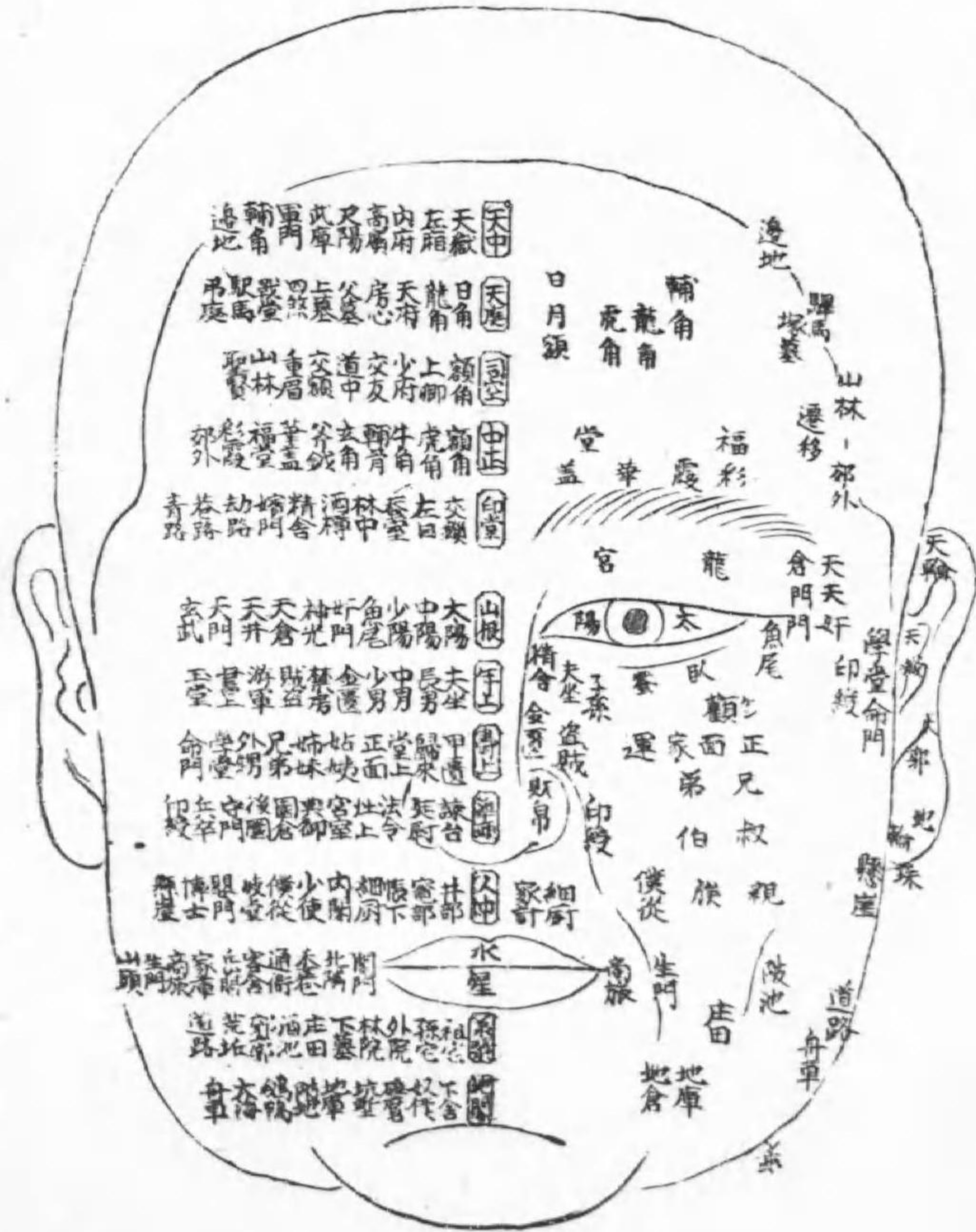
相手  
か  
か  
み

赤塚書房版



# 顔面部位圖

○顔面部中央に縦に記せ(中天)以下はいは三十部位なり。



○三十部位に横に列を以て記せ各小部位は全部在所るもの  
 にあらずは本中文に記せり

目次

一、人相を作る.....	六
二、十三部位秘旨.....	九
三、八相要訣.....	六
一、骨.....	六
二、三停三才.....	六
三、目.....	六
四、口.....	七
五、鼻.....	七
六、耳.....	七
七、眉.....	八
八、人中.....	八
九、音聲.....	八

二

一〇、手 足……………八八

一一、顔面十二局……………九一

一二、發 滯……………九三

一三、五行正形……………九四

一四、五行廿五形……………九五

一五、十 二 殺……………九六

一六、人相十格……………九七

一七、部位吉凶の標準……………一〇〇

一八、四季の氣色……………一〇四

一九、氣色の吉凶……………一〇九

二〇、氣色の變化……………一一一

二一、顔面五色……………一一〇

二二、諸部位氣色吉凶……………一二四

四、器 象 定 訣……………一二六

一、人相の 型……………一二八

二、心と意と相……………一三〇

三、視ると聽くと……………一三四

四、鼻と印堂と……………一三五

五、遺傳と體質……………一六三

六、風土刻應……………一六九

七、人の香氣……………一七一

八、髻 と 顎……………一七四

九、夫 婦 縁……………一七八

一〇、毛 髮……………一八〇

一一、富貴な人の相……………一八二

一二、貴い人の相……………一八六

一三、壽命の長い相……………一九二

一四、功名富貴の人の相……………一九五

一五、通達する人の相……………二〇〇

一六、成敗ある人の相……………二〇三

三

四

- 一七、婦人の貴相、富貴、貞淑、長壽の相……………三二
- 一八、婦人の凶惡、淫賤、短命の相……………三九
- 一九、妊孕及嬰兒の相……………三六
- 五、人相單語……………二四三
- 六、骨子秘傳……………二五六
- 七、流年變化法……………二六八
- 一、五行と流年法……………二六八
- 二、五官で見る運限法……………二七八
- 三、變化期の秘法……………二八一

## 序

著者はさきに故櫻井大路先生と共著にして『人相の秘鍵』を公けにした、本書は人相本として詳細を極めたものであり、世人の歡迎をもうけたが、書肆の廢業に依つて再版以後絶版になつた、其後著者は命理學會を起し、命理學の外に、相法學、姓名學、易學、六壬學の講義録を發兌し、専ら斯界の研究に資し、謂ゆる秘傳と稱するものは、學者の良心を以て、残りなく記載したが、此の種講義録の底本とするものを必要とする向きが多い、又相法學にては『高木相法秘傳書』(講義録)があり、從來『人相の秘鍵』を用ゐたが、すでに絶版となり、その不備を感ずることが多い、旁々茲に新たに『人相手鑑』を編して、講坐の不備を充たすと共に、一般人の修養開發に資せんとするものである。

本書は新たに起稿せるものであるが、その二三は『人相の秘鍵』より採り、その一部は機關誌『福星』誌上に發表せるものより取る。由來我國の人相書は中華に於ける相法の古冊より採れるものが多い、本書の一部も膽照經の一部より成る故にこれを編述とすべきが至當であらう、茲にその次

第を記して江湖の了解を得んとするものである。

昭和十四年秋

東京市世田谷區代田二ノ七三三

高木 乘

修養  
開發  
人  
相手  
か  
が  
み

## 一、人相を作る

人は人相を作らねばならぬ。人相を作らなければ福をなさない、福をなすには身體を作らねばならぬ。身體を作るには健康でなければならぬ、健康を作るには活動しなければならぬ、活動してよく眠り、よく飲食し、よく身體の平安を係てば人相が作られる。

人相を作るには飲食を攝しなければならぬ。衣服、住居を清潔にしなければならぬ。昔の人の言葉に、『貴人の食をくらへば貴人の齒を生じ、貴人の衣を着れば貴人の禮を生ず』といふのがある。『馬子にも衣装』といふ<sup>諺</sup>と同じである。上等の食物をたべるときは、ガツガツしない、上等の着

物を着た時は動作を丁寧にする、そこで自然と上品な態度が生ずる、そして人相がよくなる、ゆゑに人相を善くするには上等な食物をたべ、上等な衣服を着なければいけないといふのである。

然し上等な食物をたべ、上等な衣服を着るには、それを食べ、それを着るだけの働きをしなければならぬ、それとともに心も高く持つて、上等の食物をたべ、上等な衣服を着てもすこしもおかしくない人にならねばならぬ、そこで心の修練といふものがある。

人相を善くするには、單に精神の修養を心がけただけではだめである、ぜひとも實質的に働いてわが生活の向上發展を計らなければならぬ。わが生活の向上發展を計らないで人相を善くしようとしたとてそれはだめだ、容貌のおかしげな人が、大實業家などになつた時は、自然と箔がついて見上げになるのは、財物が豊富となつたために、生活に大きなゆとりができて、人相も自然高尚になつたからである。財のないものが始めから人相をよくしようと思つても、それはちよつと不可能に似てゐるが、日頃『貴人の食を食ふ』心得を以て、我が生活を豊富にし、一方には精神の修養をなし、精神をたゞ物の一點に集中し、たとへ途中少しの苦勞はあつても、いつかは『成功』する、『我が一生の中に、一事を貫徹する』と考へて、倦まずたゆまず努力してゐれば必ず人相もよくなり、我が運命も自然に開けてくるものである。



自然兩眼も動搖し、人を射ること閃光の如きものがあるのである。

八

凡そ人間の精神は、往々不用意のうちに現はれるものであり、つけ焼刃、ごまかし、體采などの暴露するのは、不用意のうちにチラリと見せた姿である。たとへチラリと見せても、チラリと見せずとも、いつも變りなき正義、清和の精神は、終始一貫してかはりなき故に、化けの皮の剥けるうれひもなく、我が生わが心は天下泰平である、この精神が胸に宿つたものは眼も清く、面貌たとへ醜なりとも、おのづから威を備へ、身體からは自分香氣を發つて、いはゆる桂の枝を月宮に折るの身ともなるのである。

人相の重んずべきは、實にその如くである。以下種々なる項目をわけて人、相の極意を説くとしてしよう。

## 二、人相十三部位秘旨

人相十三部位といふものは、顔のてつべんから額の端まで、竝に十三に區別してその吉凶を説いたもので、これに又横列百二十部位なるものがあるが、これ百二十部位なるものは、人相學が、支那ででき上る永い時代に、いろいろな相家が定めたもので、實は同一場所の別稱が甚だ多いのである。今日の相法家はその來歴を知らず、又人にもその事を傳へないために、書籍を読む人相學がむつかしくて分らないもの、やうに感じさせるのである。所が人相學の吉凶はつまり人間生活の狭い範圍で、入學、結婚、就職、財産、病氣、子女などの數項にすぎないから、これらの項目について相法上の約束を收約すれば、一冊の相法書を読んだだけで、大體の事柄は了解せられるのである。著者は茲に「高木相法秘傳書」を著し、學者的良心を以て漏れなく之を傳授したが、ここに記す十三部位の秘傳の如きもその一つで、そのものは極めて淺はかなものであるとはいへ、その要旨を會得したならば、大の相法はわが藥籠中のものになるのである。その中で最も素人に了解し難いのは「氣色」なるものであるが、氣色は謂ば肉色であるから、よくこれに注意して觀察するときは、氣

これらの緊張した精神も持たず、慢然たる俸給取りになり、只物質的に成功しようとしてゐたのでは、人相もよくならず、大いなる將來の發展も期し難い。

これらの緊張せる精神を、人相では『神』といふ、神とは糠をとり去つた米のやうなものである。糠のまゝでは中々人はたべ難い、又米穀の美しくさもない、米は糠を去つて始めて米の美しくさがあり、直ちに食用に供される、人相の『神』とはこのやうなもので、人の純粹なる精神である。處が世上には糠も去らず、甚しいのはモミ殻のまゝの米であるやうな人物が多く、人當りが悪い、エラ／＼してガサ／＼してゐる、故に人相もよくない、白けた米となると人相もよく、人も賞美する人間の人のよいのは顔にこの『神氣』が現はれたもので、従つて心の眞髓の發露したものである。また山の聳つて崩れないのは、石があるためである。人間の世上に立つて崩れないのは、この石にたとふべき心——精神があるからである。精神のないものは、石のない土山のやうなものである。山であるに違ひはないが平凡である、人間であるに違ひはないが、骨がない、骨がないのは『精神』がないと同じである。山に於ける石は、人間の精神と同じであり、又人間の『骨』と同じである。

糠を去つた白米のやうな、一身の神氣——精神といふものは、人の兩眼に集まり、一身の骨相といふものはまた全く面部に集まるものである、即ち骨相なるものも身體の全部あるはあるが、實に

面部にあるのである。故に人相は昔からまた骨相とも云ふのである。骨相と稱して面部を見ずし身體のみ見るのではない。

顔面の表情は言語にまさるものがある、眼のはたらきは又た言語にまさるものがある、表情もなく、眼の働きもないものは心と働きがない、只眼が動き、口がうごき、眉が動くだけである、かくては蝶々トンボと同じである。犬猫でさへ眼に表情がある、心の動きがある。まして人間には大きな心の動き精神の働きがなければならず、その動き、働きが高く、深くなつた時に、人相がよくなるのであるから、人間は心の修練をなすとともに、又生活上の修練をなさなければならぬ。現實の不足を不足のまゝに考へて、人をも我身をもうらむ如きは、下の最も下なるものであつて、この心はやがて人間の『神氣』の清濁となり、眼や顔面に現はれてくるのである。最も人間のこの『神』の清濁といふことは、ように知ることができものであるが、『神の正邪』といふことは中々知ることができない、然し全く知られないのではない。正なるは眼中靜かなること水の如く、また螢光の如しと故人もいつてゐる、正なるはみづから求めず、物の紛雜を避け、進んで他事をなさず、利のために動かす、名のために囚はれない。邪なるはみづから事を求めて、他事に走り、利害を口にし、仁徳を論議し、人をしておのが力を信ぜしめんとするものである。かかる動作をなすものは、

色も亦容易に區別しえられるのである、諸君はまづこの小冊子を手鑑にして自己の面貌から判断してかかるがよい。

さて十三部位とは顔の髻の生際から、顎の端まで、その中凡そ三分乃至五分位づつおいて上から○天中、天庭、司空、中正、印堂——これを上停とするが、天中も天庭も司空もわがと區切りをつけて見る必要はない、額全體が天庭である。世俗にも云ふ、日角、月額は司空と同じものである○山根、年上、壽上、準頭——これが眉の交錯せる點から鼻の端に及ぶ、中停といふ、年上壽上は同一のものと見てよい。

○人中、承漿、地額——鼻の下から顎の端まで、之を下停といふ。

【1】次に上停五部の中に必要な點は天中部では

邊地だけ、之は髮の生へ際

天庭部では

日角(又龍角、虎角)驛馬だけ

司空部では

交友、山林だけ

中司部では

輔骨、福堂だけ

印堂部では

印堂だけ

【2】中停四部では山根部で

三陽(目)、夫妻の坐、淚堂(夫婦坐に同じ)

魚尻 奸門(魚尾の別稱)、天倉だけ

年上部で

目の下一體

壽上部では

甲櫃、金櫃、廷尉(何れも小鼻)、學堂、命門など

準頭部では

法令

【3】下停三部の中、人中部では

口の周圍、(様々の名あり)

承漿部では

唇の下と法令の下る肉の高低(様々の名あり)

地閣部では

顎のくゞり及び腮骨(これにも様々の名がある)

然し細かな名稱は、顔面の各部に横列してゐるのではなく、實は同一個所の別稱であるから、その次第を辨別すれば人相學の綱領は直ちに會得し得るのである。依つて今その部位と部位にある處の骨及び色の表示について、下にこれを示すしよう。

## 二、人相十三部位秘旨

人相十三部位といふものは、顔のてつべんから顎の端まで、豎に十三部に區別してその吉凶を説いたもので、それに横列百二十部位なるものがあるが、この百二十部位なるものは、人相學が支那ででき上る永い時代に、いろいろな相家が定めたもので、實は同一場所の別稱が甚だ多いのである。今日の相法家はその來歴を知らず、又人々にもその事を傳へないために、書籍で讀む人相學がむづかしくて分らないものゝやうに感じさせるのである。所が人相學の吉凶はつまり人間生活の狭い範圍で、入學、結婚、就職、財産、病氣、子女などの數項にすぎないから、それらの項目について相法上の約束を收約すれば、一冊の相法書を読んだだけで、大體の事柄は了解せられるのである。著者は別に「高木相法秘傳書」を著し、學者良心を以て漏れなくこれを傳授したが、こゝに記す十三部位の秘傳の如きもその一つで、秘傳そのものは極めて淺はかなものであるとはいへ、その要旨を會得したならば、大體の相法はわが藥籠中のものになるのである。その中で最も素人に了解し難いのは「氣色」なるものであるが、氣色は謂ば肉色であるから、よく肉色に注意して觀察するときは

氣色も亦容易に區別しえられるのである。諸君はまづこの小冊子を手鑑にして自己の面貌から判断してかゝるがよい。

さて十三部位とは顔の髪の生際から、顎の端まで、その巾凡そ三分乃至五分位づゝおいて上から

○天中、天庭、司空、中正、印堂——それを上停と稱するが、天中も天庭も司空も別段區切りをつけて見る必要はない、顔全體が天庭である。世俗にも云ふ。日角、月額は司空と同じものである

○山根、年上、壽上、準頭——これが眉の交錯せる點から鼻の端に及ぶ、中停といふ、年上壽上は同一のものと見てよい。

○人中、承漿、地額——鼻の下から顎の端まで、之を下停といふ。

【1】次に上停五部の中に必要な點は天中部では邊地だけ、之は髪の生へ際である。

天庭部では

日角（又龍角、虎角）驛馬だけ

司空では

交友、山林だけ

中正部では

輔骨、福堂だけ

印堂部では

印堂だけ

【2】中停四部では山根部で

三陽（目）、夫妻の坐、淚堂（夫婦坐に同じ）魚尻奸門（魚尾の別稱）、天倉だけ

年上部で

目の下一體

壽上部では

甲櫃、金櫃、延尉（何れも小鼻）、學堂、命門など

準頭部では

法令

【3】下停三部の中、人中部では

口の周圍、（様々の名あり）

承漿部では

唇の下と法令の下る肉の高低（様々の名あり）

地閣部では

顎のくゞり及び腮骨（それにも様々の名がある）

然し細かな名稱は、顔面の各部に横列してゐるのではなく、實は同一個所の別稱であるから、その次第を辨別すれば人相學の綱領は直ちに會得し得るのである。依て今その部位と部位にある處の骨及び色の表示について、下にこれを示すしよう。

前にも云ふやうに、人相學の十三部位中の横の百二十部位の名稱を始めから一生懸命學んでゐたのでは判断力がつかない、人相本を見ると、之等がそれぞれ横に並んでゐるが、實は並んでゐるのではなく、或る部分は同じ場所の別名であることが多い、原理を了解すれば人相はたやすく覺えられるそれには人相の吉凶を判断するといふ念を先にし、名稱はこれを同時に覺えるやうにするのが捷徑である。故にこれから各部の名稱を順々に説いて行くこととする。尤も構列を八位とした本もあるが、こゝでは「相理衡眞」の十位を取つて述べる。

### 一、天中部位十個

第一 天中、部位に對す——天中といふのは額の中央の一番上部である。その左右は天岳で、横に

天岳、左廂、内府、高廣、尺陽、武庫、軍門、輔角、邊地

と並んでゐるが、實はほぼ同一場所の異名である。天中は高貴の主宰をなす所である。又通達の有無を見る所である。高く起るものは即ち「天中」である。平滿なるものは遠行によろしい、並に官祿がある。骨の起るものは富貴を主どり、缺陷あるものは田宅がない、又刑獄に死することを主どる潤ひがあつて平らかなのは吉である。かやうな人は一生刑法に觸れるやうなことがない。骨が起つて節の如く大に稜のあるものは聖人となり名僧智識となるものである。官吏となりては高位高官に達する。黒子あるものは父母を尅し、癩、紋などのあるものは母の早死をするしである。天中に骨が起つて後頭部に至るものは五六位の官に至るものである。凡そ一流に秀で一業をなし身の高位に昇るものは皆此天中の廣い人である。狭くして卓越するものもあるが、かゝる人は多く自力によつて大業を起す奮闘努力の人である。これらは天骨の起り方如何により、内府ともなり、軍門ともなるのである。但し邊地は額の角である。

【1】天岳（天嶽）——一名訟獄、刑死の有無などを見る所である。天中の部が凹んでゐれば天嶽となるのである、其上色の黒きものは幾度も牢獄に入ることがあるが通常人に誰もあると云ふ

わけではなし。

【2】左廂——平滿なるものは一生吉利である。骨起つて屏が伏す骨のやうなものは地方長官などの位に至る人である。それであるから「左廂」といふのである。「左廂」は地方官などの位である。連なつて起るものは宰輔（大臣）となり、親戚も出世し、錦衣を着るの人となる、缺陷あるものは災厄を主どり、黒痣あるものはよからぬ事を企てる、(福助のオデコは此の左廂の骨の突起を滑稽化したものである。男女ともオデコの者は身分以上に知識的の出世をするものである)。作家の田山花袋氏、菊池寛氏などは此のよき類型を持つてゐる人である。

【3】内府——金銀財寶の有無を見る所である。骨肉の平滿なるものは家に珠寶が蓄積する。性質も仁慈で孝心が深いものである、缺陷あるものは一生の間經營辛苦し、家産を破壊したものは之を恢復することができない、或は淫蕩に身を滅し、獄中に死ぬる人もある、この場合は前の「天獄」になるのである。黒痣少しあれば早く父母を失ひ、横髪より骨の高く聳ゆるものは大將となる器である。

【4】高廣——驛馬(額の角)より骨の起るものは華族に列し、豊かに起るものは裁判官、書記官となり、平らかなのは半吉、黒痣あるものは父母を尅して凶、早くこれを失ふものである。然

しこの相は孤獨である。

【5】尺陽——書記官、助役の職を主どる所である、骨の豊起するものは官祿があり、その骨の寸法で「高陽」になるか「尺陽」になるのである。缺陷するものは凶、官に就ても早くやめられる、痣あるものは他郷に出て死することがある。

【6】武庫——兵事兵職の有無を見る所である、一名軍門と云ふ、武庫は即ち軍備の部である。或は骨起つて豊厚するものは兵官に任して高位に至るものである、元帥大將の高位にのぼる者にこの組織を見るものである。即ち文官たらずして武官となる、その時は「武庫」の骨となるのである。黒痣及び縦紋のあるものは兵官武職にあつても軍に従つて勝利を得ない、或はその場で戦死をする、骨起つて高いものは大將元帥となる、骨肉起るものは軍人となるによろしい缺陷あるものは又は癩痕などあるもの、武職に就くもよろしくない、従軍すれば敗け或は捕虜となる。黒子あるものも兵事に出づるか戦死をする、赤色現はれると鬪將を主どる。缺陷あるものは「武庫」とはならぬ。

【7】軍門——兵官の職、即ち軍事の事を見る、武庫と同じである。少しく骨の高いものである

【8】輔角——即ち日角月額である、此の骨あれば昔なれば郡長の位とする、地方官の部長級で

ある、骨起るものは文章を能くする、骨起つて色の明らかなのは殖民地の民政官、大会社の社長に任ずる、これを一名弓努きうとどと名づける、黒痣あるものは戦争で死することがある、痣が多くほゞうす黒いものはその官に居ても失職のことがあり、赤き色が出れば大病にかゝり、或は官職を争ふことがある、輔角の骨の大きいのは大貴で、出世して大官になり、大重役になる、輔角の小さいのは小官小重役である、骨のないのは小官にも小重役にもなれない。輔角のないものを「輔角」とは呼ばない。

【9】邊地——額のすみ、髪の毛の生へ際である、その部から下の方を「遷移」といつたり、「墳墓」といつたりする。邊地は邊陋の地の職、遠い所を觀、遠方に行く時の吉凶を見る、又人の移轉などを見る、骨の起るのは公使館書記官、實業家ならば支店詰などになつて遠くに行くことがある。骨が起らねば色だけでみる。黄色あるものは正三位に至る貴人である。隆起するのは貴顯の御侍附となり、或は司法官又は軍人となる、黒色あるものは遠くへ行くことができない、行つてもすぐに歸るか又は凶事に遭ふ、黒痣あるものも同様である、赤色が刀劍の紋のやうに現はれると軍人は爵を得る、文官ならば知事に任ずる、赤色が雲のやうに出づると遠くに動く兆である。此部がはつきりしてゐれば故郷がある、茫乎としてゐるものは故郷がある如くにしない、黒痣の色の悪しきものは凶である、男女を問はず、皆旅行中に死亡することがある。

## 二、天庭部位九個

第二 天庭、日角に連る——天庭は日角に連なる所である、此部は「天中」から三分乃至五分ほどの下に位する、此部に、

天庭、日角、天府、房心、父墓、上墓、四殺、戰堂、驛馬、弔庭

があるが、之を横にして髪の毛の生へ際までに及ぼす、この中の父墓、上墓、戰堂、驛馬、弔庭などいふ處は殆ど同一の場所である、骨が起れば官祿がある人であり、天庭、日角、天府、房心など稱するのである、若し骨が兩邊から起つて、日角月角があり、これに應ずれば總理、元帥に至る人である。その骨が横髪から起るものは位は四五位にしか至らぬ人である、天庭の光明なるものは貴い黒子や缺陷のあるものは刑罰又は災厄に遭ふことがある、また「天獄」をなす、それを一名天宰と云ふ、身分の高くなつたものが牢に入ることを主る、即ち「天災」であり、「天獄」である。また鴻臚館こうらくわん、四方館ともいふ、骨落ちて色悪しきものは物事利を得ず、青氣あるものはわけて凶である、骨が聳えず陥らぬものは貴とひ、濶潤くわんじゆんな光のあるものは五十日以内に遠方に遷ることがある、骨起



つて紅に潤ふものは大官ほどの高位にのぼるものである。

【1】日角——骨の起るものは日角があり、公使の位を見る、いつばいに張つて骨肉の起るものは侍従の職に就く、日角月角は又父母の宮ともしてゐる、骨の起るものは大貴である。光澤あれば人の尊敬がある。

【2】天府——日角月角が起らねば天府がない、あれば此部を一名王府ともいひ、官吏となれる又その安否をも主る所である、此部に骨が起らねば天府が枯燥してゐるから官吏となるの道がない實業界にあつても上役とはなれない。

【3】房心——師傅の道の有無を見る所とする、師傅とは支那では昔幼き皇帝を御教へ申す役目であつたのである。故伊藤博文公が、舊韓國の皇太子の太師となつた如きものである、骨起るものは房心があり人の師となり、骨起つて黄なる光澤のあるものは國師となる、左は文によつて仕へ右は武によつて仕へる。骨が起らねば房心がない。

【4】父墓——や、左右に寄つた部分の、この部が凹んでゐれば暫らくの間でも父母の墳墓がないその骨の高低により父墓ともなり、上墓ともなる、父墓は左右父母祖先の如何を見る所である。骨肉の起るのは大貴である、先祖よりの祀りが正しく、その徳も亦子孫に及ぶものである、光澤

あるものは子孫が澤山あつて家に満つるほどである。豐滿なのは父母の力を得て世に出られる、偏平なのや缺陷あるものは父母の力がない、又子を傷け、子孫に力となるものもない、黒子あるのも同様である。前にも云ふやうのに此の父墓のみならず額の狭いものは父母の力を得ない、兄弟が澤山あつても兄弟の力も得ず、皆自力の人である、或は此の額のもは庶出の人である。額の角なのは狭くとも謹嚴である、圓きは柔和であり、時としては酒色に強い人となる。女子の額の廣きは再縁する人である、母方に必ず再婚の遺傳が具はつてゐる、尤も額の廣いのは豎に長いのと、横に廣く見ゆるのとがあるが、何れにしても再婚の相である、額の廣いのは智能の働きを意味するので男勝りの意味があり、従つて夫との間が圓滿に行かず再婚するやうになるのである、然もその相は天に二日ある象となつてゐるのである。

【5】上墓——左右、前者に同じ前者を祖先とし、之を父母とする、その部の凹んだものは上墓がない、従つて父母の墳墓の吉凶が分る、黒子、缺陷あるものは枯燥せるものは父母を合葬することができない。

【6】四殺——これは「軍門」又は「龍骨」などいふものと同じである。軍人なれば地方師團の將校など、又は手足の病などを見る所である、骨起るものは地方官となつて出世をする、平滿にし

て光澤あるのは一生物に缺けることがない人である。

【7】 戰堂——戦争の事を主とする、軍人などを観る時に必要の部である、骨起るものは師團長のやうな人になる、色好くして平満なるものは戦争に出でて勝利を得る人である、缺陷あるものは戦死をする。これらも只名稱が異なるだけである。

【8】 驛馬——邊地の側、弔庭の隅に位する緊要な部門である、髪が生へ際であり、光が満ちて壁を立てたやうなのがよろしい、色に澤のあるのは馬に乗るやうな吉運がある、缺陷あるものは馬に乗る吉運がない、それ故に此所を驛馬といふのである、こゝが塞り又は削げたのはよくない、即ち驛馬がない、却つて財を破ることがある印である。旅行、移轉などの吉凶はこゝを見るがよろしい。高低いづれにしても紅黄の色が動くは吉、黒き色がさせば財を失ふことがある、紫氣があれば三七日の中に身の移動がある、青黒い色がこれを貫けば遠くに出て不利を見ることがある、骨肉起るものは多く財を得、骨肉のないものは生涯貧寒である。さらにこの部の骨が落込んでると、天死することがある。

【9】 弔庭——驛馬と同じ所、喪服の事を見る所である、白き梨の花のやうな色が出れば父母の死に遭ふものである。若し微かに白ければ親戚の中に不幸がある、黒痣あるものは生涯悲しみを離

れることがない、色が青ければ催棺殺といひ、自分に大難の振りかゝることがある。

### 三、司空部位九個

第三 司空、額角の前——第三の司空は額角の前にある、前者から三分乃至五分のところこゝから左右に

上郷、少府、交友、道中、交額、重眉、山林、崖邑、隱賢。

と並んでゐるが、これも強ち並べすともよいものである、「山林」隱賢」などいふ所は髪が生へた所である。司空はその中央にある、天中を總理大臣の位とすれば、天庭は各省の大臣であり、司空はその次官の位である、支那では天官三公を主とると云つて居る。骨起つて光澤あるものは三公九卿に任ずるとある。骨が頭部の横から起るものは、三位四位に至るとある、色の悪いものは凶事の驚き恐れがあり、黒き光は悪死をする兆である。すべて司空に悪い紋があるのを忌み嫌ふのである、この部は頭全體の骨が上下より合ふ所である、従つてこの部の凹んだものがいくつもある。黒痣あることも不吉である、赤氣が印堂を貫いて起れば百日の中に凶死することがある。

【1】 頭角——額角はまた公卿の位、骨起るものは即ち額角で司徒太傅の位とあつて、今なれば貴

族院議員となり、博士となり、大學總長となるやうな位置である、色の吉凶は色の紅黄なるもの、大吉、黒色は悪死、額角に豆のやうな赤色が出ると刀難劍難、金氣の難で死ぬことがあるとする。

【2】上卿——これも書記官、助役、實業家なれば重役、學校の校長のやうな役につく所である、人によつて此部の骨が起れば上卿となるのである。骨起つて光澤あれば必ず貴顯の御傍に仕へる人となる、赤い色がさせば横死のことがあり、缺陷あるは官職、重職がない人である、即ち上卿のない人で、その名稱もない、色悪しければ家を離れて遠方に漂浪することがある。

【3】少府——神官僧侶の位、骨肉起るものは大寺院の住職となり、大神社の神官となつて榮えるそれも僧形の人に限る、色悪しきものは職にあつても職を失ふものである。黄色がさせば貴い人の見出しに預つて出世をする、僧形であつても骨の起らぬものは「少府」がない。

【4】交友——朋友の位をみる所である、骨肉起つて色の黄なるものは交友も親密で強いが、缺陷あるものは一生親友といふものを持たぬ人である、色悪しき時は朋友との争ひがあり、色の青白い時は外に婦人を愛して私通密通のことがある。女も同様である、色が赤ければ、愛人は別れ話を持出すものである。

【5】道中——行路の事を見る、此部に骨が立てば一生の行路も安全である、平滿ヒツクは一生門庭の外に出ることがない、缺陷あり、色が馬の肝臟のやうであつたならば、不慮の災難のために道傍に死することがある。

【6】交額——福祿の有無を見る、色好きものは福祿があつて大貴である、黒痣及び缺陷があり色の悪しきものは貧苦を主とする。

【7】重眉——勇健の位を見る、人の勇にして力あるや否やを知る所である、骨起るものは小貴であるが、猛けきこと虎の如く、性行の一致しない人である。缺陷あり色悪しきものは怯懦カクナヤにして貧賤であり、一生發達しない人である。

【8】眉中——修業の道の如何を見る、僧形の人にして此部に骨起るものは僧侶、宗教家となる人である。

【9】山林——山野の象を主とする所である、また富貴牧畜の事を見る所である。骨起つて横に司空に接するものは地方長官となり、或は地方に大牧場を營むものである。骨が山林に入れば大知識となることがある。これを一名崖邑と稱する、開けば即ち貴を主とし、狭ければ即ち貧に破れる人である、へ額の角の鬢に入つたのが大吉であるのは山林が廣いからである。女子の目に立つて

狭いものは賤婦となるのである、光澤があれば山林の利益があり、色悪しければ山林の損害がある。又は山林の中で災害に遭ふ。青年が登山して死する時などは此部に缺陷があり、且つ悪色が現はれてゐるものである、黒痣あるものは山林に入つて蟲や獸の害に遭ふ。山林に力のないものはその人に勢力がない、大事に委されない人である、大金を委した爲に損害する如きは、山林に力のない人であるからである、凡そ人を使ふにはまづ此部を見、此部に力あるものを採用すれば間違ひはない、山林落ち凹んだものは使つても信用の出来ぬものであるから警戒しなければならぬ、此部では又周囲の人物の善悪を見ることが出来る。黒い色がさせば四方に反對者が居る。黄色があれば四方安静である。黒い色のさす時遠方に行くと災害がある。

#### 四、中正部位七個

第四 中正、龍角に接す——中正は印堂の上、前者より三分乃至五分ほどの下位、龍角に接してある。此部には

龍角、虎角、牛角、輔骨、懸角、斧戟、華蓋、(刀背、福堂、郊外)

などの名稱がある。その中最も用ゐられるのは「福堂」である。「華蓋」や「彩霞」は眉の形の名で

ある。それを横に並べてあるが、それは只説明的のものである。中正部は郡僚の事を主どるとあつて、今日なれば郡長、それも今はないから町村長、縣會議員などの位につけるかどうかを見る所であり、また一般の官位を見る所である。骨起るものは貴く、頭部の横より骨の起るものは高等官ほどの職を得られる。骨起つて色の潤澤なるものは官職にあり、缺陷あるものは官職もなく人の上位にも立つことができない、若し黄紅色が棚雲のやうに額を横に貫くものがあつたなれば高官に陞ることが出来る。應は六十日か九十日の内に現はれるものである。

【1】龍角——これも權貴の位を主どる所である。骨があつて肉が端美であり、眉の上に稜々龍角の如く起るものが龍角であり、無いものは龍角でない、此骨の起るものは公使大使となつて海外に出ることがある。女子がこれを得れば貴族の妻となることがある、紅黄の色が貫けば恩寵を賜はることがある、形が蓋のやうで色が蚯蚓のやうであれば嫉妬に魂を焦す女である。尤も此の相は孤獨をなすことがある。初めは榮華、後に寂漠たるものである。

【2】虎角(虎眉)——將帥の位を見る所である、骨肉起るものは將官となる人である。光明あるは吉である。これを一名疑路と稱する、出行の吉凶を見る所である、色好きは行つて宜し、色悪しき時は慎しみてまつべく、黒痣ある時は出て災害を見るものである。此所を亦移轉の吉凶にも用

ゆる。

【3】牛角——權貴の位ありやなしやを見る。前の龍角、虎骨など、同じものである。従つて統率の權、重役、技師長、軍人なれば將官等の權を見るものである。これを亦辛角とも名づける。凡そ此の牛角なるものは皆貴相である。故に骨の起るものは角のあるのであり、骨のないのは角のないものである。骨起れば必ず將軍となる人である、骨肉ともに起れば華族に列する。

【4】輔角——職分の高下を見る所である、前者に同じ、輔骨の大なるものは職分も大きく、小さいものは職分も小さいものである。缺陷あるものは職分がない、(人に使はれるだけである)。

【5】懸角——これ又官祿の位を見る所である、また元角、支角などと稱する、骨起るものは三位にいたり高貴の官を得られる。前者と同じ場所で只一、二分の相違があるだけである。或は黄色のさすものは七十日以内に朝廷に召し出されて高官を拜することがある、總理大臣に任ずる人など此色が現はれて居るものである、骨が起つて角あるものは食祿があり、角のないものは大官を拜されない。

【6】斧戟——兵器の役人、武勇の職などの有無を見る、骨起るものは官につき、缺陷して色あしきものは戦に出て死することがある。

【7】華蓋——正邪の事を見る所である、眉の骨とも云ふ、福堂と眉との間ともする。骨起つて頭部の側面に至るものは富みて長壽である。此の骨は皆角がある、手を以て之を探ると恰も刀の背に似てゐる。福祿を主どり、之をまた厄門といひ皮部とも稱する、短かく縮まれば刑獄の難に遭ひ壽命も短かいものである、淺薄なのは凶、缺陷あり、又は色悪しく、或は黒痣ある者は暴死する事がある。枯れたる色は貨乏な商人である。

【8】福堂は眉の上全體の稱である。

### 五、印堂部九個

第五 印堂、刑獄起る——印堂は眉と眉との間である、此部には印堂に次で

刑獄、蠶室、林中、酒樽、嬪門、臥枕、劫門、巷路、青路。

などがある。印堂は一面の表、内は心に應ずる所としてある、故にこれを君主の官とも云ふのである。その骨は高く圓いのがよい、こゝに神明出づれば眼も清く、謀慮も正しい、耳が鮮かであれば技巧も明らかであり、鼻が隆ければ即ち名譽も高いのである。口が方(まつすぐ)なれば倉廩に財も満つる。印堂がかやけば即ち神明のあるわけとなる。此の部を一に又闕庭とも云ふ、凹んだ時

は關庭と稱する、又印綬官祿を見るところである、印堂の間が高く、光瑩あるものは財祿を得る、更にその間が広いものは三位の官に上る人である。旁に黒子や瘰癧などあるのは不吉である、凡て此部は財官の事を見る所である、故に明らかに潤ひあるのをよしとする、青氣の出るのは不吉である、川字の紋のあるのは妻を尅し、或は妻を働かして食ふ人である、此の部だけ平面鏡の如きものは富貴兩全である、紋が亂れて横はるのも凶である。

【1】刑獄——印堂に次ぐ所であるとするが、何れも眉間のあたりである。形の如何によつてこのやうに稱へるのである。此部は刑厄の事を主とる、また額路、交鎖、家獄なども稱する、凹んでゐれば家獄である。家事をも主とる、色悪しきは訴訟の厄がある、平満にして潤澤なるものは一生刑獄のことが起らない、色が常に不滿なるものは多く憂ひがあり、缺陷あるものは悪死する事がある。

【2】蠶室——女の勤めのことを見る場所である、やはり眉間である、此部が平満にして光澤があれば家門蠶室によろしとあるのも支那の古い家庭工業を云つたからである。また婦人の貞潔か否かをも見る所である、平満光澤あるのはよろし、色が悪しければ妻は嫉妬深くして不良である。

【3】林中——道德の如何をみる所である、平満にして光澤あるはよく、道德がある、缺陷あり、

或は色悪しきものは凶である。

【4】酒樽——酒色の如何を見る所である、色悪しきものは酒で身を破る人である。

【5】精舍——僧道の位を見る所であるから、通常人に必要がない、平満色澤あるものは名僧知識となる。尤もその精舍は目尻の方をも云ふ、この部が凹んでゐれば「精舍(寺)」をなす人で早く妻子などを失ふものである。

【6】顰門——顰門は眉の尾であつて、謂ゆる魚尾奸門と同じ場所である、此部は妻の位の如何を見る、豊潤にして色よきは妻に災ひなく、缺陷するものは妻が惰懶である。色悪しきものは妻が多病である。乾枯せるものは妻がたえず枕についてゐるものである、色の紅潤なるものは妻に喜慶がある。

【7】精舍——劫路ともいふ、目頭の下である劫財即ち財を奪はれることのありや無しやなど見る所である、骨肉起るものは色を好み、婦人のために金銭の空費する人である、(即ち劫財である)。然し盜難に逢ふことはない、黒子痣あるものは常に盜賊の被害に逢ふ人である、悪色が發すると強盜に襲はれることがある、劫門に青黒の色の現はれるのは最も凶である。その部が青黒なれば盜難に逢ひ、遺失すればそのものは出ない、凹んでゐれば精舍をなすのである。

【8】青路——私路出入の吉凶を見る所である、移轉旅行の吉凶をも見る所、色に光澤あるは出入とも吉である、色悪しきものは凶、または厄難がある。或は青路を人の公けに出入する所とし、公路を私に出入の所とする。青路も巷路も同じ場所で眉尻の上である。また「歸來」「遷移」など稱する所も同じ。

【9】巷路——出入の所とする、色、淨て平なるものは出入して福祿があり、色悪しきものは出入して凶事がある。巷路に暗氣が現はれると旅行中、又は航海、汽車杯にて難に逢ふ事がある。人の移轉の時は此の部を見る、色よければ移轉してよし、色悪しければわるし、移轉の方角はその人の五行によつて極める。

### 六、山根部位七個

第六 山根、太陽に對す——山根部位を横十位としてゐる本もある（太清神鑑の如き）が、今日十位は必要がないやうである。これらは何れも故人が様々に名づけたのを横に配列したものである。又此の中には今日あまり必要のない、出家道師の事などが多く加へられてある。偕、山根（鼻の附根）は太陽に對して居り、鼻の附根から大體眼に列んで横に行くのである。山根は勢力を主どる所

また兄弟、田宅、根基、婚姻の事を主どる所である、山根凹み斷絶すれば厄多く兄弟がない、あつても力となる者がなく、狭くして尖り、又陥り、低きものなどは孤獨にして貧窮の人である。又人の財力に浴することができない、此部がわけて低ければ夭折するか、若くば二十七八、三十六七才に一大災難に逢ふものである。此部は豊滿にして高まり、中正に接するのがよいのである。缺陷黒子、痣、紋理などあるのは皆不足を主どる兆である、運氣が此部に當ると災害破財などがあるものである。鼻の上を一名玉衡、または延中と稱する、或は奇骨の伏起するものがあれば、種々なる幸福があり山根が高ければ朝野に名聞のある人となる、若し窪み陥り、薄ければ情淺く識識はれて心の奥底が表面に現はれてしまふものである。又大事業と云ふものが成り立たない、大に事業をせんとする人など若し此部が陥つてゐるなれば事業は成就しないから中止させた方がよい、又共に力を盡す人でもない。山根が鼻梁と連なり、豊隆して起り額とその高さが等しければ大事業も成り、或は大軍大將にも至る人である、或は骨が起つて鈎股のやうになり、上に角があつて更に双の背のやうになり、鬢に至るもの、或は月狀の骨があるものは大將軍、元帥となる人である。

【1】太陽——太陽、中陽、少陰、大陰、中陰、少陰は皆眼である、然しいはゆる三陽三陰を目の上下ともする法もあり、左眼下を三陽とし、右眼下を三陰とする法もあり、相法の書必ず一致し

てゐない、所が「相理衡眞」に虚虚子の誤を辨する説として、次のやうに云つてゐる。

天の日月を以て太陽太陰とする、人の左眼を以て太陽とし、右眼を以て太陰とする、之はいつも變らぬ法でなければならぬ、(人が南面した場合)、所が相法の書は眼の上胞(上瞼)を以て太陽となし、下胞を以て太陰とするものある、又下目ぶだを以て三陽三陰とするものもある。陰陽の理が甚だ明らかでない。但し下まぶたを名づけて涙堂と云ひ、亦臥蠶(ぐわいさん)子宮など云つて主として子女の吉凶の有無を見てゐる、日月の氣を借りて三陰三陽に分ち、以て男女を定めるのはや、理に近い、故に之れを用ゐてゐる、上胞を以て太陽太陰の行運とするの如きは甚しい、今流年圖及十三部位について改正して用ゐるがよい。

と云つてゐる、今十三部位總圖には改正して用ゐてはないが部分的説明は略した所が多い。

因に三陰三陽とは、易の言葉で

三陰 巽(長女)、離(中女)、兌(少女)

三陽 震(長男)、坎(中男)、艮(小男)

の三つである。之でその人の子供の有無吉凶を見るのである。さて眼下の左を三陽とし、眼下の右を三陰とする、下まぶたが起つて光澤あれば皆吉である。たとへ子のないものでもその部で子

の吉凶を云へる。臥蠶多きものは子孫に吉である。目ぶたに黄色あるものは陰徳のある人である、青色がさせば憂ひがある、白色は喪がある、黒色は病がある、赤色は子女との口舌がある。眼下が枯れて黒くなり、網のやうな紋のあるものは多年悪事を行つて子孫の絶ゆるものである、老年になつて孤獨となる徴でもある。

【2】 奸門——奸門は眼尻である、その部が低ければ奸門である、奸門は陷門の意である、高ければ「天門」と呼ぶ、然し普通その部を奸門に稱へてゐる。光澤と肉とがあれば妻は賢い、及び福祿もある、紋理相交れば淫蕩を主とする、また男は外部に婦人を蓄へる、女は私通があるか又は夫婦の縁がわかる。色が黄紅であつて光華があれば美貌の妻を得る、乾枯してゐると妻子を尅する又十字紋のあるものは妻が自殺をする。結婚の時この部の發色を見、美色が出てゐれば吉とする悪色は凶。

【3】 魚尾——も之も前と同じである、魚尾も奸門も同じものであつて、魚尾とは眼尻が魚の尾のやうになつたを云ふのである。

【4】 天倉——奸門に接する、謂ば奸門、天門の別稱である。この部の肉が豊満であれば天倉があるわけとなる。此部は人の出入を主とする所である、移轉、旅行の吉凶なども見る所、又貧富を



主どる、豊満にして明潤なのはよろしい、陥ち凹み力のないのは福祿がない。

- 【5】天井——天倉と同じ、財帛の位、平満なるものは富み、缺陷、黒痣あるものはよろしくない
- 【6】天門——眼尻より米かみの間とするが、奸門とさして變りはない、相違するとしても二三分の所である、人の開闢吉祥のことを主どる、好き色の發するのは吉慶のことがある、色の黒いのは婦人との争ひ事がある、此部は廣いほどよい、廣ければ天門の開く理であるから、四方より友人の力を得、兄弟の助けがある、狭いものはそれが無い、又結婚の吉凶を見る。又開業、移轉、新規事の開始などには此部を見る、色よきは吉慶がある、悪色は失敗破滅がある。
- 【7】元中(玄武)——修行の路のよしあしを見る米かみの所とする。

### 七、年上部位十一個

第七 年上、夫座に參す——「年上」は山根の少し下、鼻の四分の一の所、丁度眼の下を横にくぎる線である。それに續いて

夫座、長男、中男、少男、外男、金匱、禁房、盜賊、書上、玉堂。

があるが、これは必ずしも横列してゐるのではない。年上は壽命と疾病とを見る所である、骨肉起

れば一生無病、缺陷あるものは災ひが多い、痣あるものは貧苦である、此部が陥つたものは妻を防げて縁がおそい、青色あるものは一年の病氣がある、更に凶なるは死する、白色が兩眼を通れば一年後に悲しみのことがある。半月様の黄色は吉、赤色が天中にまで至れば争鬭のことがある、黒氣指の大きさのものが出れば凶惡のことがある、更に鼻の孔が冷たいやうなれば死する。

【1】夫座——鼻の附根から目頭の下のあたり、「淚堂」と稱する場所と同じである。大體女は左を夫座となし、男は右を妻坐とする、つまり右が妻坐で左が夫座となるのである。夫婦間の吉凶、婚姻、又は懷妊、胎兒の男女等を極める所である。光澤があれば男は美婦を得女は好偶を得る、黒痣あるものは男は妻を妨げ、女は夫を妨げて縁がない。この部の落込んでゐるものは貧弱な結婚をする、時には出來合夫婦の縁である。

【2】長男——長男の好惡を見る、夫座の隣りであるが、此部が落込んでゐれば「精舍(寺)」をなし高まつてゐれば「光殿(家)」をなす、平満なるものは吉である、此部が陥り、又痣あるものは長男を失ふ、乾枯せるものは子がない、臥蠶(目ぶち)厚くして光潤あるものは五六人の子がある臥蠶紋の破れたものは子孫がない、又あつても之を尅して凶である、(同居せねばよい)。三陽(右の目の下)赤ければ必ず男兒を生み、三陰(左の目の下)青ければ必ず女兒を生む。臥蠶が紫色

なれば必ず貴い子を生む、臥蠶が豊満にしてゆつたりとしてゐれば男女とも子が多い、淚堂（眼の下）が坑になり、陥つて溝のやうになつたのは常に悲しみが絶えない、臥蠶が黄紫の色で瑩があり、目の下及眼尻の下（金匱）が光明なれば子孫は必ず貴い。

【3】中男——次男の吉凶を見るのである。目の下の中央、色のよいのは力を得る、色の悪いのや缺陷あるものはよくない、黒痣あるものは次男がない。又此部に豆の如き赤色が發すると一月以内に夫婦の争ひがある。

【4】少男——少男、即ち三男の位、同じく目頭の下であり、その善惡を定める、色の光明なのは吉、枯れて干からびたやうなのは兒がない、婦女に黒痣があれば夫を妨げて縁がうすい。

【5】外男——四男以下又は孫を見る。黒痣があると父母を妨げる、此部を一に外宅と云ふ、目の下である。色が平満なるものは、男は貴い家から妻を得、女は貴い家から夫を迎へる。目の下は凡て夫婦子孫の關係である、この部を一に臥蠶紋とも云ふ、結婚の善惡にも見る、子女の結婚吉凶をもこゝを中心にして見るのである。春三月に青黄色あるものは兒を儲ける象である。男子に黄色があれば女兒を生み、女子に黄色があれば女兒を生む、白色なれば子は死し、赤色なれば子は病む、皆四季の色によつて觀察するのである。

【6】金匱——金銀の有無を見る、これは横に記されてゐるが、實は淚堂の下、小鼻の上である。又財産の有無如何を見る、平満にして肉あり、しまりあり光澤あるものは金銀が多い、光の閃めくやうなのは更に寶が多い、枯れて肉が陥つたのは財に乏しい、黒痣あるものは常に盜賊に逢ふ、黒氣が弓のやうに出ると凶事が九十日以内に起る、又財産上の破滅などがある。

【7】禁房——今では家庭の締りのことを見る場所である、これも小鼻の傍である。肉に締りあり平満光澤あるものは、盜賊が家に入らぬが、こゝに青氣が立つと盜賊に逢ふ、白色が糸を引いたやうに出ると姦淫の事がある。（「太清神鑑」では内禁として口舌を主とする所としてゐる）。

【8】盜賊——竊盜の位、これも小鼻のつけ際である。横に並んだ所ではない、金櫃とか、禁房とか盜賊とかいふものは同一場所の別稱である、此部に青白色が出れば人に物を盗まれる、色がうす暗く夕立雲のやうに出るのは人の物をぬすむ。失せ物など青白色が出れば盗まれたのであり、黄紅色は自分の遺失であり、色よければ失せ物も出る。

【9】遊軍——目頭から下つた肉の下部、法令の上である、遠任差遣の事を見る、地方への派遣任命などである、色の平満にして美なるは地方に行きて幸福がある、色の黒いのは遠くに行きて不幸がある。

【10】書上——目尻の下一寸程の外學問の事を見る所、文章才學の有無を見るのである、この部は額と稱する頬骨の上、こゝを又「家運」といふ。潔靜にして色の平滿なるものは吉、不潔なるもの、又は黒痣あるものは學問がなす。

【11】玉堂——家庭が平和か否かを見る、頬の上、「家運」と同じ、黄なる光が通れば家庭は平安である。黒き色は不和がある。

### 八、壽上部位十一個

第八 壽上、甲圓に依る——鼻の頭の少し上である、此部は横に

甲圓、歸來、堂上、正面、姑姨、姉妹、兄弟、外甥、學堂、命門。

とある。さて壽上と云ふのは生命の長短、並に仕事の成否を見る所である。鼻の上、四分の三の所とする年上も壽上も大して變りなし、他の觀方にある鼻の吉凶と變りはない、隆いものは長壽である。低く陥いたものは生命が短かい、色の青いのは死ぬる、白い色が點々梅花の如くに現はれ、白氣が印堂と眼を貫くものは五七日の中に死ぬる、輕きは一年以内に死ぬる、鼻の白いのは父母の病氣を現はす、忽然として白色が現はれて一日中消え失せず、大さ銅貨の如きが、春三月のうちに現

はれならば大災難がある。黄色は吉慶を主とる、赤黄が糸の亂れたやうに出ると、千里の遠くに出づることがある、こゝを又た怪部と名づける、色の出ようによつて種々な惡魔的の怪しいことがあるのだと云ふが、今日では信じなくもよ。

【1】甲圓——一名財府、また財庫とも名づる、法令の起る所、こゝから肉が垂れ下るやうになつたのを「甲櫃」と稱する「甲櫃」は又高櫃で高い金庫があるとの意である。財産貯蓄の有無如何を見る所である。豊かに隆いのは財が多い、平滿で光澤のあるのは一生衣服が足りる、乾枯せるもの缺陷あるもの色の暗いものは一生財に乏しい、骨の起つて明かなるものは金玉財寶が家に滿つる、黄氣の發するものは一週日の内に財を得る喜びがある。法令から下つた肉がなければ甲櫃もないわけである。

【2】歸來(往來)——人の往來を見る前と同じ場所である。色澤が紅黄なれば行人は一月内に來る乾燥してゐれば行人は來ない。

【3】堂上——親族の關係を見る所、頬の上、「家運」と同じ、色が紅黄なれば親戚相聚るの喜びがある、色が滯れば親族の集りがない、白い色がさせば父母兄弟を喪ふことがある、梨の花のやうな白くしてうす青い色がさせば叔伯伯母などを喪ふ。

【4】正面(端正)——人の性質の如何を見る、眼の下一寸三分の所である、即ち顴骨(顴)の眞上である、顴骨は權骨である。家族の運なども見る。色が燥き或は缺陷などあるものは性質がむつかしい、色澤があり端正なるものは性質がやさしい。

【5】紫氣——「太清神鑑」には此の位置がない、上は天中に連なり、下は中部及鼻頭を貫いて印玉紋があれば華族に列すると云ふのである、通常人には現はれない。

【6】姑。姨——姑は「しうとめ」妻の母、又は夫の母、姨は妻の兄弟(兄嫁など)である、左は姑の位右は姨の位とする。然しそれは何れでもよい、顴骨のやゝ下方、骨起つて色のないものは姑姨ともによろしい。枯燥せるものは姑姨が多病である、缺陷あるものは姑姨がない。

【7】顴勢(權勢)——權勢を見る所である、即ち顴の正面である。顴骨である。端正で豊澤なるものは權勢がある、低くなり陥つたものは權勢がなく運勢も弱い、關鎖の法と云ふのは即ち之である。顴は權勢の現はるゝ所である、顴が特に尖露して豊厚でないものは却つて權勢(運勢上)に反覆がある、顴が角をなして尖露してゐるものは性質が暴い、そして孤獨である。婦人も同様で三十二、三才以後孤獨となる、たとへ夫あるも夫を尅し、中年に死別する。又左顴骨を羅喉と云ひ、右顴骨を計尾と云ふ。兩方豊澤にして鈞合が取れてゐればその人は權勢あり且幸運である。

此の顴骨(顴骨)の起つてゐるのを關鎖ありと云ひ、自然に家起るが低陥してゐる如きは關鎖のないもので、一生衣食の充つることなく、災禍が多い。即ち顴の部分で凹んでゐる顔である。反對に尖り出張つてゐるのは前に云ふやうに孤獨なのである。それであるからこの部の凹んだものは兄弟もない、あつても力とならぬものである。此部が青白色の見ゆるのは兄弟に傷害の事がある、勤めをしても三十二、三才で失職する。此部に青紫色の圓く印の如く珠の如きものが現はれると百二十日以内に身分の昇進がある。

【8】兄弟——こゝも亦兄弟の多少、姉妹の位を見る所である、顴骨である偏しすぎまりしてゐるものは姉妹を刑する、端圓にして光澤あるものは兄弟何れも幸運で力となる、乾燥せるものは兄弟力なくして四方に散る。兩顴が白く鶏の子のやうなものは單身で一世兄弟も子もない、青白色、暗くして慘枯せる色は兄弟を尅傷し、同居すれば凶を起すものである。

【9】外甥(外孫)——甥や孫の事を見る、目尻の下一寸三分の所、平滿にして光澤あるのはよい枯れたやうに暗いのはよくない、又甥や孫もない、凡て父母、兄弟、妻子、姑姨、姉妹、伯叔、各部とも青色の上るのは病ひを主どる、白色の出るのはこれを喪ふ悲しみがある。

【10】學堂——耳の前に當る、文學の有無を見る、豐滿にして明潤なのはよい、骨が隆く端正にし

て深いのは文學があつて聰明である、骨が陥つた如く、又は塵によこれた如く、或は黒痣あるものなどは學門に淺い。

【11】命門——耳のM字形になつた前骨である、骨が起つて耳に入るものは百歳の壽命がある。

### 九、準頭部位十個

第九 準頭、蘭廷正し——準頭は鼻柱である、此部には横に

蘭臺、廷尉、法令、竈上、宮室、典御、國倉、後閣、守門、兵卒、印綬。

がある。或は之を八位としてゐる本もある、準頭は謂ゆる中岳である。財帛宮である、財産の有無を見る、端圓平正、満ちて力あるのがよい。膽を懸け、筒を切つたやうなのがよいとは屢々人の説くところとす。準頭は圓いのがよいが、只圓いだけではだめである、小鼻のしまるのがよい。準頭齊ふものは心性も靜かである。準頭の薄く尖るものは心に毒がある、妻や小兒を尅する、小さくして薄きは貧である、大なるは人に害がない。準頭黄にして圓く「かんざし」のやうな光明が散らなかつたならば、三年以内に貴人に遭ふ、黄色が法令に至れば父母妻子に吉慶がある。白色の圓光が出れば水難があるか、身を縛られるやうなことがある。その事は六十日以内に現はれる。黄色が霧

のやうにかゝると貴子を生む、官吏は職がかはる、紫の氣が新月のやうに出ると位が陞り祿が進み田宅を得る、赤色が虹のやうに立つと官の咎めがある、或は火災盜難に逢ふものである。

【1】蘭廷——左の小鼻を蘭臺とし、右を廷尉とするが、實は小鼻が高くしまりがあれば蘭臺又は諫臺となり、低ければ廷尉となるのである。蘭臺といふのは台のやうになつた意で廷尉は低位で低いのをいふのである、中華人は文字の人であるから、このやうに美稱したので、始から二つに區別してあるのではない。又右を金櫃とし、左を金甲ともするが小鼻が縮らねば金櫃でも金甲でもない、小鼻がく、つたやうに判然して張つてゐるものは注意力も深く、活動性にも富んでゐるから、自然物事が成就する、且聰明にして見識がある、無名から有名になり、無一物から大きな身代を作るものは此部の組織が明らかである。色の慘たるのは凶を主どる、半月の中に驗が現はれる、これは福が去て禍の來る兆である。白い光が圓い光と連なると年内の中に水難がある。黒きは涙を流すことがある赤い色は一ヶ月の内に喜び事がある。廷尉の運は尙さらきびしい。

小鼻の張のあるのはよいが餘り張りが強いと只儲ける事溜めることのみを知つて散ずることを知らぬものになる、強慾にして同情心も薄い者になる。反對に小鼻の縮りのないものは金錢に對する執着も薄く、財祿も少い、小鼻の薄い人は子供があつても多くは力となるものがない。但し

人中が深ければ此の欠點を補ふことがある、又小鼻に力なくだらりとした人は色情に強く女難の相があるが、他に救ひがあれば此の缺陷を補ふものである。

又小鼻の大きなものは抱擁力も大きく、志操も高いが小鼻の小さなものは氣も小さく、規模も小さい。技藝に達して社會に名をあげるものは此の小鼻のはつきりしたものにその類例を見ることが多い。俳優の伊井峯氏、目玉の尾上松之助君、女流では歌澤寅派の家元相摸さんなど皆此の小鼻が張つた人々であつて、之は又その人氣と共に少なからぬ財祿をも所有するしるしである。女流教育家としての第一人者である、下田歌子女史も實によく小鼻が張つた人であつた。かくの如き小鼻は金櫃、金甲の完全してゐるものであるから婦人と雖も少なからぬ財祿を持つて一生幸福に送るのである。然し又こゝは男性の位にもなる故に、婦人としては勝氣であると同時に夫縁うすく、或は獨身にて一生を通すやうなことになる。

【2】法令(號令)——法令は小鼻のわきの皺である。號令、金縷、壽部なども云ふ、施設號令の位である、法令の明らかに深く廣いのは、その人の威令が行はれ、衆人も感服するが、法令のないものは人も信服せず、威令も行はれない。従つて人の上位に立てない、法令が幾つにも分れたものは號令が幾つにもなつて首尾一貫しない。又之を酒舍といふ衣食を主どころとする、紋

が、若し口を過ぎれば壽九十に至るものである、口を過ぎないものは中邊の年齢である。法令は長く地閣(顎)に至るほどよい、男女團樂、夫婦偕老の契がある。従つて夫婦縁のよし悪しなどを見る所とする、また富も得られる、目の下から黒色の法令に入るものは、妻は連年病氣をして床についてゐる、黄色を見れば病氣は直る、春夏の間に法令に黄色が現はれると父母妻子に吉福がある、紫色に會へば更に吉である。上役又は上長の貴命が九十日の中に下る、そこに骨が起つてゐると高位、高官にのぼる。色が黒ければ災厄がある。然し小鼻に黄色がさしてそれが法令、印綬(耳の下)に連なつてゐると、必ず身分の向上、昇進がある、法令のないものは貧窮にして長生しない、法令が唇に入つたのは騰蛇唇を鎖すと云つて云つて餓死するものである。然らざれば夭折する。

【3】齋上——宅舎の吉祥を見る所である。法令の上の肉で、家が繁昌するかしないかを見るのである。法令の肉が高まつてゐれば臺所も賑やかである、豐滿にして色よきは家舎も吉である、缺陷あるものは家舎がない、或は大きな家に住めない、此部の色悪しき時は移轉も凶である。新宅がよろしくないのである。

【4】宮室——支那の生活法による主人の住居としてある。同じく法令の上の肉である、今では家

庭の事を見る。竈厨かまど即ち竈上と同じものである、色の黄にして明らかなのがよい。此部の陥つたものは謀事成就しない。色悪しく缺陷あるものは早く妻に死なれる。

【5】典御——食祿の位を見る、法令の上の肉で口の上に垂れたやうなものは部下又は下女、下男が多い。缺陷あるもの、枯燥かっくわしてゐるのは一生下女下男がない身分である。

【6】屯倉——之も食祿を見る、前者の別名である平満なるものは食祿があり、缺陷あるものは貧窮であり、此の上に青色が發すれば官の咎めがある。

【7】後閣——寄宿、食客の有無を見る、前部の少し後方である、缺陷あるものは他人の家に寄宿し、或は食客となつて一生を送る、平満なるものは食祿がある、白色がさせば悲しみがある。

【8】守門(地倉)——十二宮の法などに地倉とある部である、普通小鼻の横に記してあるが、實は口の左右の下の肉の高まれる所「地庫」といふのと同じである、又中門とも云ふ、之も財祿の有無を見る、平満にして肉のあるのはよい、缺陷や黒痣のあるのは悪い、一生財祿のないのを主とする。青い色が點々すると口舌がある、白色は九十日内に死ぬる、黄色は吉である。

【9】兵卒——文字通り兵卒になる人、或は下級の官吏となる。頬の下のこけた人である。

【10】印後——支那では各個人が兵卒を使用するので、その印綬いんじゆがある、即ち印綬は兵卒を使用する所に同じ。

るか、その吉凶を見るのであるが、我國の風俗には合はない、然し此の部が美はしく色もよければ軍人となつて出世するとも云へる。又學問の有無をも見るのである、耳の前の骨、「學堂」と稱する所に同じ。

### 十、人中部位九個

第十 人中、井部に對す——人中は井部に對し、それから

帳下、細厨、内閣、小使、從僕、妓堂、嬰門、博士、懸壁

の九個があるが、「太清神鑑」は八位としてゐる。俗人中(鼻の下の筋)は人の心性を見、又子息を見る、長くて深いのがよいが、女子は然らず、溝血の象であるからよく疎通するのがよいとするのである。大低長きを欲し短かきを欲しない。俗に鼻の下の長い人は長生すると云ふのは、かう云ふ所から來てゐるのである、鼻の下が長ければ人中も長い。人中が斜めになるのもよくない、即ち唇が尖つたやうに廣いのはいけない、まつ直に廣いのがよいのだ、鼻の下の幅は自分の指二本を横に並べたほどがよい、指一本ほどの狭いのや、縮まつたのや、物言ひ、笑ふ度に唇が鼻に着くやうに狭いのはよくない、三十二三才、三十六七才に至つて夭死する。人中が左に傾けば父を損じ、右に

傾けば母を損ずる、人中のねぢれてゐるものは、心もねぢれてゐる、深く直く平らで廣いものは忠信にして子もある、斜めであり、淺いものは天死するか孤獨か賤しいものである。上が廣く下が狭いものは、人情をたがえても貯蓄する人である、上狭く下廣いものは、巧計にして財を破る。黒痣あるものは他人の子を養つて子とする、紋理あるのはよろしくない、肉色の青黒氣に近いものが出れば十ヶ月の中に失職か水難かに逢ふ、白色が横を過ぎれば毒に中ることがある、黄色があれば遠方より好信がある、人中及び口の邊が黒ければ七日の内に横死する。

【1】井部(仙庫)——仙庫とも云ふ、田宅の貧富如何を見る、人中の左右であるが、人中と變りはない、平滿なるものは田宅が吉である、缺陷などあるものは貧窮である。黒痣あるものは溺死する【2】帳下(帳子)——帳厨即ち勝手方の豊か貧しきかを見る所、鼻の下である。狭いのは勝手方もわるい。廣いのはよい、紫色の錢の如きものが出づると二十日の後に高名を現はす、陰徳の功があつて災に逢つても咎がなくてすむ、赤色の豆の如きものが出づれば一週日の中に妻と争ふ。

【3】細厨——飲食の豊かであるか豊かでないかを見る、これも鼻の下である。平滿にして色よきは飲食の十分あるものである。缺陷あるものき平生膳の上が乏しい、發色の悪しきものは飲食のために死ぬる、白色は飲酒などのために死ぬる、黒痣あるものは餓死する、黒色は囚はれの身な

どになつて食物に窮する、黄色は暴飲のために急死する、紅紫色を發すれば吉である。

【4】内閣——これは深い家に住むか淺い家に住むかを見る所である、同じく鼻の下である。豐滿なるものは深い家に住み、色悪しく缺陷あるものは淺い家に棲む。

【5】小使——使用人の多少を見る所、準頭部の典御と同じ所である。

【6】妓堂——舊式支那人の生活として金のあるものは平常、音楽をやる女即ち妓女や妾を蓄へた、その有無を見たのであるから、今日の時世には合はないが、妾の有無を見る所としてもよい然しこ、が平滿であるから妾があり、缺陷があるから妾がないとしたのでは當らない。この部は前の「小使」又は「典御」と同じであつて、家が豊かであれば妓女をも蓄へたしたのである。

【7】嬰門——これは家の飾りを云つたらしい、即ち家運の繁昌でありやはり法令であるが、今日之を採用する必要はないやうである。

【8】博士——これも支那式で醫師や卜相家の位如何を見たものである、同じく法令の下、缺陷あるものは業がないとする。

【9】懸壁——これも何うでもよいもの、頬の下、法令の後方高峻にして、色の美くしいものは家に金銀や寶石が貯へがあり、色の悪いものは金銀や紙貨を失ふとするのである、支那の舊式生活



から考へたものである。

### 十一、正口部位十個

第十一 正口、闊門に對す——口から横に十位であるが、一書には八位になつてゐる、十位は

闊門、比隣、委巷、通衢、客舍、兵蘭、家庫、商旅、生門、山頭。

であるが、これも同じもの、異名が澤山にある。まづ口は元壁とも云ひ、金銀の有無を見る所である。唇は弓の如きがよい、下唇は網の如きがよい、稜角、唇の上が富士の山のやうな形をした所は分明なのがよい、男の口の廣いのは食祿が澤山にある、女の口の闊いのは空閑を守る。又夫を尅する故早く夫に離れ、或は夫縁が幾度か變る、平正にして稜角をなすものは信義のある人である。唇薄く尖つたものは多く嘘をいふものである、口角が上に向ふものは食祿の餘りあるものである。口角の垂れるものは衣食に不自由する。唇薄くして小さいのは聰明で、よく物事の是非を分別する、唇の厚いのは福があつて心性も沈靜である。唇の青黒いのは死を主どる、口邊の黒いのは七日の中に横死する、目の下に黒い色が發し、形が帯の如く下つた口邊に入るものは百日以内に死ぬる、赤い色が口邊の兩わきに接して現はれると二年以内に食に窮する、赤色が上下して口を過ぎると十日

以内に口舌がある、赤色が點々として口に入ると争ひ事訴訟などがある、唇の紅色なのは吉慶がある。

【1】 闊門——闊門ともいふ、口の角である、又口をもいふ、支那人の内房、即ち婦人の生活の深淺如何を云つたものであるから、今日には當るものがない、即ちこゝがよければ内房が深く、悪ければ内房が淺く、そして變があると云ふのだ、上流の生活者には少し當て、いい所もあるが、通常人にはさまで必要がない。

【2】 比隣——近所の交際がよいか悪いかを見る所、口の傍とする、平滿なものは近隣に徳がある色悪しく、又黒などあるものは近隣郷黨などの力を得ない。これを又「道路」と稱する。顎の横のあたりとする。

【3】 萎卷——比隣よりは少し範圍が廣く、郷黨などの關係を見る、法令の下のあたり、肉あつて色よきは交際が好い、發色の悪いものは郷黨と親しまない、又盜賊の難に逢ふことがある、ここに骨の起るものは賊の害をうけない。然しここに骨は起らない、顎の横骨である。

【4】 通衢——また劫門ともいふ、(太清神鑑には此部がない)、前者と同じ場所、色よきものは出入に利がある、色悪しきものは失財がある。

【5】客舎——賓客の位を見る、これも頸の横骨の所、平満端好なるものは客となつて喜ばれる。黄色が現はれ、ば立派な客が来る、缺陷あるものは見る人に喜ばれない。

【6】兵蘭——家で使ひ歩きの人を使用するか何うかを見る所で、支那の生活法には會つてゐても我生活法には合はない、此部は用ひなくもよい、然し此部に勢ひあれば多くの人を驅使する。頸の横骨。

【7】家庫——また家倉とも云ふ、前者にほゞ同じ、これ又倉庫に穀物の澤山あるか何うかを見る所である、平満にして色好きは倉に滿つる（衣食が足る）、缺陷あるもの、色悪しきものは家が空虚である。

【8】商旅——商賣して利があるか何うかを見る、腮骨のあたり、豊満にして色よきは利がある、色あしきは利がない。此部が豊厚なれば商をなして巨利を博する。

【9】生門——生殺を司どる所とあるが、之は奴隸のみた支那では必要だが、今日の我國風には合はない、「太清神鑑」は此部を除いてある。そして「山頭」なるものがある。

【10】山頭——出入の吉凶を見る所、耳のたぶの下のあたり、色の平満なるものは險難がない、缺陷あるものは災が多い。移轉、旅行などの時は又この部に發色がある。

## 十二、承漿部位十個

十二 承漿、居宅安し——承漿とは下唇のすぐ下である。此部には

居宅、孫宅、林苑、下墓、庄田、酒池、郊廓、荒丘、道路。

がある、之を又六位としてゐる本もある、今九位として説いておかうが、同一の場所もあることに同じ。楮、承漿は飲食を司どる所である、之をまた酒地とよぶ、その中に肉の起るのを酒海といつてゐる。黒痣あるものは飲酒してよろしくない、亂酔によつて死することがある。又水に落ちて死することがある。平満なるものは多く飲み多く食ふ、闊さ指を容るゝ位のはよい、尖り窄く、偏り、陥つたのはよくない、色が悪ければ酒によつて痼疾を發する、肥えて厚く、兩邊に骨起り、中心が坑をなし、上に聳ゆるものは大酒家である。骨起るもの官途につきて昇進する、缺陷あるものは水に溺れて死ぬる、承漿の骨（齒の骨）が高く盛り上るものは、富財身に餘るものである、（齒の骨が上らなければ下齒が凹み上齒と喰ひ違ふことになる）黒色が出ると酒によつて死ぬる、冬に黒色の出るのはよいが、常に黒色あるものは酒によつて死ぬる。此部を一名藥部と云ふ、陥るものは藥を飲んで藥がきかずに死ぬるものである。

- 【1】居宅(祖宅)——又別に孫宅がある、祖父や孫が家に居るか何うかを見るので、之も支那の生活法には合ふが、今日の我國風には合はない。光潤あるものは吉、平滿なるものは美しい家がある、缺陷あるものは祖父の宅がない、孫も同様であるとする、但し此所で田宅の有無如何を見てもよい、糸のやうな紅色や亂紋のあるものは家屋敷がない。
- 【2】外院——牛馬田庄の位といふ、唇の下の角である牛や馬を飼ひ、又は田畑があるかどうかを見る所で、之も支那式の生活法から命じたものである。單に家屋敷田畑と見るもよい、平滿なものは田宅があり、缺陷あるものはそれがない。
- 【3】林苑——山林や園などの有無を見る、今日では花園があるとか、山林を所有するとかにして見たらばよい、平滿なるものは山林がある、缺陷あるものにはそれがない。前者に同じ。
- 【4】下墓——墳墓田地の位とする、自分の墓地があるかどうかを見る所、光澤のあるのは吉、豐滿にして色のよきも吉、大きな墓所がある、缺陷あるもの、色の枯れたものなどは墓地がなく、あつても石碑を建てない。此部に白色が現はれると酒のために死ぬる。
- 【5】庄田——田業の有無を見る、即ち土地の功利であるから、地主にはあてはまる、平滿なるものは富貴にして田地より利が上り、青黒い色がさせば土地についての憂ひがあり、乾枯せるはその

の土地が塵のやうになるか役に立たなくなる。又土地についての争ひ事がある。

【6】酒池——承漿と同じである、豊かに満ちたものは衣食が足り、紋や痣のあるものは酒によつて命を落し、或は酒によつて病氣となる。

【7】郊廓——以下三つは頰骨の下方、少し凹んだ所 鶏 犬 猫 牛 羊の位 缺陷あり又色あしきは六畜(飼つてゐる獸)が損ずる。

【8】荒丘——墳墓の所、下墓と同じ、但し此の部の色がよければ貿易で利を得る。

【9】道路——人の往來を見る、色の好いのは吉。

### 十三、地閣部位十個

十三 地閣、下舎に隨ふ——地閣は額である、地閣は地角とも書く、此の部を七位にしてゐる本もある、十位は

下舎、奴僕、確礎、坑塹、地庫(地倉)、陂池、鸞鴨、大海、舟車。

である。額は坎宮、水星、田宅宮、北岳など色々に云つてゐる、地閣が廣ければ田宅も大きい、端平にして厚いものは貴にして富む、狭くして薄く、或はそげて小さいものは貧賤である、額の左右

が肉が重なるものは富貴である、必ず大きな家屋敷を持つてゐる、中年晩年に至つて衣食も蓄積される。破れたものは破れた家に住む、顎長くして肉の重く厚いものは良妻を得、財祿を積む、瘦せこけたものは祖業を破り、又父母の力が無い、地閤のないものは一生家の基が立たぬ、地閤だけ長くして他に他點がなければ老年になつて住所がなくなる、尖つて肉のないものは成しては破れ、破れては成すものである。たとへ富家に生れても晩年になつて財を失ふ、或は紋理のあるもの、中凹んで缺陷のあるものなどは官の咎めをうけたり土地をなくしたりする。左邊に黒色が起れば家の使用人が死ぬる、右邊に黒色が起れば使用人が病氣になる、或は病氣、損失のことがある、紅黄色のさすのは喜び事である、富家では土地を増し、通常人は財を得る、或は相場の利がある、赤色は田宅や官の事を司どる、青色の現はれるのは凶で大きな憂ひ事がある、黄色が地閤に入れば家業を進める喜びがある、赤紫色は家畜が死ぬる。

【1】 下舍——外房の多少を見るとする、支那では金持が地内に幾つもの家を持つてゐたので、かういふ部位もあるのだ、今日では別荘を持つや否やを見る部位としてもよい、缺陷あり、又黒痣ありあるものはそれがない。

【2】 奴僕——使用人の多少を見る所、前の兵蘭と同じである。

【3】 破礎——家に石うすがあるかどうかと云ふのだ、之も用ゐなくてよい。

【4】 坑塹——家の周囲に堀があるやうな大きな家屋か、又それがないかと云ふのだ、之も用ゐなくてよい。但し此部に悪色あるものは高所から落ちて死ぬる。

【5】 地倉——一名地庫、倉庫の満つるや否やを見る、顎にく、りがついてゐるかどうかで地倉の有無がきまる、く、りのあるのは地庫がある。家が富むか貧窮かを見る所であるから、此部は豊満なのがよい、缺陷あるものは富まず、左右に骨あるものは官に仕へて吉、又物事が成る。

【6】 陂地——顎のく、りの後方、肉の少し凹んだ所、大いに凹めば陂地をなす、陂地とは破れたる堤で洪水に浸つた田圃、頬の下肉が凹んでゐるからである、この部に肉があれば「地倉」をなすのである。又陂塘とも云ふ、又池、水田などの有無を見る所で、若し此部に黒痣あれば池沼などに落ちて死ぬる、又黒色が發すれば凶事がある、口舌争ひ事が起る。

【7】 鴨鷺——鷺や鴨が居るか居ないかを見る、之も支那の生活法としてその様な生禽を飼つてゐたからである、然し凹んでゐれば鷺鴨などを飼つて暮すやうな貧乏人であるとする、或は使用人の多少を見てもよい。色あしきは凶、色よきは吉。

【8】 大海——前に同じ、凹んでゐるから大海である。又水厄の位赤色がさせば水に溺れて死ぬる痣のあるのもよくない、黄色は海河を渡るに吉である。

## 八相要訣

## 一、骨

骨は四體の幹の受くる所、清滑にして長細なのがよろしく、内外肉と相應するがよろしい、若く骨が冗重にして粗滯、而して肉の厚きものは運の濁るものである、骨が堅立して輕細し、而して肉の薄きものは寒（運命が寒い）に近きものである、大抵骨は聳立するのがよく、肉がこれに應ずるがよし。

○金骨は細く、肉滑らかにして綿の如きものである、この如きは多く貴にして財祿がある、○木骨は瘦せて青黒色である、頭部の前後粗大であれば窮厄が多い、○水骨は兩頭（前後）尖れば富貴言ふべからざるものがある、○火骨は兩頭粗なれば徳なくして賤しい、○土骨は大にして皮が粗厚なれば子孫繁昌富貴の身となる、骨あつて氣があらされると齡三十を越さない、○胸骨の露はれたのは辛苦が多い、○顴骨（頬骨）の高いのは夫婦縁の變る恐れがある、人の富貴は骨法にあり、憂

喜は氣色にある、骨が堅硬であれば壽命があつても楽しみが少い、體肉軟弱であれば楽しみがあつても壽命がない、骨細く或は重いものは晩年になつて福祿が来る、早く發達すれば却つて災が多い、骨の陷るもの（面部）は早く父を失ふ、或は自身壽命が無い、額部の骨の陥入せるのは最も悪い。地倉（顎の左右の下地庫とも稱す）に骨の起るものは多藝である、骨の不明なものは四十二才をすぎない、骨は又三輔學堂の好いものが多い、三輔學堂といふのは額の骨、左右の顴骨（頬骨）を云ふ、即ち額を祿學堂とし、左右の頬骨を官學堂と云ふ、最もこの部には色々の名がある、何れもむつくりして屏が伏したやうであり、後方に連なるものは英雄の士である、若し骨の前後揃はないものがあるれば、中年までは發達するが、その後は破れ、財祿も得ない、腦後に骨のあるのは吉、或は指大の骨が二つ上部にあれば位人臣を極める、一つあれば人の上位に立つて功名を擧げる、又二つあるものは名僧となる、また連珠の如き骨があれば壽命が有り譽れが有る、骨多くして肉少きものは尊上、肉多くして骨少きものは卑下、兩顴骨を面となす、一名輔骨とも云ふ、若し白青の氣色を見れば立身寧からず、赤氣を見れば災があり、黒氣を見れば病難がある。

## 二、三停三才

○眉の上髮際に至るまでを上停となし、眉より準頭（鼻の尖）に至るを中停となし、鼻下より地閣（顎）に至るを下停となす。

○上停を天となし、父母の貴賤をつかさどり、中停を人となし吾れとなし、兄弟妻子となし、下停を地となし、田宅財寶となす。

○上停（額）は天なり、故に張らんことを欲する、下停（頤）を地となし、故に方ならんことを欲する、中停（鼻）は人なり深廣ならんことを欲する、然して兩目は日月なり、故に明らかならんことを欲する、さらに天（父母）は貴ならんことを欲し、地（田宅）は富まんことを欲し、人（吾れ）は壽ならんことを欲する。

○頭尖れば父母の力を得ず、地閣尖れば産業力を得ず、鼻尖れば善終の力を得ず。頭は圓からんと欲す、三者缺くるところあれば各々その和を得ない。

○三停若し穩かならざれば「神氣」を看るがよい。

### 三、目

○木は春をつかさどる、春は肝を主どる、肝は目をつかさどる、目は「仁」を主どる、長生の行

をなすところである。額の上、目を主となし、眉を客とする、目に力があれば學をなして成就する、眼に角がなければ作す事が成らない（目は三角なものよい）、目下に赤色が出れば人と争ふことが有る、目が必ず光れば、志氣が高強である、目尻に黒色が出ると七十才にして必ず命を終る、牛のやうな頭のもが虎のやうに物を視るのは富貴無比である、蜂のやうな目をして豺のやうな聲をするものは武將となつて名を擧げる。

○點睛が下に近いものは隱者である、目が下つて睛の枯れるものは、女子は夫を妨げ子を害する、目の紋が耳に入るものは、老來權威を得る、坐して斜めに見るものは思想が正しくない、目に光彩のないものは人の後塵のみ拜してゐるものである、點睛が上に近く、下によるものなどは劣相である、赤紋が眼を貫けば死する、目が左右相似ざるものは異母兄弟がある、猪のやうな目で常に物を見つめてゐるものは刑福いづれかに相倚るものである、羊のやうな目で物を直視するものは、妻を妨げ子を害する、鷹のやうな目で狼のやうに視るものは嫉妬心を抱く、羊目四方（羊のやうに黒い小さな目で四方が白いもの）は外夫を宅に入れる（養子相續である）、猿のやうな眼のものは多く窮し、魚のやうな眼のものは凶である、眼がねぢれて視るに屈強なもの、目頭に涙をためてゐるもの、眼の下に一文字の筋あるものなどみな作すこと分明するものである、眼の下の臥蠶紋は貴き子

孫を生ずる、眼が光つてかねて媚（和ぐ）があれば積徳の人で陰報がある、青色が中央にあれば七八日の中に災ひがある、眼の中に赤い砂のやうな色が出ると、刑法にかゝり大事に及ぶ、眼が出ても光りが現はれなければ官吏となつても妨げがない、兩眼不分明なるものは齡三十八をすぎない、眼が反り頬骨が高ければ一生心にかなふ事がない。眼尻が兩邊に垂れ下つてゐると一生の間に幾度か夫婦縁が變る、眼中に白黄の色を生ずれば、旅に出て死ぬる。

○黒い暈が兩眼にかゝれば三日の中に財を散ずる、黒い霧が長く眼の上に居れば、家族中に横死するものがある、兩眼が凸出しかねて面貌のないやうなものは平生行き路がなく、心に稱ふ時がない、眉目ともに長く、眼が漆の如くであれば富貴の身となる、眼下に肉なければ一、二子を失ふものである、亦心に陰毒がある

○眼には神光を求める頬骨がこれと相應し、晴の黒いものは貴く、眉目みなあらはれて、黒晴また深く、必ず陥らざるものは極貴である、眼下の肉の方圓なるものは廟堂の人となる、さらに子孫が隆昌する、視ること遠き（深い意）ものは智慧が多い、視ることいやしきものは心に毒がある、平らなるものは徳が多い、視るに力のないものは事を共にすることができぬ。

○黒氣が兩眼に入れば六十日にして亡ぶ、ただ右の眼に入れば百二十日にして亡ぶ、左の眼小

ければ妻を妨げる、右の目小さければ夫を尅する左の目小なれば先に父を損じ、右の目小なれば先に母を損ずる。右の目は父に屬し、左の目は母に屬する。

○虎のやうな目で鶯のやうな唇をして居り、腹が牛のやうであれば貪利あくなきものである、兩目のあたりが白く、その白色が鼻の孔まで通ずれば百日の中に頓死することがある、重瞳は宰相の位、目の大なるものは貪愛である、近く觀るものは遠き知識なく、鶏のやうな目、蛇のやうな目のものは盜賊となることがある、龍の目のやうで黒暗大きく、鳳の目のやうで長く髪に入り、猴のやうな目で白多く黒少く、目圓くして金色あるなどは貴い、目多く青色なるものは眞の貴人である、目は「神」の遊息する所である、目の小なるものは終に財祿をなさない、目三角なるものは智慧あるも心に毒のあるものがある、左右の臥蠶部（目の下の肉）豊起して光彩あるものは大富をなす。

○女人の目の下青黄なるものは平安、赤黒きは産厄、目の上下堂青黒なるものは肉親に病難がある、女人は姑子供にある兩目に神光のないものは病がなくして病人に似てゐる、これを「神去る」といふ、六十日の中に死する、左の目を三陽となし、右の目を三陰とする、眉頭を太陽とし、中陽、少陽と順に並び、いづれも子女兄弟などの運を見る所であり、かねて我が財寶である乃ち我が「財祿の庫」であるこの部に赤色があると火難熱病に逢ふことがある、少しあれば少しの災、大きくあ

れば大きな災ひ、また毒も重い、目が忽ち赤く腫れ、或は誤つて損すれば十日を出でずして、憂ひがある。左目頭の下が青ければ一ヶ月の中に父兄弟長男の不幸がある、左目下の下第一次が父、第二次が兄、次が男兒である、右目頭の下が青ければ母、次が伯母妹、次が女兒などに不幸がある。

○眼常に笑を含めるに似たものは心裏不良である、兩目頭の下に白氣が出で、紅色を相合ふて直下するものは悲しみ事がある、然らざれば家庭がおだやかでない、若し丹色の砂が兩眼にそそぎ下白きものは久しからずして盜難に逢ふものである、目大にして、眉の小なるものは中年に災ひがある、紫紅色印堂に現はれ直下して兩目の頭に及ぶものは、孕産子孫の喜びがある、先に三陽上の上を見、青氣はこれ男、後に三陰上の上を看、紅氣はこれ女である、若し黒白の色がこれに宿れば産になやみがある。

○腫が上り眼が尾を引けば、多くは輕忽の人である、眼に濛氣を生ずれば「天羅」目に入ると云ひ、淺ければ財祿を失ひ、深ければ家を破り、或はその身を亡ぼす、目に浮氣があれば、欺心あつて多く貪慾である、及び終には家を破る、諸位明白なるものは終身過ちがなく、男女とも一重目はこれを「桃花殺」といひ、常に色慾を愛する、目の赤いものは殺生を好み、兩の目の尾を「奸門」ひ、又妻位を見る所であり、或は奸盜牢獄の事を主とる處とする。

#### 四、口

○火は夏を主とる、夏は心をつかさどる、心は舌を主とる、舌は禮を主とる、夏は豊盛の時である、口はこれ唇を主とり誦堂と名づける、口を開いて睡るものは命が天滯する、唇の薄いものは財が歇滅する、舌の短かいものは財が足らない、唇が青く厚いものは命が久しくない、口を水星とする、水星が地を得るものは唇が必ず方形である、唇に紋理多ければ子孫が必ず貴い、黒子が唇にあれば飲食によつて命を失ふことがある、口に唇のないやうなのはかへつて兵馬の權をにぎることがある、黄色が口にのぞめば思はぬ財が手に入る口ひろく舌が薄ければ歌樂を好む人である、唇四字の如きは多財にして智がある、口が螺の如く縮んでゐるものは常に楽しんで獨り歌つてゐる、口を開いて齒をあらはすものは、基なく失ふ所が多い、語つて唇のうらの見ゆるものは財があつても終に存しない、口せまつて齒を見まはすものは老年になつて立つ所がない、唇の下に黒氣があれば、冬なれば春に至つて亡ぶものである、口の上に紫紅があれば財を貪り色を好む、口が腹の如く縮むものは子が多く嫉妬心を抱く、唇細く横に長ければ言葉多くとも信用されぬ。口が火を吐く如きは子がなくして貧寒である、口を張つて物を食ふものは無法にして輕忽である、唇口よろしからざる



ものは、その言葉も信用されぬ。口邊に媚なきものは、よく人のアラばかり探したがるものである。舌の長いものは貴く、鼻の頭に及ぶものは華族に列せられる、世徳に舌の長いものを悪しき意に取つてゐるが、これは手の長いものを悪しき意を取ると同じで、相法上では大きな誤りである。手短かく腰にも及ばないものは、遂に成すなき人物である。これは男女とも同じであり、女子はわけて晩年孤獨である。

○唇せまつて齒を露すものは、親戚朋友を顧みない、唇に黒子あるものは子を害する口部に黄氣起れば三年の内に勳等位階をうける、常人は財を得る、唇の紫なるは衣食が足りる、唇の赤いのも亦よろしい、上唇の先頭が黄明になれば一層福がある、唇の端正なるものは語は正しく且文章がある、唇上下相當すれば、必ず學問を好みて文章がある、唇の下薄く下厚ければ、財も化して塵となる、口薄く兩角垂れば、多く人の欺くところとなる、口の小さなものは美食を攝り、大なるものは粗食に甘んずる、齒が上つて唇の下を掩ふやうなのは、刑傷にあひ家財を破る、唇紅にして齒白ければ衣祿が豊富であり、多藝多才にして福がある。

○未だ語らずして唇をまづ動かすものは、心性奸邪にして精神足らざるものである、女人の唇齒相合はざるものは、産を妨げ夫を尅する然らざるも初縁には破れるものである、下唇が上より長け

れば女人は夫を妨ぐ、上唇が下に過ぐれば多くは阿呆である、口邊の黒色が地闇(顎)を貫いて生ずれば中毒して死することがある、上唇が齒の蓋をしなければ終身富まず、又常に野心を抱いてゐる、上唇が下と合はなければ身に傷害を受けることがある、唇紅色にして面より赤ければ五十七才以後發祥する、口の薄い人と提携することはできない、人の毀譽を被る、口大なるは言葉多くして虚妄のことがある、口の尖れるは戀愛に競争する、縦理(豎筋)が口に入るものは饑餓するほどの貧乏をする、口をつまみあげたやうなものは口小言がたえない、女の唇が紫なれば、早く夫が死する、赤子を妨げる、唇黒色のものは旅に出て途中で死ぬることがある、下唇の長いものは食事にいとがしい、口頭の小さなものは貴く、法令紋が口に入るものは食祿を得ない。

○婦人の貴なるは唇紅色にして齒の白きにある、たとへ美貌のものであつても齒の黒いものはつひに賤しくなる、唇うすく齒のととのひたるものは、富貴にして是非のことがある、孕婦は左眼下が青色にして口に至る、これ男兒である、右眼下が紅色にして口に至るものはこれ女兒である、黒氣が口に從つて耳に至りものは七日のうちに亡ぶことがある、口をめぐつて青色なる女は嘘いつはり語るものである、口部の青いのは百二十日にして災ひが来る、白きは九十日にして財を破り、黒きは三年の中に父母を失ふ、唇寒くして齒のあらはれるは惡相である、その唇、舌とともに紅色な

るを視、その口正にして横角ある、その齒清白にして且平長なる、かくの如きは何れも貴なること疑ひがない。

## 五、鼻

○金は秋を主どり、肺をつかさどり、肺は鼻を司どり、鼻は「義」をつかさどり、「收藏の倉」とする、即ち財寶の宮である、而して鼻は面の主である、小鼻のよくしまつて起れるを「蘭臺」といふ、即ち「臺」の如き形なりとの意である、聲名が美なればその鼻は端妍、聲名が傳はるはその鼻の高昂なるものとする。鼻が截つた如くであれば富は限りがなく、鼻柱薄ければ運は一所にとゞまる、鼻が缺けたやうなものは運も薄劣であつて大なる成功はなし難い、他部が良好なときはそれを救ふこともできる、鼻梁が小さければ、膽力志望も小さい、鼻が廣くて長ければ技藝非常の人となる、鼻が膽囊をかけたやうなものは財帛萬積する、鼻が偏するのは妨げがない、多くの人は左右いづれか一方に傾いてゐるのである、その上に左右の小鼻が缺けてゐると子縁に浅い。鼻が正しく、且獅子の鼻の如き形であれば、その人は聰明達識である。鼻が囊をく、つたやうなものは、老年に至つて吉昌する、鼻柱が折れてゐると、四十七八才に厄があり、女人は夫を失ふことがある、鼻柱

が曲つてゐるものは男は多く淫慾が強い。

○鼻にホクロ（黒子）があれば子の力を得ない、鼻孔が天を仰げば貪色厭くなき人をなす、鼻の不明な人には位がない、鼻に堅筋あるものは他人の子を養ふことになる、鼻のみひとり面中に抽んでゐるものは、終に孤獨となる、鼻毛が外に出てゐると人の誹謗を招ぐものである、鼻柱の折れたものは親の力を得ない、又作すことも順を得ない、鼻頭が小さければ意志も淺小である、鼻の小さなものは、徒らに財祿を求めぬがよい。

○山根（鼻のつけ根の處）青ければ三日の内に貴人に逢ふ、山根紫なれば、七七日のうちに財を得る、山根黄なれば七日のうちに遠方から喜びが来る、山根白ければ多くは疾厄がある、さらに黄に白きは病がある、つねに黒斑くろまだらのあるものは宿疾がある。山根平にして美、及び奇骨あつて伏起してゐれば男子は學藝をなして家を富まし、或は貴妻を得、女子は貴夫を得るか、より以上の家柄に嫁し、又はその夫發達して生家の榮譽に超ゆるものである、いはゆる玉の輿に乗る婦人といふものは、ひとりこの印堂の高きものである。

○まづ骨法を見て第一に着目すべきはこの山根である、山根の勢ひあるかないか、それによつて人の性格、運勢の一般も推測し得られるのである、山根の上が破れなくば一生忠信の志を抱懐する

山根に黄色が出で、鼻梁を伴はり、地閣(顎)に及ぶものは、冬なれば春に至つて官祿を得る。山根の骨が缺陷してゐれば子孫天散する。山根が白ければ五十日以内に法事がある。山根黒ければ六十日以内に刑傷のことがある。山根赤ければ二七日以内に大災がある。

○山根の骨が陥入してゐれば、次に人中(鼻の下の二本の筋)を看よ、筋が分明でなくとも鼻の上に堅筋があれば却つて孤獨でなく、一、二人の子がある。人相は只一處にのみ止めて吉凶を云ふべきものではない、他に缺けたる處があれば、又他の補ひがある筈で有る。それによつて吉凶を斷じなければならぬ。

○年上(かんじやう)(鼻の中央部より少し上)青ければ十日以内に財を得る、年上赤ければ三年の内に死する、年上白ければ外に不幸がある、年上黒ければ人に怨まれる、年上黄なれば二十日以内に婦人の喜びがある、年上紫なれば七日以内に貴子が生れる、年上紫にして長く交れば喜び事が来る、年上紅色に紫赤が交れば訴訟事などがある、ボツ／＼螢のやうに赤色が現はれると刑罰に逢ふことがある。

○年上の發色(はつき)の長短に依て、その期期の長短を極める。——長さ一分は一年、二分は二年。三分は三年とする、そのやうに發色なるものは小さく細かなものではない、従つてよく着目する要がある。

ある。さらに年上黒ければ男子は妻女を妨げる、及び孤獨となることがある、まして父母の疾病喪亡がある、年上壽上(壽上は年上の下部)黒ければ病者は四十日以内に死することがある、年壽上青ければ長病または宿疾がある、年上壽上に時節に應ぜざる色が出たときは吉が少く凶が多い。時節に合はぬ色といふのは、春の赤、夏の白、秋の黒、冬の青の如きものである、壽上が常に黄色なれば自ら發祥して且長壽である、婦人壽上黄なれば懷孕して平康を得る、壽上白ければ半月の間に小兒の死することがある、青ければ家を破る。

○萬物の發生するのは土にある、土の位は鼻の中央にある、五色の氣なるものは、或は年上壽上に起り、鼻の先に及ぶものである、一方は印堂に上る、準頭(じゆんとう)(鼻の尖端)四季ともに光を生ずるものは吉である、準頭黄にしてその色左右の小鼻に及ぶものは、希望立ちどころに達せられる、黄色が鼻のめぐりに現はれば三日以内に大財を得る、準頭黒色なれば百二十日の内に亡ぶ、準頭白きは九十日以内に亡ぶ、準頭赤きは百二十日以内に災厄があり、官刑にかかることがある、準頭青きは九十日以内に災ひがくる、準頭赤く鈎の如くつながるは財を損ず、また失財がある。

○小鼻のしまりのないものを「蘭臺(らんたい)」なしといふ、蘭臺とは美祿で、即ち臺を意味する、小鼻にその臺なくして流れ、たと法令のみあるものは官吏となつて進級しがたい、臺なくもその鼻が裂け

る如くであり、または筒を切り、膽囊をかけたやうなれば官職がある、鼻の大吉なるものは凡そ十種程しかない、即ち相法上で云ふ、(一)龍鼻、(二)獅鼻、(三)虎鼻、(四)羊鼻、(五)牛鼻、(六)截筒鼻、(七)懸膽鼻、(八)伏犀鼻、(九)猩猩鼻、(十)蒜鼻などである、この中獅鼻といふのは山根年壽とも略平低である、そして鼻の尖即ち準頭のところが小鼻を境として鼻が三つに割れてゐるやうに見える、その鼻を持つたものには武將にいくらもある。虎といふのは山根の大きなものであり、龍鼻といふのは準頭部がことに目立つて勢ひをなしてゐるものである。

○鼻高からざれば山に靈なきが如く、眼深からざれば淵の清からざる如しといふ言葉がある、然し前の獅鼻は決して高いといふ方ではない、むしろ低い方であるが、これは準頭の形でその缺陷をおぎなつてゐるのである、然し鼻はまた面の主山であるといふ事を考へなければならぬ、鼻が縮らねば大なるを要し、低ければ廣きを要する、高くとも細く小さきは大吉をなさない。鼻高くして狭ければ兄弟を尅して少くする、鼻たぶ平らにして媚なきは愚痴である、鼻柱が劔のやうに尖つたものは營々碌々として遂に孤獨となり、鼻の前に向へるもの、小鼻の流れたものなどは他に吉福があつても、財は手に止まらぬものである。

## 六、耳

○水は冬は主どり、冬は腎じんをつかさどり、腎は耳を主どり、耳は智をつかさどる、冬はそれ萬物伏匿の時であるが、智も亦深く藏れる、故に耳に現はれる、耳は大ならず小ならぬがよい、賤劣人の耳は多く小さきものである、労働者の耳は小さきものである、これは智を必要とせず、只力を必要とする表現である、耳に毛が生ずれば壽命は限りがない、耳に輪りんのないのは學問がない、輪といふのは耳の外廓の上部である、下の方を「廓」とする、故に呼んで輪廓といふ、又上部を「天輪」といふ、耳の孔の塞がる如きは智の淺きものである、耳の輪が尖れば多年辛苦する、尖らずに高いのは生涯安樂である、耳が田字の如き形せるものは名を青史に残す、耳の輪に肉が貼りつけたやうなれば金玉が堂に滿つる、耳の邊に媚なき如く色がなければ心拙にして性がいやしい、耳に輪廓がなければ、久しからずして財囊もからになる、頭部大きく耳が小さければ神經的で心がねぢれてゐる、「命門めいもん」(耳の前)に痣あざがあれば長壽にして智慧が多い、耳たぶに痣があればその子は孝行である。

○青色が耳に出れば、久しからずして官事がある、天輪に痣があれば百歳の間歡樂する。内輪に

痣があるのも位を生ずる、耳の穴深くかつ圓ければ、心虚にしてその天を識るものである、耳の根に二つの黒子ほくろがあれば、他郷にいつて死ぬる、耳赤黒くしてはまた粗なれば、他郷に出て住ふ、耳が薄ければ田畑を賣つて祖業がない、然し晩年になると自營して家を成す、肥えた人の耳下に白色を生ずれば、多くは病難災厄が起る、青黒の氣色が兩耳の下に出れば、人にうらまれる事争ひ事などが起る、耳が面より白きにすぎれば、名が天下に聞ゆる、また五十七年にして意を遂げる。

○耳を相するには先に色を見て、後に形を見る、耳の大小なるものは實はそれほど相法上に影響なき場合がある、色が最も大切である、白くして珠の如くきを最上の耳とする、そして肉のあるものがよい、肉あつて垂珠（耳タブ）が鮮紅なれば平生でも財祿が生じ、百謀百成する、然し耳の尖小なるものは多くは孤貧をつかさどり、弓の箭の如き最もよろしくない、團扇の如く左右の開いたのは、智識餘りある人をなせども、子孫には恵まれない、時には養子相續をする。

○耳が目より高いものは、他の資産をうけることがある、目より低いものは王侯にあらざれば乞丐兒とする、法の極をなすのである、耳が耳より高きこと一寸なれば、永く疾病貧困がない、耳は輪廓が分明して顔の方に向いたのがよい、後ろを向くものはたとへ長男であるともその家を繼がない、女子は外に出て働き、或は夫を妨げる、耳たぶの垂れたものは貴く、孔小さく、骨節の曲つた

ものは中々意志が徹らず、或は壽命を損ずることがある。

○命門の黒子は男子は聰明であるが、女は夫がない、女人の左耳厚ければ先に男兒を生じ、右耳厚ければ先に女兒を生ずる、女人の青黒色、耳よりかけて口に入るものは男兒を懷孕する、赤黄色耳より口に入るものは女兒を懷孕する、女子の耳上突るものは一生積財がない、中骨の外に反るものは作すことに成果を得難いが、輪の正しきはそのうれひがない、下の反るものは畜財がない、耳の輪と耳の前とに黒子のあるものは男子なれば女難がある、眼尾に缺陷がなければ害がない、左右の耳に甚しく大小のあるものは異父母がある、これは眉目等の大小上下を異にするのと同じである、左小なれば異父、右なれば異母である、耳の外に反るものは誠がない、内に深きほど誠實である、耳たぶのあるかなきかは父業窮乏のうちに生れる、又早く生家を離れることがある、一才から十五才までの運を見る、内輪外に出でたるは八九才にして生家を離れることがある、耳の前に三本の立筋あるものは、學道が成立する、神光が耳の後にあり、青色が左右の耳に入ものは、久しからずして父母に災がある、青黒色が左の耳から連なつて眉に及び、面を横切るものは災難にて死することがある、黒氣が耳から下つて顎に及ぶのも同様である、青色が耳から斜めに年上壽上（鼻の上）に及ぶものは父にあつては子、子にあつては父に災ひがある、或は母、或は又子、兄なれば弟、弟

なれば兄に災がある、姉妹もそれに同じ、又夫なれば妻、妻なれば夫とする、兩耳に忽ち赤氣が出れば十日の中に高所より墜落する。

## 七、眉

○眉は一名保壽宮とも稱し、壽命を見る處である、故に眉毛の長きものは長命すると云ふが、人に超えて長きものはたとへ長命するも、而も孤獨である、子孫はあつてなきが如くである、一利一害である。

○眉毛の平らかなものは尊貴の人である、眉が目より長ければ智慧のすぐれた人である、眉は寛廣にして清長なのがよい、左右に分つて鬢に入り、或は崖に新月のかくれる様なのは首尾豊盈する、初め凶なるも中年以後は達成する、高く額に居るものは壽命の永いものである、一名保壽宮と稱するのはこの眉の高きもので眉の低きものは保壽宮をなさない、眉の高きものは即ち眼胞の上の廣きものである、眉と目の間の廣きものは祖父の時代まで廣大なる生活をなしたものである、狭小なるものは祖父、父母ともに狭小なる生活をなしたものである。

○眉の間が黄なれば喜びが永い、眉が細く彎曲したものは學識が多般である、眉が硬く上に昂れるは意氣も雄強である、眉疎にして散するものは富を失つて後に貧となる、後に富を失たはずば即ち貧家に生れたものである、眉の上に立筋があれば女は夫を妨げ婿を追ふことがある、眉が鬢をすぎ生ずれば、(目尻の後にまで出る)心常に不足を抱く、眉濃くして髮厚きは、心賊わが精神を害して壽命を損ずるものである、眉墨の如きは兄弟七八人、次弟に夭折して遂にその生家を繼ぐことになる、兄弟あつても力とならぬ、眉が眼角を過ぐれば兄弟は五六人、目をすぎなければ兄、は三人、上に昇れるは兄弟一二人、左右が上下すると兄妹又は姉弟とする、また眉の筈の如きは兄弟八九人、眉毛婆婆として締りなきは男兒少く男女子多し、男兒ありても生育せず、或は夭折する、眉が目より短かきは孤獨、或は隱者の生活をす、たとへ兄弟あるとも同腹の子ではない。

○眉のうちに三紋があれば女は再嫁し、男は再婚する、眉中に黒子あるものは必す藝術がある、男子は妻を妨げ、女は夫を害する、眉毛の直立するものも亦同じ、或は又子を妨げる、然らざれば平生不利、運は二十八才より三十才に至る間最も不利をなす、眉毛が目に附いたやうなものは二十六才から二十九才不利、三十七八才また不利をなす、四十才以後や、平康を得る。

○眉弓の如きは善、眉毛左右に卷くは豪にして子は正當の權を得る、眉の重なる如きは勇健であり、眉と眉の連なるものは財祿を得難い、眉中に堅筋の紋あるものは酒に耽り錢を愛す、眉の心に

水字の如き紋あるものは貴といへども非命に死することがある、眉毛が倒生すれば平生是非のことが多い、眉毛の逆立つものは雙親をうらむ、眉の缺けたる如きは信義がない、眉の畫ける如きは一生の間妻の財によつて生活する、眉の上に骨があつて横に走るものは常に高志を抱く、眉が横に開いてひろきは官職について缺くところがない、眉の骨の高きは性勇を好んで非をなせども、眉毛の疎なるは勇あるに似て却つて憶病である、又自強自勝の人であつて永く人と交はることができない

○眉の上青きは遺失損害がある、白きは出入宜しからず、或は悲しみ事がある、忽然紅色が指せば三七日の中に口舌又は訴訟官訴がある、黄白なるは遠方の人に不幸がある、眉毛の長毫は高壽なれども、然も四十才以前にこれを生ずれば運命は停止する。

## 八、人中

○土は季の夏を主とる、夏は脾をつかさどり脾は唇を主とり、唇は信をつかさどる、萬物結實の月とする、人中は即ち土であつて、結實の象、人は胎生の始めまづ鼻を生じて「人中」に合ふ、「人中」合して鼻を生ずといつてもよい、故に物の聲を「鼻祖」といふのである。

○人中が赤ければ、人の誹謗がある、人中曲れば愛慾が深い、人中淺ければ多く財を破り、また

巨財を得がたい人中が廣く平らなれば子を養つて成らぬ、人中に横紋を生ずれば、他人に害され、或は水難に逢ふことがある、人中に白色が生ずれば七日の中に悲しみ事がある、人中短小なるものは子孫が夭折する、人中高厚なれば就職も永くはない、人中が平長なれば壽命に限りがない、人中が分明なれば正直神の如くである、人中に堅筋があれば子孫がない、人中に青白の氣を生ずれば反物の乖離（破れ）を見る、人中不分明なれば子の力を得ない、人中の二つの黒子は婦人は必ず雙生兒を生む、人中が青ければ十日内に喜びが来る、人中紫なれば、七日のうちに財を得る、人中黄なれば百二十日のうちに貴子を生む、人中の上狭く下廣きは巧計の人にして智あり、人中の黒子は養子をする、また終りを善くする、人中廣濶であるとも、中間が却つて高ければ晩年に至つて成功する、人中に痣のあるのは早く妻を娶る。

○人中は長くて深いのがよいが、女子はかへつてこれに反し、淺きがよい、深いものには子がない、故に名妓などと稱される美人、又は歌劇女優などには人中の深く長いものがある、これらは子なく夫なき相である。俗に鼻の下の長いものは長命するといふのは、人中の長いのを云ふのである、短かく鼻にせまりたるは短命である。鼻の下は自分の指二本を横に並べたほどがよい、これより狭きはよくない、三十二三才、三十六才に至つて若死することがある。

相に當つては音聲が最も辨じがたいものである、大抵は音聲の清潤にして快よく響くものを取り焦烈して沈濁せるのを取らない。音濁り澁るのを取らない。人大にして聲の小なるものは遠器（將來大なる人）ではない、人小にして聲の大なるは乃ち良器である。また形の五行にあたつて音の如何を辨別しなければならぬ、○金聲は韻長く清く音が響く、遠く聞いて潤ひあるものは則ち貴をなす、破れた如き聲は賤しい、○木聲は韻が條達する、初めは全く終りには散ずる、沈重なるものは貴い、輕ければ即ち賤しい、○人聲は韻清烈條暢にして潤ひがない、圓潤にしてゆるやかなのは貴い、焦破して急なるは賤しい、○水聲は韻清にして急長、且細かなるは貴い、重く濁れるは則ち賤しい、○土聲は韻厚重にして、源長く響亮たるものである、速く聞ゆるは則ち貴い、近く細いのは則ち賤しい、○音の五聲を以て論ずるときは又形類の如何によらないのである、たゞ聲には形がなり、耳で聞いて意を會するのみである、故にその理を酌んで、然る後に吉凶を考ふべきである。

更に○金聲は和潤にして木音は高い、水音は圓急にして火聲は焦げる如く、土聲は麤かろのうちで物

を云ふやうである。韻が丹田（腹）の中から出るものは富貴ゆたかである、夜半に聲を聞いて白日に形を看よといふことがある、語笑して面の赤くなるものはかくし事をしない、語笑して面の黒くなるものは心性に秘密を藏するものである。談笑して淡泊なるものは常に病があつて樂しまぬものである、笑つて媚なまかざるものは壽命短かく運の滞りがある、媚なまかざるものは、笑ひ聲に艶がないことである、語笑して哭するが如きものは老年に至つて孤獨となる、或は緩或は急に語るものは信義を失ひ憑たるところのないものである、忽ち見て高聲になるものは、言葉に來歴のないものである。

○男聲が女の如く、女聲が男の如きは、前者は妻を尅し、後者は夫の運を妨げる、多言多語、顛狂に似たるものは、老年に至つて小兒の如くなる、語を出ださざるに早くも舌を出すものは差し出口の多いものであり、且刑傷の難に逢ふものである。喉音が高く、一二里の先まで聞ゆるやうなのは壽命がある、濁が濁つて飛散するやうなのは賤しい、語の實なる人には病ひがない、あつても醫藥を用ゐない、常に體采を飾るものは病を恐れ、たえず藥を用ゆる、舉止溫雅にして喜怒に變じないものは、謂ゆる神のあまりあるものである、多くの財祿を招くことが出来る、言語が明瞭でなく、舉止倉皇とし、笑ふに似て笑はず、怒るに似て怒らぬものは、多く人の凌辱に逢ふものである。



## 一〇、手 足

八八

○手の臂は長いほどよい、世俗に「手の長いのは泥棒だ」などと稱するが、手の腕に比して短かきは一生涯なすき劣運の人である、臂の長きは財祿豊富なるものである。音聲は笛のやうなのがよく、頸は疎にして短かきがよく、頸は疎にして短かきがよく、足は厚くして方なのがよく、手足は厚くして長きがよい、又腕は足より長きがよく、立つては低く坐しては高きがよい、立つて高きは腕短かく足の長いものである。足の長きは賤しい腕の長きは貴い、賤劣の人は足長くして火箸の如きものである。

○指は節くれ立たず、春の筍の如く柔らかなるがよい、食祿萬鏡する（澤山に集まる）、臂が膝を過ぐれば貴人の提携に逢ふて、高堂に昇ることが出来る、掌に紋がなければ作事常に論あつて成らず、掌の上紋 指に入るは最も吉である、指掌に紋甚しければ却つて一生蹉跎たるものである、（つまづき事が多い）、手足糸の如く、葱の如くであれば終身榮貴する。臂が長ければ人に物を與へることを好み、臂が短かければ人より物を取することを好み、手赤く血の如くであれば富貴絶えず、わけて指の下の昂肉の紅色なのはよい、掌中の肉色と面の頬の肉色と一致するものは平生の活計平

安である、手に骨現はれて竹の節の如きは、衣食歇滅し、時によく時に悪く、財も散逸すること多い、作事も亦遅退する、子縁も悪い。

○指に鷲のやうの紋あれば淳善の人であり、手が猪の蹄のやうであれば志氣も昏迷する、兩足の薄きは多難であり、平たきは賤しい、手狭く長きは福祿が強く、手中に黒子又は紋痣のあるものはみな吉利をなす、手足を無心にゆるがしてゐるものは心落つかず、幅強身の定まることが少い、身長くして手の短かきは壽命五十を超えない、中年少しく意に稱ふことがあつても老に至つて零落する。指が尖細であり、或は男子にして婦人の如く委媚たるは藝能があり、或は音楽家となり、妙藝を有する、貴人の臂、滑らかなること綿の如く、直くして圓きは、男子は文學に顯はれ、先に兩度の婚をなす、女子は夫を妨げ、夫縁に浅い。

○左手の短かきものは學文がない、右手の短かいものは武がない、爪の白きものは淫を好む、剛堅なるものは貴氣、爪に皺あるものは勞苦の人である、爪の薄きものは賤しい、厚く肉あるものは貴い、示指偏すれば早年眼疾、頭腦 中指偏すれば胸部腹疾、無名指偏すれば腰部脚氣、小指偏すれば中風足疾などにかかるものである。

○掌の紋の深きものは吉、淺きものは賤、貴人の手は筋が浮かない、白きこと玉の如くであり、

紅きこと火の如くであり、直くなること幹の如くであり、軟かきこと綿の如くであり、紋が清く紋が秀で、或は器物の如く、形象の如く美しきものである。俗人の手は或は硬く或は粗に、或は筋ばり、その粗なること土又は石の如く、その曲れるは柴の如く、肉浮み肉腫れ、節多くして紋亂れ、筋骨粗にしてあらはれ、その紋亂れ斷ち、紛雜して醜く、肉暗く色枯れ、黒く白けて艶なきものである。

○掌を少しく内に反らし、三節の下の曲折面に肉あるは財祿のあるものであり、示指の下を初星とし財産とし、中指の下を官祿とし、無名指の下を福德とし、拇指を學問とする、この無名指の下に枝の如き筋の出づるを「玉枝紋」と稱し、學者は功名を顯はし、庸人は白手家を成す、即ち空手空拳によつて富を作るものである、わけて掌に紋の多く横ざるのはよくない、横理は性賤しく富もまた足らぬ、紋理の多く直貫するものは貴にして富み、百謀必ず成るものである。

○足は平正にして廣厚、長く軟かきを以て貴とする、色は潤ひ皮は滋とある、滋とは艶のあることである、足が硬く枯れ肉を削り取つたやうなはいけない、足の厚さが三寸ほどあるのは家財を巨富する、足の指の纖長なのは忠良の人である、足指の端齊なのは豪邁の士で足下に三つの痣があれば九國を統治する人になる、黒子あるも同じとするが、足の平に黒子があつたとて顔の造作が悪

ければ何にもならぬ、かような事柄は相法上の枝葉にすぎない。

○足の相といふものは自分または家族中のものを觀察しうるけれども、他人のものは中々見得ないものである、足を見るよりは手を見るに如かずであり、手を見るは面を觀るに如かずである。故に足の吉凶の如き第二義以下に置くべきである。

## 一一、顔面十二局

○上四局。——その一は文貴學堂、それは眼を云ふのである、眼が長く秀で、黑白分明し、動いて神光があり、下方に臥蠶の如き肉のあるものは文章聲譽高貴の人である。その二は祿貴學堂、これは耳である、耳の色は紅潤で、色は面よりも白く、圓く厚くして缺け反るやうな形とならざるものは爵祿豐厚し、衣食充足するものであり、富貴非常の人である。第三は聰貴學堂、これは耳の前方、二分のところにあり、平らかにして肉のあるのがよく、堅筋二三本あるのもよい、清潤にして發展し、異光の發するのを見れば、聰貴天下に聞ゆるの人となる。第四は天印學堂、これは眼尻の端の方、「モミアゲ」の邊、第三のところから指一、二本揃へた場所に當る、若しこの部鏡の如く瑕なく、肉落入らず、或は異光があり、紋があるものは學問に依つて勳位を拜するの人となる。

○中四局。——その一は武貴學堂、これは「邊城」と稱する所、眉尻の上部、顔の髪の角をなすあたり、この邊より隠々骨が起つて兩眉に入る、或は骨の見えものがある、また邊城を尙下方とし耳と接する所とする、このあたりは「邊城」とも「山林」とも「遷移」とも稱せられるところである、その邊から尙印堂（眉と眉との中間の上）、及び山根（鼻の附根）のあたりまでを武貴學堂とも稱する、この範圍は廣く見るか狭く見るか、實は觀者の時の方便によるのである、武貴學堂に彩光があれば武威聲譽のある人となる、但しその邊城に骨が起つて兩眉に入るものは男女とも早く孤獨になるものであり、夫婦縁はよくない。その二は諫諍學堂、これは眉と準頭（鼻の尖端）との間にある、即ち「年上壽上」などいふ部分である。鼻が立つて鼻筋に直垂紋があり、眉の頭が逆立つやうなものは清氣あつて、清廉公正人に屈せざるの氣象をなすのである。第三が天壽學堂、これは耳の後、指を二本揃へて當てたあたりの骨に位する、この骨は耳からすぐ起つて居り、指二本當てたあたりは却つて陥入してゐるものがある、いづれにしてもこの邊が明淨紅潤にして色にムラがないものは福壽遠大である、このあたりのわけて陥入してゐるものは財祿なく、家計つねに冷たきものであり、早く榮ゆるも亦早く衰へるものである、その四は清貴學堂といふ、これは頬骨の一番高まつた所と前の耳後の骨との間を云ふ、一つの骨が聳えて直ちに耳の後の耳と相應し、又さらに眉

の骨と相應して光彩あるものは、清高の人をなせども隱逸にして孤貴、壯年盛大であるも中年後は隱接するに至るものである。

○下四局。——その一は智勇學堂、これは眉後の骨の上にある、豊隆して聳えたとてば學問に秀で及び心智の勇敢なるをつかさどり、また信義ある人をなす、このあたりの骨の落込めるものは憶病である。その二を平準學堂といふ、これは準頭即ち鼻の尖端にある、圓淨にして光潤なれば作事平生缺くるなく、若し初め勞苦することあるも四十八九才以後發達の境地に入るものである、若し又圓からずして、尖るものは作事多く非をなすのである、その三を技藝學堂といふ、正面の眉間にある、即ち「印堂」の部である、面平瀾にして眉彎曲し、印堂高く、手纖長にして骨細ければ、文藝方技をつかさどりて又世に顯はれるものである、その四は祿食學堂、即ち齒にある、齒が端正にして側立たず、鎖密にして完全し、破缺するものなく、光淨銀のごとくであれば、祿食の多きを主とする、白く揃へるものが好いのである、不正なのは運に破亂があり、或時は充實し或る時は窮乏し、上大に下小に上下行き合はざるものは貧寒骨に徹することがある。

○金形の人發して巳年申年酉年に入れば、旺相の郷に入り、水は亥子丑辰年に入り、木は寅卯未年に入り、火は寅巳午年に入り、土は丑未辰戌年に入ればみな旺相の郷に入るのである。

○金形の人若し學堂あれば、二十四才に發祿し、三十四才食祿に入る。木形の人も亦三停（面の上中下）が備ひ、學堂又全ければ二十四才に發祿し、若し骨が秀でて學堂又全ければ早く高官となるものである。水形の人若くして肥えるのは却つて發達が遅い、若し肉多くして骨なければ、壽命は四十才をすぎない、若し骨多くして肉がなければ、祿は三十一にして發し、四十一才、五十一才にして福祿を收める。火形の人には滯りが多い、二十二才以前必ず惡運に行き、中年に厄あり、四十五才に至つてまさに旺するも發して又後なきものが多い。土形は面肥えて圓く鬢あるは、三十五才に至りて發し、五十以前祿を得る、土形は濁りを忌まず、たゞその厚重なるを取るべきである。

### 一三、五行正形

金形は方正にして聲が聳緊する、その相は腮頤、坐立音聲の間にある。木形は長直、清瘦條達、その相は眉髮年壽（鼻）手足の間であり、土形は寛大、肥輕にして肉散し、その相は腹腰背及行坐の間にある。火形は上尖り下太し、肥えず瘦せず、その相は性情の緩急なる間であり、水形は圓厚

にして豐隆し、寛にして逼迫せず、その相は背、鼻、腹、頤の間にある。

これは五行の正形であるが、前に擧げたやうに、背腰と腰とあるものを金火土水の相に取り、木はひとりその形を取つて背腰を取らない、この二つの見方を心得てゐれば、人相の五行はたやすく分るのである。土形と水形とは少しく辨し難いが、肥えて肉のしまれるは水形であり、色の黒きは水形であり、黄なるは土形である。

### 一四、五行二十五形

正金の形は方正にして潔白である。金木は員白（圓く白い）少く清瘦多し。金水は員白（圓く白い）少く肥濁多し、金火は員白少く枯燥多し、金土は員白少く重厚多し、○正木の形は修長清瘦であり、木金は清瘦少く員白多し、木火は清瘦少く枯燥多し、木水は清瘦少く員厚（圓く厚い）、木水土は黒少く肥厚多し、○正水の形は員厚にして黒濁する。水金は黒濁少く員明（圓く明るい）多し、土は清瘦濁少く、肥厚多し、水木は黒濁少く清瘦多し、水火は黒濁少く枯燥多し、○正火は炎燥枯陷である、火金は炎燥少く員白多し、火木は炎燥少く清瘦多し、火土は炎燥少く肥厚多し、火水は炎燥少く黒濁多し、○正土は重厚にして肥濁する、土金は肥厚少く員白多し、土木は肥厚少

く圓瘦多し、土火は肥厚少く枯燥多し、土水は肥厚少く黒濁多し。

以上二十五形説明尙足らざるも、讀者はその文字について考ふべきである。

一五、十二殺

【1】 孤獨殺。——額の上に寒毛といひ、チラチラ毛髪が生じて額が明朗でないもの、左に煙のやうな色が現はる時は早年父を失ふことがある、痣などあるも同じである。

【2】 太羅殺。——三陽三陰の光骨に徹し、浮雲の如き色のまとへるを天羅殺といふ、妻子を保ち難く、悲愁のことがある。

【3】 暗金殺。——二つの眉尖り又は全部逆だつを暗金殺といふ、傷殺の象であつて、邊陳にのぞみ、頬骨が高ければ劔難がある。

【4】 刀劍殺。——赤脈が眼を貫く。劔難である。

【5】 内奸殺。——奸門魚尾といふ所、即ち目尻に瘍跡黒きか黒子あるか、瘡あるものは男子は淫慾強く、雙妻の命また還らざることがある。

【6】 天刑殺。——左眼の頭破れ、青痕などあるもの、命中横災に遭ふことがある。

【7】 天獄殺。——右眼の頭破れたるもの。獄に入る。

【8】 貪食殺。——鼻尖り或は曲り或は鈎の如くなれるもの、飲食をむさほるばかりではない、遂に子孫のうれひを見るものである。

【9】 横暴殺。——面に横肉横筋を生じ、人に逢ふて怒るに似たるもの、中年暴死することがある。

【10】 短命殺。——唇がひるがへり、兼て齒と齒の間がひらけ、舌が縮み、さらに咽喉に骨の現はれるもの。

【11】 悖逆殺。——耳が反つてかねてうす黒い色をしたもの、親に不幸をかける。

【12】 破財殺。——地閣（顎）破れたる如く力なく、先尖り内部に引きたる如き形せるもの、四十才以後財産を破り、或は壽命なし。

一六、人相十格

人格は十格の格式なるものがある。神相全編などに出てゐる事であるが今初心者のためにこれを説いてみよう。

一、十殺格。十殺格は顔面に下の中どの一つがあつても凶相をなすものである、第一が酒を飲まな

いの酒に酔ふた如く顔面の常に紅潮するもの、これを一殺となす。第二が鼻骨の曲つたもの、これが二殺であつて外に曲つたものも内に折れたものもよくない。外に折れても前に折れても尅がある。内に折れた者は骨親の無情をなし、親縁が浅い、第三が面に麻を散した如き色のあるもの、これは孤獨である、即ち三殺である、四は面が瓜のやうに青いもの、これが四殺で破相をなす。五は眉が濃いもの、これが五殺であつて兄弟が皆亡びる、六は聲が動物の啼くやうなもの、之は破財である、七は聲が徒らに高いもの、これは子を尅する。八は寅巳申戌、これは顔面にはその四隅である、この四角の上下が何れか張つたものは相尅がある、下の戌寅の張れるものは妻子をす、上の二隅の張つたものは子を尅する、女は夫を尅する。第九が口の闊いもの、これも妻を尅する。第十が眼の大なるもの、これも孤獨か然らざれば非命であるこれが十格であつてその中の一つがあつてもそれだけ凶相をなすのである。

二、奸詐格。——心に欺りがあつて奸譎な人をいふ、これは第一に物を斜めに視るもの、口が尖つて唇の薄いもの、これは妄言して苦しむものである。物を偷み見るやうなもの、これは詐りが多い上を見、下を視るものも心にない事を口にしてゐるもので嘘が多く、何を言ふか分らない。言葉の甚だ急なるものは嘘を言ふ人である。齒が牙のやうに出て且疎なるものも詐が多い、又鼻が尖つて

鼻毛が現はれてゐるもの、眼を細くして低く視るもの。口角に高低あるもの、歩むのに均當ならず、横に行くやうなものなどは詐の多い人間である。

三、寛大格。——顎のあたりの肉着がよく、印堂が開闊であり、諸部が圓滿であり、鼻孔が少しく現はれ、眼の上下に少しく黄氣があり、印堂が黄色であり、光殿精舎（目頭の左右の下）の部にも黄色が出で、地角（顎の先）が突き出したやうになり、耳に輪廓があつて耳朶が口の方に向いて居り、眼に愛嬌があり、眉が新月のやうであるのなどは皆心の寛大な人である。

四、貪食格。——鼻が鷹の嘴のやうであるものは貪である、心の狡なるもの、即ちズルイものは眼の赤いものである、心に毒のあるものは眉がそばたつものである。嘴の尖なるものも亦貪らんのものである。

五、勞碌格。——勞碌は力を勞して物を成すものである、又は生涯成さずして終るもある、眼の長いもの、骨の粗なるもの、面が馬の如く驢馬の如きもの、眉重く氣の弱いもの、魚尾紋（目尻の紋）の多いものなどは何れも勞碌するものである。

六、四反格。——耳に輪のないもの、鼻の孔の仰ぐもの、目に神のないもの、口に稜（カド）のないものは之を四反格といひ、その中の一つがあつても運に破れあるものである。

七、三尖格。——鼻の尖るもの、頭の尖るもの、額の尖るもの、この中の一つがあつても運に破れあり、鼻尖るは六親睦しからず、頭尖るは孤寝をなし、額尖るは夫妻相尅がある。

八、六削格。——削り落ちたやうな意で、眉に尾がないもの、額に角がないもの、目に神がないもの、鼻に梁がないもの、口に角がないもの、耳に輪がないもの（反り返つた耳など）、この一つがあつても運の相尅があつて凶相をなすものである。

九、水火格。——水難あるもの火災にかゝるものなど、一を溺水格とし、一を火災難とする、人中（鼻の下の筋）に紋が交れば溺水の難がある、山根（鼻の附根）赤きは七日の中に火災あり、痣が眉毛の中にあれば終年必ず火災に遭ふ。

一〇、妻美格。——蠶下（目の下）に黄色が紛々として起るものは貴人が媒介して婚をなすものであり、その妻は又貞潔である。準頭圓く孔を露さず、蘭臺廷尉（左有の小鼻）相應するものは美妻を得、山根に奇骨が越伏するものは貴妻を得る。眉が掃ける如きものは陰人の財、即ち財ある妻を娶るものである。

### 一七、部位吉凶の標準

○凡そ、額上には骨があつて種々な形をなすのである、犀の伏したる如く、日月の並べる如く、龍角・虎角の如きものである、依て額の中央には伏犀とか、日月角とか龍角とか虎角とか名のついた部分があるが、これらはみな別々にあるのではなく、その形によつて名稱を異にしてゐるのである、みな隠々としてあらはに見えないのを宜しとする、その骨があらはに見ゆるのはいけない、額に左右より骨が高く起つて八字をさかさまにしたやうに眉頭に及ぶものは男女とも孤獨である、額の上に石塊を置いたやうに、或は鶏の卵を置いたやうに骨の起るのを「僧骨」と稱する、男女とも孤獨の遺傳がある、夫妻何れか全ければ男女を失ふものである、然し信仰心には強いものである、高ければ一層孤獨である、若し一片の骨が平らかに起れば富貴にして長壽するものである。

○凡そ眉疎薄にしてあるかなきといふ如きは壽福がある、然し兄弟には縁なく、子も養子することがある、申晩年は幸福である、眉が粗硬にして濃重度を過ぎ、或は眼を超ゆるものを「羅漢眉」と稱してひとり壽命があるが、兄弟なく、ありても次々に失はれ、あとには嗣子が立たないものがあり、孤寒雜駁にして作事却つて意の如くならぬものである。

○凡そ印堂（眉と眉の間）に青痕の交れるもの、これを鬼門關といひ、二七十四日のうちに災ひがある、印堂に眉毛が連なつても白色の人、及び女人は害がない、色の赤き人は早く安靜を失ふ、

年命も三十をすぎない、凡そ眼下に肉なく涙堂（目頭の下）陥るもの木形火形の人を除いてともに孤獨である。臥蠶（目の下の肉）に明るく黄なる色が細かに起るものは、子息三五人あるものである。

○凡そ目下は晩年中運の運とする、肉ゆるやかに盛りて囊を垂れたる如きものは、平生子は多いが、終りに臨んでともにこれを傷尅し、つひに收成することがないものである、目の上下堂（眼胞）に血點あつて粟つぶの如きもののであるは、近いうちに尊親又は妻子に不幸がある、上部にあれば、上長、下部にあれば子女である。一年の中に應があり、終ればその色が消える。

○凡そ兩頰（頬）骨ひとしく高く、天倉（目尻の横下）の陥るものは孤獨にして妻子を妨げる、但し木火の二形は妻子を尅さない、他の金土水形はよろしくない。

○凡そ天倉の諸部（これに神光、天井、天門、天武などいふ部位がある）、水土金の人には自から豊満であり、火木の人には個々に缺陷があり、或は豊満なるもので、これらは何れも貴福であるが、若しそれに反すれば福を缺き、安寧を失ふものである。

○凡そ頰骨（頬骨）の垂れ下るものは賤しく、若しその骨が耳に入れば、壽命は七十才に達するその骨隠々として天倉に入り、而してさらに髪に入るものは、上貴なるを主とる。

○凡そ鼻は木形の高きは尊く、水土の人平端なるは貴く、金形は圓く明らかなるを以て上となし、火形は凸凹齊しからず、面大にして鼻の小なるもの、これを耗土と稱し、平生運の滞りをみるものである。面小にして鼻大であれば土が滞るといひ、中晩の間一度は成り一度は破れるものとする。鼻の穴の露出せるは財利手に止まらず、常に窮苦することが多い。若し鼻柱が高く、直垂してゐれば孔が現はれても妨がない。鼻柱が折れてその上孔のあらはれるのは最も凶とする。

○凡そ耳が小さくついて高いものは、聰明の人であつて、富まざれば貴い人である。肉をつけて耳珠の垂るゝものは、富みて少しく貴い、白きこと面よりすぐれてゐれば貴にして少しく富み、耳堅くして大きく、孔の内に毫（毛）を生ずれば壽にして少しく樂しむものである。

○凡そ口は緊密をもとめる、緩みたるはいけない、上唇が下唇を掩ふにすぎたるものは、妻を尅し、前齒高く下の陥りたるは子を損ずる。

○凡そ肉、骨法を見るには、骨は峻起するを欲し、陥入するのを欲しない。骨の事をいへば金は員（圓く角あり）にして木は直、水土は藏まるが貴く、形は上部尖るものである。又肉は緩く垂れざるがよく、聊か引しまるのがよい、肉の徒らに垂れたのは破相である。但し土の形はやゝ緩んでもよい。又これに「燕領虎頭」なるものがある。即ち燕のやうな頸で、虎のやうな頭とする。これ



は土形に取つて大貴にして又大福をなすものである。

### 一八、四季の氣色

○春の色は青くして黄、眉間額角、兩方の頬骨、ともに鮮なれば、文書財帛の喜びがある、印堂の上に紅花明潤なれば、家に人口を添へ、子女の結婚などがあり、また子孫が生れ、喜氣綿々たるものがある。若し白色が生ずれば破財、或は驚き事が加はる。青い色が同時に耳の中又は「邊城」のあたりに出れば災がある。口邊が重ねて黒ければ同じく破財があり災ひが永びく、または家人に災ひがある。五十日にしてその應が現はれる。

○夏の色は紅黄がよい、「天倉」(目尻の下)、邊地(邊城に同じ)に現はれ、またはその色が印堂から準上(鼻の先)に直下すれば七旬(四十九日の内)に財源を得榮昌するの喜びがある、吉象驟然としてあつまり、萬事に稱はざることがない。耳が紅赤なれば官災憂惱のことがあり、その防ぎをしなければならぬ、眉間が青黒色なれば、妻兒骨肉の間に病難があり、多くは肺病とする、五十日にしてそのしるしがある。眼下に微々として白色が現はれる時は、妻子に傷病がある、火のやうな色が顔面に滿つれば、先に利を得ることがあるが、後にその財も灰になることがある。

○秋の色は青くして白し、氣は眉、頭のうちに生ずる、四七日の中に財祿が重ねて来るものである。文書のことも吉である、小人奴僕の類はかへつて失脱があり、失敗損害をする、左右の小鼻及び準頭にその色をそへれば女子の喜びがある、赤色が面上に滿つれば破財をなすか損災が突然とわき起るものである。孕婦は産厄がある、黒色が眼の下に現はれると訴訟事がある。目下の色が青ければかへつて意氣の軒昂たるものがある。

○冬の色は黒黄である、印堂や頬の下部などに黄色が現はれて光明なれば、學問が成り、財祿を得られる、青藍色に黒色をかねて、眉間及び鼻の上に現はれると、重ね重ね人の不幸に逢ふものである、「天倉」(目尻の下)白色にして、耳及び小鼻にかけてその色が反射すると、また破財のことがあるものである。たゞ求職などにはよい、春のこの色は喜び事が随つて来る。

○四時の色、春は青、夏は赤、秋は白、冬は黒である、この色に雜色がなければみな正氣を得たるもので吉となすが、雜色甚しきはよくない、然し黄色の交るのは吉である。その外にも金木水火土の五行によつて色の正しきか不正なるかある、金は白く、木は青く、水は黒く、火は赤く、土は黄色である。春金が白いはよい、木の青いはよい、水の黒いはよい。火の赤いはよい。土の黄色なのはよい。従つて四時の色と面相五行の色と相交る場合もあるから、相を見る時は、又茲

に留意するの要がある。

○凡そ「氣」は「肉」と同じであると述べた、「氣」とは謂ば肉色の發達したものである。されば「色」とは何であるかといふと、「色」は氣の容なりといつてゐる。氣は内に沈めるもの、色は上に浮めるものなりとしてゐる。氣は精神の現はれであり色は心の現はれなりなどいふが、精神と心とは別のものではない。故に氣と色とを別にし、精神と心を二つにしてみる如きは時間と空間とを二つにしてみる如きものとなり、時間あれば空間あり、空間あれば時間あるのであつて、氣と色とは只物の表裏をなすにすぎない。氣は本質的のものであり、色は性質的のものなりともいへる。故にたとへば日月角（額の左右の角）氣あれば額は方角となり、輔角（日月角の上）氣あれば、邊城（額角髪の生へ際）低榻せず、龍宮（目頭）氣あれば暗色去つて潤まさに來らんとし、法令（小鼻の左右の皺）氣あれば勢ひあつて角（口の角）明らかになり、兩顴（兩眼の下の骨）氣あれば、肉よく包んで正しく起り、氣なければ散じて骨を現はす、眼氣あれば深く凹ます、瞳乾かずして潤ひあり、氣なければ眼中忽ち黄色を現ると云はれてゐる。

○さらに眉に疵あれば黒色中に青みあり、且毫毛に纖細の美あり、氣なければ、純黒或は黃薄にして毛は逆立ち、または疎漫する、「中正」（眉間の上）、印堂（眉間）氣あれば皮肉圓滿となり、山根

（鼻のつけ根）また暗色を呈せず、準頭（鼻の頭）氣あれば勢ひあつて潤色がある。年壽（鼻の中間氣あれば縦横の文理を表はさず、かつ山根のところ低榻せず、「人中」氣あれば、深き所みづから肉あり、地閣氣あれば、潤色にしてよく口に血を潮すとのやうにある。これらはいづれも血の循環がよく筋肉の發達したものをいふのである。それがためには肉も強固となり、従つて美色も出るわけで、氣は肉なりと云ふのはこのことである。

○然し人は全部このやうに美なるのではない。又この美所に於ては決して惡色の出ることではなく赤白黒の如き凶災を示す惡色の出るのは、何れも比較的薄弱なところ、相法上の缺陷部に現はれるのであるから、前記の如き美所に於て凶色を探してもそれはむだなことである。

○又氣を見るの法は少し遠ざかつて見るべきもので、面に近よつては氣は分らない、近よれば色は見ゆるけれども氣は見えないものである。けだし氣の聚るところは、肉が緊張してゐる故に心もちうづ高く見ゆるものである。色があつても氣のなきは用をなさず、その色は忽ち消滅してゆくものであるから、氣のある美所に少しの凶色が出たとて、それが必ずしも凶相と斷するわけには行かぬ。

顔面中最も早く氣色の發する所を準頭とす。これは前にも云ふ通り人の胎内に宿つた時漸く頭と

體との區別のつく折り、未だ目も口もなき時代に、既に顔面の中心に少しく堆き所があるが是れが後に鼻となるのである。顔の造作中、最も早きは此の鼻であるから、支那では物の元祖を鼻祖といふのである。その様に鼻は顔面の造作中最も早い處であるから、神経も早く發達し、血液循環もまづ第一着に、自然顕敏な此の場所に強く發表するのである。従て氣色の發する所であると云つたのは當然の事であり、人の喜怒哀樂につれて赤くなり、青くなるのはそのわけである。

第二に印堂は氣色の聚る所である、凡そ氣色の開くは準頭に起り、山根に傳はり、印堂に至つて止まり更に左右へと開くのが常である、その左右は眼目である。眼目ほど顔面中、神経の強い所はないから、印堂に開くと見る目に至る、そして此の印堂の地は兩眼の間に位し、その氣色の往來が常に印堂に聚るが故に、かように云つたのである。但し印堂には紫色などの美色の出るものは容易でないが、眼には却つて出やすきものである。されば見易いのは眼である。

第三を耳とする。然し耳に耳輪よりも眞の氣色は耳の前に多い、即ち命門（米かみの處）金馬玉堂等の位置である、此の地に黒色を呈すれば、死は目の前にあるけれども、耳輪にはそれ程急に現はれない、これは耳前の方が神経がつよいからである。凡そ氣色の開け方は、既に目に至れば、上は眉上に至り、下は頬骨に至つて、正面には至らない、壽上（鼻の頭の少し上）より下る氣色は却つ

て又印堂上に至るけれども亦容易に正面の部位は割合にその吉凶を問はないのである。

### 一九、氣色の吉凶

○氣色の吉凶については心ありて相なれば相は心に従つて生じ相ありて心なければ相は心に従つて滅すとは相法に於ての金言である、相はもと形體の意であるが、此語は轉じて氣色の言葉となつた。凡そ氣色は自然の感より生ずるものであれば、妄相其他の慾望より生ずる心は、皆不自然に屬するが故に眞の氣色として出る筈はなく、やがて消えてしまふ。言葉をかへていへば神聖にして正直なもの、氣色が善惡に拘はらずその神経の鋭敏な顔面に現はれるのである。それは、正直であるから従つて吉凶をも判断し得るのである、然るに世の相士に於て、氣色を相するものを見るに或は朝には赤色と見ゆるが、夕にはその痕迹たも見えぬものに向つてその赤色の吉凶を論じたのを見たこともある、之は中らぬのは知れきつた事であるが、大にその色の見當も誤つたものである。かくの如き色は時々血液循環に因て其現象を呈するも、もと心なき相であるから、一時或は何かの刺激によつて生ずるけれども、後は無意味に消え行くもので、もとより其禍福は論じ得べきものではない。故に相法上色あつて氣なきものは吉凶を論せずと云ふのはこのわけである。美所に出る惡

色は畢竟するに相すべき色ではない、故に又相法にては神は能く氣を留むれども、氣は神を留むること能はず、氣はよく色を留むれども、色は氣を留むること能はずと云ふことがある、これも心ありて相なきと同じ意味である、昔鬼谷子が孫臏と共に軍に山谷にありし時、氣色によつて孫子が危急を遁れた有名な話は後に范氏が水鏡集に記載してある、それを見ると、神能く神を留め、氣能く神を留むとの説明がある、要するに神なくして氣あり氣なくして神あるは、何れも逆であるから、その效なきを言つた詞であるが、しかも氣色を見るには最も必要なものである、故に氣色を見るにはまづその神の旺んると旺んざるとを察しなければならぬ。如何に氣色がよくとも神が朦朧として旺盛ならぬのは、格別の發達もなく、又十分の效能もないのである。但し神とは眼中の活氣を指すのである。此の眼中の活氣が旺盛ならざる氣色の如きは、恰も工場に於て完全なるよき機關があつても、之を動かすべき技師其人を得ざるが如く、其機關は立派なれども格別の效用を認め難く、只外見がよいといふに似てゐる、故に氣色を論ずるには、何れの相書も必らず、

○眼中の神彩を主としてゐる、水鏡集に新に嫩黄紫彩を開き、光りあつて發出し、面に盈ち、目に輝くもの動くによるし、又百晴泛々として定まざるは收れを主どると云ひ、神相全編十卷には、眼下紅黄紫色は百事成ると云ひ、又張氏の人倫大統賦に氣清きも體羸れば云々と云ひ、麻衣の神異

賦には氣濁り神枯るれば貧窮の漢といひ、柳莊は一身の本は定めて双晴にあり、必ず明を要し秀を要すと云ひ、何れも目の神彩を主として論じてゐる。凡そ人の壽命を見るに於ても、一、二年内の死亡は最も眼に於て明らかであるが、最もこれは部位と流年とを綜合する必要もあれば初心の人にはむづかしきことである。又能く人が精神と云ふ言葉を使ふが、これも初めは眼目より出た文句でのちには腦の中樞の靈能なる働きにまで使用し、精神一到何事かならざらんなど、用ゐるに至つたかくの如く何事も人の作用の外は眼より割り出したもの多ければ何につけても目より大事なものは無い、神經も顔面中、最も鋭敏であつて、吉凶の感じ方も此所ほど著しきて所は他には無い。人生の大事は殊に感じ易くして、つねに眼中の神彩に對しても大影響を及ぼすものなれば、此眼胞の氣色は大に注意すべき事である、三陰三陽は即ち此所である、序であるから胞上の名稱を少し説明する、下眼睫の處を臥蠶と云ひ、即ち男女宮である、それより二三分ばかりの下を陰陽宮とする、眼下水腫のある所である、此所に紫色を生ずれば、陰隲紋といふ、又その水腫の處が膨脹するのを蠶肉生ずと云ひ、生ずれば子孫及び陰徳を害すとす、三陰三陽といふのは眼中の事であるが、部位としては重に眼下をいふのである、此の名義は日月の明を象どり、その範圍は、眼窩の全部であるから、畢竟目及び其上下を總稱する名義であつて、精舍、光殿、龍宮といふも皆同じ事である。

かくの如く名稱の種々に異なるは、中古に於て秘傳とした折其派々々の大家が附したためである、十二宮に於て田宅といふのは此内にて最も古く、相法の初代より起つた名稱である。これもやはり眼及びその上下の總稱であるが、後來は専ら眼上の胞たぶのみをいふやうになつた。その次第は、支那古代に於て、眼窩がんくわの廣大なのに擬しこれを研究決定したからである。皮相上より視る時は、目と眉との間の廣狹が、眼窩の大小を知るに便利なれば、全部なる名義も、自然眼上のみ用ゆるやうになつたのである。

(記事中の鬼谷子、柳莊、麻衣などは皆人名である)

(著者云ふ、氣色の一文については故櫻井先生の名に於て起稿發表するものを採録した所がある)

## 二〇、氣色の變化



近頃大分人相を見るものがある。然し氣色を看るものはない。氣色を見る法は中々むづかしいものである。その氣色といふものはその時々々に現はれるのであるが、心が動いたから身が變つたからといつて、これを素見して直ちに氣色が見えるといふことはない、氣色を見るには又氣色を見る眼

を養はければならぬ。

凡そ人の氣色といふものは半月にして一變するものである。そしてまた一節氣に交はるのである。故に節氣の旺相休囚する期間や、その過程をわきまへてなければならぬ、只春であるから青色がよい、夏であるから赤色がよい、といふだけの大ざつばのものではない、たとへば丑の土旺十八日、寅卯の木旺七十二日の如くである。人相といへども只顔面や身體の形ばかりみていふゆではない、五行その他のものが必要である。

氣色はこの一節氣に交つて子の時に應ずるのである。又二十四節の氣候を考へなければならぬ。春夏秋冬四時の氣を見わけようとするにはその氣の五色の屬する所を別けなければならぬ。たとへば春の氣は青く、夏の氣は紅であり、秋の氣は白く、冬の氣は黒い、四季の旺する時は即ち天の正氣をうるのである。この色が正氣であるや否やは時を考へてから區別しなければならぬ。

氣と色とは全然別物である。色といふのは皮膚の上にあるものである。氣といふものは皮膚の裏にあるものである。色は一面に出ることがあるが、氣は叢むらをなして現はれない、その形は粟粒を散したやうであり、豆のやうであり、絲の數條をちらした如くである。髪の毛の量や置いたやうであり、少しく刷毛ではいたやうであるもので、これが皮髮の内に隠顯するのである。だから氣は

素見しては分らぬものである。彼の畫像といふものもこれに類するが、畫像は大ていは獨斷的であり、枝葉末節に拘泥して大局を忘れ、傍系的にして部分的の吉凶を云々する事が多く、尙人の吉凶悔吝には適切ならざるものが多い。

それに氣色はその人の形、即ち五行の形に合ふや否やをわきまへなければならぬ、たとへば木形の人は青きがよく火形の人は紅なるがよく、金形の人は白きがよく、水形の人は黒きがよく土形の人は黄なるがよい、これは人の身の正氣である。然しこの五行の形を捕へるといふ事も始めはたやすい様でたやすくはない、これには多くの經驗を必要とする。もし又木形の人であれば少し黒いのがよい。黒きは水であるから水生木の正氣となる、白きはよろしくない、これは金尅木で正氣を得ない、火形の人は紅であるが、これは少し青いのがよい、青は木であるから木生火の生旺色となる。黒いのはいけない、黒は水であるから水が尅されて正氣を得ない、金形の人は白く、少しく黄なるがよい、黄は土色であるから土生金の正氣となる。紅なのはいけない、火尅金の尅色である水形の人は黒く、少しく白きがよい、白は金であるから金生水の正氣となる、黄なるはいけない、土尅水の尅色である。土形の人は黄なる色に紅が交ればよい、青きを忌む、青は木であるから木尅土の尅色となる。尅色となる時は破相の形となる。顔の造作がよくても氣色が人に應じなければしばし破

相の形となるのである。



氣色の氣なるものは元來一つであるが、然しこれには三つの區別がある。即ち(一)自然の氣、(二)養ふ所の氣、(三)襲ふ所の氣これである。自然の氣は五行の秀氣であつて、自然に備はり來るところの氣で、吾れがこれをうけるのである。即ち清く自然に存した所の氣である、養ふ所の氣は謂ば心の修養、身の安全によつて生ずる所の氣で、養を集めてなしたところのものであるから、自身たのむところがあり、外からこれを動かすことができない、襲ふところの氣は即ち邪氣であつて様々な不安や焦燥や心配などがこれに加はる、だから人の所存が厚くなければ養ふ所も十分ならず即ち邪氣の襲ふところとなつて運動する、然らば顔面の氣も亦伸びないわけであつて、色も亦これに應じて來ない、この氣には即ち青あり赤あり、黄ありで五色それぞれに分たれるのである。

氣の外に之に伴ふて「神」なるものがある。神の大なるものは神に餘りがあり、神のおびえるものは神が不足する、氣が神にすぐれば氣に餘りがあり、氣が神に下れば氣が不足する、神とは謂ば氣魄精神で物の成る人は神が充實してゐる。頼む所のある人は神が廣い、よき生活者は神も氣も整つてゐる、生活なきものは神もなえてゐる、もがき悲しんでゐるものは氣に餘りあつて神が足らず

或は襲ふ所の邪氣が現はれてゐる、その上にまたその時々々の喜怒哀樂の情が現はれる情は心の動きであるから時に従つて變ずる、然し氣はさようにたやすく變ずるものではない、尤も生活途中に漂蕩してゐる人は氣も變ずる、而もその氣たるや決して神の満ちた自然の氣でもなければ、養ふところの氣でもない、襲ふ所の邪氣である。

この三つの氣の中のどの氣をその人がうけてゐるかを見たならば、次は色によつてその時々々の吉凶悔吝を見ることが出来るものである。

氣は又呼吸である、即ち人の五臟六腑から發するものだからである。故に人の呼吸を知れば氣がどこにあるか分るものである。瘦せた人の呼吸が靜かでゆるやかで、傍に見ても聞えないのは一世の榮えをなすものである。肥えた人が氣短かく、傍に居れば呼吸のせい／＼云ふやうなのは生命も短かければ生活安定をうる期がないものである。氣が満てば壽命があり、氣が不足すれば壽命が短かいのはこれ自然の道理である、又氣が充てば血行もよいわけであるから耳朶などが紅色をして居り、頬にも艶があるが、氣が不足すれば耳朶は煤け色をして艶などもないものである。故に金持に耳の黒いのはなく、勞働者に耳の紅なるはない、聲も前者は澄み、後者は枯れる。

この呼吸をまた後天の氣とする法もある。後天の氣といふのは、天地自然にうけた氣で、謂は心

身の養ひ生長である。その人の體質や生活が後天の氣となる。即ちその人の五臟六腑から出るものであるが、而も全く後天の氣といふのではない、謂ふなれば「先天の氣」といふものとつながつてゐる、先天の氣はその人の生れ方如何にあつて、生活の基礎と生理的條件との結び合つたものである。「後天の氣」はその後養ふ所の氣といつてよからう、その氣が根元となつて次で色となつて現はれるものである。



さて前に云ふやうに氣色には二つあり、一は氣であり二は色であるといつた、氣は皮の裏にあり、色は皮の外にあると云つた氣が寛和しなければこれを云ふことができない、故に自然順調にあるものは氣があるのであつて、皮裏に現はれてゐるのである。只色の現はれてゐるものは氣の寛和しないものであるから、その色は忽ち散する故にまた運も順調でない。そこに人の成し易きか成し易からざるかの區別がある。

氣に艶(ツヤ)がなければ氣と云へず、色に光がなければ色といへない、然して光のある色は氣の寛和せるものから發する、人がその機に臨めば氣は寛和して色は光を發することになる、氣色の道は皆天地の氣に合するのであるから自然四季の生尅に應ずる、或は一日十二時間に應ずるものも

ある。十二ヶ月に應ずるものもある。而して氣はまづ鼻に發して印堂並に眼に及び額（頬）に散ずるものであるから、鼻を先に見なければいけない、その外一般には額や頬や耳を見なければいけない。その外一般には額や頬や耳を見なければいけない、目も唇も見なければいけない。氣色はみなこの部に強く現はれるものである、眉目が清秀な人であつても、氣色が昏迷してゐれば運に蹇滯があるものであり、吉運に遭つてもこれを開發することができない。

氣色には動くものと、散ずるものと變ずるものとある、前にも云ふやうに準頭即ち鼻は氣色の發する所であり、印堂は氣色の聚る所である。準頭の氣色は草木の芽の如く新開嫩黄であり、紫彩焰々として光りあり、その氣色が發して面にあり、目に輝くものは動くものであつて、鬚や眉に翠紺青の光りがあり、毛髮に精彩あるものは官祿名利を求めて成るものである。又印堂に發するものは黄色明蠟の如く又うす紫をなし、内氣深明であり、外色微暗であるものである。散ずる色は氣のなくなつたもので満開の光彩中、紅黄黑白が交つて一樣でないのは散ずる色である。聚る色は眉の上や唇の傍などが黄紫色をなすものあり、翠綠、鮮紫、淡紅の點が片々點々として艶麗なるものも聚る色である。變ずる色は氣あつて色なきか、色あつて氣なきかするものであつて、變ずる色の次第によつて色々ある。その外實をなす色、利をなす色、蹇滯をなす色など、色の區別は複雑である。

右の中には一寸辨し難いものがある。この色の中には紅紫赤の三色があり、どれもよく似て居つて然して實はその質が違ふ。紅色は多くは外皮膜内にあるものであり、その色は紅活焰々として動けば光りがあり、黙々として大きく分明なものもあり、絲のやうに引いて明潤なものもある、正しい紅色といふものは喜福をなすものであるが、バラ／＼に散つた色はよろしくない。

紫色といふものも亦外皮膜内にある、乃ち紅色の深くなつたもので、散せず焰せず、隠々として深きに隠れたものである。而して色が鮮かであり、微々として焰があるやうであり、猶肉の裏にあつて皮外に透出するやうなのが正しい、紫色の大なるは貴い、額、頰、鼻、顎などに發するのがよい。此の色も一散一亂、バラ／＼に現はれるのはよくない、即ち紫色とは呼ばない。

赤色は乃ち心經の發する所である、故に目が赤くなると驚恐息心の事があり、或は怒り、或は勞力を費すことになる。この色は四季とも顔面の何宮に現はれるとも吉をなさない、顔面の各部に現はれるとその出現の場所に連なつて凶事がある。輕きは家を破り、重きは命を失ふことになる。黒きもこれと同様の性質がある。わけて赤中に黒色を帯ぶれば大凶である。赤中の青、黄色の如きはそれほどの害がない、赤中に紅色の焰のやうな色が出れば却つて大吉である、赤中に嫩黄色が出れば禍を轉じて福となすことができる、その外、浮ぶ色滑艶の色などある。



## 二、面部五色

○男子の面部はこんもり昂まつたのがよく、平らなはいけない、女子の面部は方なのがよく高いのはいけない。昂まつても尖つてはいけない、方であつても凹んだのはいけない、これが面部大體の標準で、さらに相法上ではこれを十二部位にわけ、額の髪の生え際から

天中、天庭、司空、中正、印堂、山根、年上、壽上、準頭、人中、承漿、地閣とする。

これを始め毎部十年を管するとし、百二十才にしたが、後に七年とし、七十才とした。然し七十歳までは必ず生きるといふのではない、十部位揃はぬ事はないが、幼少にして壽命を失ふものもある

○何れの部位にしても陥入せる所があれば、壽命は永くないとしてゐる、一部が破れ、ば運は十年(七年)破れるとしてゐる、自分の経験では五年破れることもあり、十年破れることもある。諸部位みな豊富なるものは極めて稀なるものである。

○まづ氣色を見るには、眼並に眼下、一寸二分の所を見よ、ともいつてゐる、氣色を見るのに額の中、司空中正など見たのでは中々わからぬことがある、今この眼胞、周圍に出る色の吉凶標準として面部五色の區別をすれば次の如くである。

○春三月(寅卯辰月)青色面に出づれば木が旺するのである、吉福のことがある、赤色が出づれば木は火を生ずるのである。妻娘の上に喜び事がある。三七日のうちに驗がある、白色が出づれば金尅木である。官刑のことがあるとする。二七日のうちにしるしがある、黒色が出つれば水生木である、二日の間に死喪のことがある、黄色が出づれば木尅土である、木を主となし七七日のうちに財を得る。

○夏三月(巳午未月)紅色が面に出れば火が旺するのである、貴人の提携を得る、三五日の中に至る、青色が出れば木生火である、父母尊長に喜び事がある、七日のうちに至る、白色面に出づれば女子の上に災が起る。三十日にして至る、黒色が出れば水尅火である、諸事吉を缺く、黄色出づれば火生土である、子孫の上に喜び事がある、二七日のうちに至る。

○秋三月(申酉戌月)は白色を正色となる、白色面に出づれば金が旺するのである。七日のうちに財を得ることがある。青色が出づれば金尅木である、横財を得る。相場競馬などにて利得するものである、又は大金を拾ふことがある、三七日のうちに至る、紅色が出づれば火尅金である、訴訟などのために財を散ることがある、黒色が出づれば金生水である兄弟に悲しみごとがある、二七日中に至る、黄色が出づれば土生金である、父母の身の上に喜び事があり、或は財を得る、七日或

は二十日にして驗がある。

○冬三月（亥子丑月）は黒色である。黒色面に出づれば水が旺するのである。時節を得るけれどもこの色は喜びをなさない、公けの事が起る、然し大害はない、四十日にして至る、白色が出づれば金生水である。貴人の扶持を得る、七七日にして至る、紫色がいつれば紫は火に屬するを以て水尅火となる、水火相交つて却つて水の地を得る、交易によるしく、又財を得ることがある、三五日に至る、黄色が出づれば水生木である、父母の上に喜慶がある、七七日に至る。黄色が出れば土尅水である三九日のうちに財を失ふ、黒色が四季ともにあるものは死期の近づいたものである。

○五色は五行の相生相尅を取るものである。勢ひのある無し、四時の吉凶、みなここに據らざるはない、面に忽ち五色を生ずるものは布衣にして俄かに大官に召し出されるやうな貴福があるが、白くして腰の曲れるものは壽命が久しくない、面が黄爪のやうな色をしたものは富貴榮華である、紫色の面に満みるものは財福が限りなく湧き出す、面の毛が疎なるものは子を尅害する、髻なきものも同じ、面が赤火の如きものは常に口厄があり、作事すべて灰となる、面の皮薄きは家を破るの兆である、面が鐘馗に似たものは老年に至つても歸着する外がない、面が麵袋の如きは、初めの妻を失ふ、面の皮肉が横さまに見ゆるものは壽命五十を出でない、面が瘦せ身が肥えてゐるものは少病

にして長命する、面の上に五色のないものは心に毒があつて、みづから災厄を招いてゐる、面が忽ち黒くなると明朝に至つて大病を發する、夫に離れる女の額は平らかでない、面が青色にして笑顏のないのは久しく病人の間に臥する、面に煙立つ如き青氣あるものは數年間不如意である。身が光つて滑やかであれば晩年亨通する。身體ザラ／＼する間は運が開かない、面の皮膚も同じ、これは皮に稜角があるからである、面は員の字の形、胸はひろきがよく、尻は厚きがよく、背は甲字の如きがよく、下は短かきがよく、手は長きがよい、面の乾けるも、油をぬつたやうなものも天羅殺と稱しみな運の滯るものである。

○天中、天庭は額である、天倉は目尻の横下である、この部の色の吉凶災祥は次の如くである。面中最も重大な部位とする。

○天中に青氣起れば一百日の中に喜びがある、赤氣旺すれば二百日のうちに立身する、白氣起れば女子が病氣をする、黄氣が起れば奇をなし百二十日のうちに人の上位に立つ、紫氣が起れば四十九日の中に大財を得、黒氣が起れば心願はまた遂げがたい。

○天庭の常に赤いのは官職榮光、或は家庭平安である、白色が起れば百二十日のうちに横暴のこ

○天倉に青色が来れば九十日のうちに財を得る、赤色が来れば百二十日のうちに財を得る、白色が生ずれば災厄が起ることがある。黒くして霧の如くなれば千日の間貧苦をうける、黄色のがあるば吉祥がある、天倉が骨肉満てば次第に天祿を得る。

一一二、諸部位氣色吉凶

○印堂は眉間、學問の位とする。青ければ六十日のうちに官吏にあつては官が移る、私にあつては貴子が生れる。紅色にして紫に變ずれば喜慶がある。赤ければ七日の内は火を慎しむべし。白ければ家庭に災ひがある、黒ければ半日のうちに病氣を發する、黄色が起れば七十日のうちに喜び事がある、紫なれば官をうつり常人は思はぬ財を得る、印堂が廣ければ人の上位に立つ、缺陷すれば終生位を得られない、印堂の黒子は刑害がある、印堂が不明なれば三十四才、色が不明なれば三十六歳は厄である、その餘陷入せるは神氣が否定し、男は財を絶ち四十歳まで發祥しない、印堂、眼鼻とも清明なれば、壯年のうちから發達する。

○魚尾。(目尻、奸門といふも同じ)、目尻に青色が出れば六十日の内に水難に逢ふことがある、赤ければ六十日のうちに災ひ、白ければ六十日のうちに厄難、黒ければ病災、病者は百二十日にして

卒する、黄なれば吉事、魚尾豊隆なれば四十歳以後昂隆する。

○驛馬。(左右の鬢のあたり、邊城の下方)青黒色なれば常に馬が荒れるやうな災ひ、紫紅色があれば三七日の中に部下を召す、この部は又遷移とも云ふ、家の移り變り、又は旅行のことなどを見るものである、光澤があれば一生出入よろし、色が悪しければ移動わるし、悪しき色は青黒色である、色がよければ吉福がある、人の雇入なども、此部を見る、發色悪しければ雇入れは害がある色よければ雇入れて吉である。

○兩頰(左の頬骨)これを面の關節とする、高く露はれるはよろしくない、面の段をなせるが如きはよろしくない、最もこの骨の高く昂れるものは風憲の吏、即ち裁判官、警官、軍人などに多いが、而し何れも下級の吏であつて大官となることはできない。最も警官に適してゐる、兩觀に青色来れば兄弟または妻に災ひがある。兩頰が赤ければ怒りを生ずる、兩頰白ければ喪に服することがある、黒色が現はれる時は退職被免、常人にあつては財を破る、兩頰黄色なれば恩命を被ることがあり、灰色なれば父母に災ひがある、この部に毛が生ずれば權威ある人となる。

○歸來。(從來の相法には「歸來」は小鼻の傍としてあるが、これは鬢脚の前、驛馬の下であるが大して隔たりはない)この部に赤色を生ずれば争ひ事を生ずる、白色なれば遠方より頼りがある、

黒色なれば無意義の往來、この部は又人、及びおのれの往來を見る、或る人故郷に歸らんか如何な  
どいふ時はこの部を見る、黄、紅、紫色の時はまづ歸りてよし、青、黒、白色の時はわるし、要す  
るに右の邊城、驛馬、歸來は左右の鬢で各一寸位づ、隔てた所のもので、或る時はそれをみな一つ  
としても見るのである。

○天門。(面の道路とする、左右の眼尻と鬢即ちモミアゲとの中間、「奸門」といふに同じ)、此部の  
血色の明淨なのは永く滯りがない、その色が青紫であれば内部の功をうける、或は養子にして養家  
の力をうける、白き色は主人遊蕩に耽り、赤色交れば妾を畜へる、常に紫なれば貴子があつて喜び  
を厚くする。この部に痣、黒染のあるものは知識があつて、貴人に知られ、身分向上する、尤もそ  
の痣、黒染、黒子などは奸門中の凶兆ともなる。この部の骨が豊滿な時は天門と云ひ、骨が陥没せ  
るときは奸門といふ、奸門とは陥入せる門といふ意味である、缺陷せる時は凶兆をなす故にこれを  
奸門と稱するのである。その時は痣、黒染、黒子が却つて害をなすのである。尙奸門にある一つの  
黒子は貴子を生じ、子孫平安とする。

○額角。(謂ゆる日月角)額の角高く起るのは朝廷にも擢用される相とする、然し額は圓く高くな  
ければならない、側面から見て高低のあるのはよろしくない、額の上に腕をかぶせたやうな骨の起

るのは孤獨の相であつて、周圍寂しきものである、憎となるにはよい、然し又宗教心は深い、天中  
即額の真中の窪めるものは生涯運に淹滞があつて發展し難い、額せばまり天地淺きは父母の力を得  
難い、兩頬並に顎などの狭きものは尙更である、老年に至つて窮厄する、日角の黄なのは兄弟に喜  
びがある、日角の陥るは父なく、月角の陥るは母なし、月額の黒氣は病難一月の中に至るものであ  
る。この部の左右を又「龍角」「補骨」など稱するが、左様に細かに區別してみないでもよろしい、  
骨の高いのは又「龍角」をなすのであり、これが逆の八字の如き筋をなす、この骨が眉に入るもの  
は三品の侯伯になるとしてゐるが、然し一種の孤獨相であり、自身は幸福でも子孫親族は寂しき象  
をなすものである。

#### 四、器象定訣

##### 一、人相の型

○凡そ人相には四つの型がある、曰く、清、曰く秀、曰く怪、曰く古、これである。怪といふのは面貌の怪異なるものである、實業家などにこれがある、古といふのは形貌の古撲なるものである、宗教家などにこれがある、清なるものは形貌清奇、藝術家などにこれがある、秀なるものは神清秀美、學者醫者などにこれがある。わけて怪異なるものに第一流の成功者がある、現代に於ては實業家の根津嘉一郎氏、文藝家の菊池寛氏の如きものである。

○然しこの怪異にして神のないのは、これを粗といふ、これは親分流である、神とは『氣』である、氣とはまた『肉』である、肉色の表はれである、人に神があれば則ち氣が盛んとなる、怪にして神のないのは粗糲をなし、野卑である、粗なるものは肉の面の荒きものである、たとへば草木の枯れんとしていまだ枯れざる如きものである。

○古にして神なきを露といふ、骨格淺露してしかもいまだ孤ならざるものである。孤となればよる邊なき不遇の人である。

○清にして神なきを寒といふ、形單純にして骨寒く、而もいまた節を失はざるものである。節を失へば寒孤の人となる。

○秀で、神なきを薄といふ、形貌薄弱にして未だ志をなすに至らざるものである。志しを失へば薄淺の下素である。

○粗にして神なきを枯といふ。氣は以て神をやしなふものである。故に氣を全ふして神を安んじ肉が収まるのである。平和なる面貌をうるのである。粗にして氣なきはなほ草木の枯槁する如きものである。

○露にして氣のなきを孤といふ。形狀孤獨、水邊の鶴の如く、雨中の鷺の如く、ひとり孤立するものである。勿論財祿などは得がたい。

○寒には氣のなきを節を失ふといふ。人の守る所あつてしかも變らざるは、節操あるが故であるもし骨寒くして氣なければ、以て節操を養はず、すなはち守る所が堅くないのであり、成すなきの人となる。

○薄にして氣のないものを志無しといふ。志は神の師である。いやしくも氣を以てこれを充實することがなければ、即ち志深からぬものである。淺薄の人である。

○この四つものは陰陽寒暑の如きものである。よく御するものは貴く、よく御せざるものは賤しい、御するとは氣を以て神をうごかすことである。陰陽寒暑を相代するゆゑに相成り、相推する故に相生する。みな造化の妙に本づくのである。人の相貌も、清秀古怪を出でず、しかも皆神氣の相御に本づくのである。清秀古怪があるが、神氣のよくこれを御するものがあれば美となり、御せざるものがあれば醜となる。

○故に形あるは神あるに如かず、骨あるは氣あるに如かずといふ。これを得るものは存し、これを失ふものは亡ぶ。

○神は百關の秀聚なりといはれる。その神を察して人骨の豊厚を見るのである、この神清ければ則ち骨の清きを知るのである。骨の清きは何を以つて驗するか、すなはち陽神の氣が舒びて、山川秀麗し、日月現はれて始めて天地の清明する如きものである、『神』の人にあるもまたこの如くである。しかも神には四流がある、寢ては神は心に處し、覺めては神は目に遊ぶ、故に眼は神の遊息する宮である、その眼の善惡を察すればもつとその神の清濁を見ることが出来るのである。

○故に眼の四流を論ずるは、すなはち神を知るのである。眼波ゆるやかにして長く、寒波のそぐが如きものは大てい端美である、又深く五星の明光を視る如きものがある。

○眼の光芒の動かないものを上とする。天地廣闊、日月麗明、五嶽地に附く（五嶽は額、頰、鼻などである、これが平均する）は極貴をつかさどるのである。天の廣きとは額骨の圓大なるを云ひ地の闊きとは額頤の豐厚なのをいふのである。日月とは兩眼のことである、清明にして長大なるものは精神端清であり、寒波の澄潔なる如くである、遠く星の輝耀する如く、湛然として動かざるものは、始めは宰相をなし、終りは神仙をなすのである。

○用（ハタラ）けば則ち張り、收むればすなはち藏し、左顧右眄、機杼萬里、凝然として動かざるものはこの次なるものである。神が別に發するときはすなはち虎の物を視るが如く、凜々として感あり、人あへてこれを犯すものがない、いはゆる用あれば張る、神が内に收まれば則ち珠の淵にあるが如く。玉の石にあるが如く、得としてこれを取るべからず、いはゆる收まつて藏するのである、左右顧視するは、機慮深遠であり、人をして測つて得べからざらしめる、これは貴の次である。○或は光流上り、光流下り、物を視ること射るが如く、思慮表裏するものはその次である。元來眼の貴きは光流の上るにあり、仰視するのである、光流の下るものは平視するのである、物を視る

こと正しく且射るが如きは實に力あり、思慮表裏、内外相應するのである、この相あるものは貴の又次なるものである。

○その餘の白上白下（四白眼）、久しく視てのち退く嬰兒の如きを取つてはならぬ。眼目分明するは事の明了をつかさどるのである。白上白下するものは睛少くして白球の多きものである。久しく視て退くものは神の不足するものである。嬰兒はその目の力短かし、それを常人となせば、取るに足らざるものである。

○さらに瞞視して（べう視ハッキリ見ない）、視ること短なるもの、この二者は聰明にして貴きものがあり、凶悪にして賤しきものがある。けだし上下堂（兩眼瞼）厚實して眼波長闊するものは性格あつて貴である。若したゞよふてさらに短かく、上下堂のなく、眼瞳短小にして如きは、破財犯刑をつかさどりて賤しく若し更に好處の部位力を得れば、却つて衣食あり、亦心腹無情にして短所（若死）するものがある。

○神は外に發してはならぬ、まさに肉に發すべきである、外に發するものは火焰の如き光があり久しく視ればすなはち暗く、すなはち盈ちやすく盡きやすい、たとひ少しく意にかなふ事があつても、久しく止まることがない、内に發するものは珠の淵にある如く、玉の石にある如く、久しくこ

れを視取る能はず、これをすつるを得ず、このものは晩牛に至りて亨通し、かねて實學があり、識見が人に超ゆるものであり、且長壽するものである。

○凡そ神の和粹するものは、識るとしらざるとなくこれを説くものである、この相のものは極貴である、これをこれ神の和するといふ、神和の人は天地人がこれと應ずる、故によくこの如くである。語言動作は決して人に悪見せしむることがない、人悪の人は見るもの必ずこれを惡とするのである。

○神の深きものは曠野にありといへども、尙深處にあるが如くである。愈よ久くしてよいは明らかである、その相は必らず貴い。その上深くして雄なるものは、深山大澤に入るが如くである。磅礴幽曠、龍のわだかまり虎の踞するが如くである。凛々として威がある、これ尤も貴なるものである。神の深きものは久視して乃ち見る。

○粹は玉の如きものである、隱然温潤、中に従つて發輝する、また秋月の光潤耀徹する如くである。これ極貴の相である。神の貴なるものは氣貌群を出で、非常の人をなすのである。

○それ氣なるものは剛健強調にあらず、賢實清韻にあり、山に谷あれば即ち音響し、人に實あれば即ち氣清し、これ聲を察するの道である。聲は無形である、その虚實清濁を考へなければなら

ぬ。  
○氣と肉とは同じである。肉は賢にして賢ならんことを欲する、氣は安んじて而して和なることを欲する。二者相まつて相偏廢することがなれば即ち善質をなすものである。

○氣の本は人の生活である、安定である、充實である、この故に生活なきものは氣なく、生活充實せざるものは、氣色充實せず。

○今の人肉あつて氣なきものは何であるか、尙枯槁せる如きは、すでに内に充たざるが故である。外に皮膚の美があつても、暴風迅雨、久しくふせぐ能はず、外に發するを得ない。人に氣あつて肉なきは何であるか、なほ松柏の皮膚の枯澁するが如くである。養ふ所なきが故である。文理滋潤し根蒂深遠なれば、名を天下に動かす、養ふ所深きものは、發する所も厚いのである。

#### 二四、心と意と相

○神の滯ること八年する。——形は以て血を養ひ、血は以て氣を養ひ、氣はもつて神を養ふ、これを以て『神』は『形』の表にいづるのである。たとへば日月の光の如く、外には萬物を照す、そしてその氣の清和にして、明徹するものは富貴となるのである。富貴であればまた明徹であるとも

いへる。もしこの氣がくらくして柔らかく、濁つて怯え、虚にして急、凝つて明るみ、さながら梅雨時の空を見るやうであつたならば、その神は滯つて八年する。二十四五才にして神滯れば三十四才まで、三十四才にして神滯らば四十二三才まで、四十二三才にして神滯らば五十才前後まで、その人は全く開通するに至らないものである。

○氣の滯ること五年する。——形は質である。氣はその質に充實するものである。ゆるぎに質がひろければゆるやかであり、神が安まれば氣は靜かである。得喪が不足すればその氣を暴らす、喜怒が不足すればその心を動かす、これが氣である。ゆるぎに氣を滯らしてはならぬ。若し懦にして清からず、濁つて正しからず、急促して均等ならず、暴然として發するものは、その氣が滯るのである。氣が滯れば五年の間は開くことを得ない。故に人はたとへ心に足らぬものがあつても氣を安んずることをせなければならぬ、足らぬを足らぬとし、あへて幸福を追はず、平靜もつてその道に親しまなければならぬ、いたづらに焦燥する如きは、われと我が運命の門戸を閉塞するものである。

○色の滯ること三年。——神は氣の主である。氣は色の源である。色は容の表である、氣が内に充つれば色が外に形する、この中に金木水火土五行の色がある。四季によつてその色が旺相し休囚する、若しその色が明潤にして光徹すれば色の滯るといふことはない、若し色が昏暗にして肉の下



に伏し、または浮雜して面上に見ゆるのは、色の滯つたのであるから、三年間は運が開かない、その色の延滞は又この人の年齢を聞いて云ふべきであるが、凡そその年齢は何人にあつても偶數の年から始まるのである。たとへば廿二才、廿六才、三十才、三十二才、三十四才、三十六才、——五十才、五十二才の如くである。

○また驛馬に發する色を見るべきである。——驛馬といふのは額の左右の隅、鬢に接する所である。その上の方を邊地と稱する、又司空と稱して、眉と眉との中央部の上、額の中ほどの色も驛馬の色と同様重要である、人相を見るには第一にこの邊の色を併せ見るべく、自分も毎日鏡に向つてこの邊のよしあしを見るがよい、この邊の色がよいものは活動してよく、色のわるいものは活動しても功がない、即ち色が滯れば運も滯る。色のわるいのはうす暗く、むら／＼としてゐる、色の好いのは紅色をなしてゐる。

○この色の發しないものは聲も發しないものである、神氣が俗なれば音聲も濁るものである。話しをしてぶつぶつ云ふものは運の發しないものである、故に運をみづから發せんとするものは音聲をもよくしなければならぬ。

さらば精神あつていまだ現はれざるものは、凛々として衆にことなるものが面部、骨氣にあるも

のであり、時あつてこれが表面に現はれる、精神のあるといふのは根氣があるものであり、運命的には時來れば自然に開發するものであり、生活的に持續力、發展力があるものである。従つて陰徳あるものは二十年前の性の鈍重なものも、一日の中に通達して青雲の志を達するものである。故に人はづみからを養つて將來の大成に備へなければならぬ。

ゆゑに又精神の有無、いつの日か達するなど、これを人相の上に見極めるといふことは實は中々に見やすものでもない、或はこれを起居動作のうちに觀、或はこれを頻笑瞻視ひんせうたんしの間にみるべきであり、眞情の發露するものは、よく表を飾るものといへども、みづから隠匿することはできぬものもあり、必ず發顯する、人相は即ちかような點を把握すべきである。

○骨にも色がある。——大凡面部を以て主とする、面部の色はたいてい身體の色と同じである。これを草木の一日に百變するにたとへる、いはゆる中道に合ふものはこれを眞貴の人とする。骨法老成し、神氣瑩徹、色澤秀涯するものは必ず發祥福祉、百秀を得るものである。

骨氣とは骨の色である、骨の色といひ條、肉の色である。謂ば面部の色である。少年公卿の顔の色は半ば青いものである。紫これに次ぐ。白色は女子といへども下品である、又骨にも質がある。頭の骨の立つたのが好い。碎けたやうなのはいけない、面部が悪くとも頭の骨がよければ運のよろ

しきをなすものである。頭の骨が立たず、額の狭いものは尙わるい。頭の中央に骨が立つたのは知識あり、或は財をなすが、頭骨が圓く、串立つやうな骨のないものは半ば孤獨の僧である。名僧大知識となるものは頭の中央にまた骨が串立つものである。頭の圓いものはつひに隠者である、或は半俗半僧の人である。眉骨が立つて眉をさへぎるやうなのは壽命がない、左右の頬骨が段をなして眼を争ふやうなのは嗣子が立たない。

○大凡顔面の骨氣全くとも、亦眼に上堂下堂のあるをもとめる、眼の上下堂といふのは、眼胞である、上まぶた下まぶたの廣闊なものである。そして又光澤のあるものである。下堂が豊厚にして上と相應するものは富貴の人である。而していはゆる神氣の發するのは眼にある。

尙この眼胞の廣きものが花柳界の女性、旅館、料理屋などの女性に多く、而も亦多く孤獨であつて夫妻の縁を全うしないのはいかなるわけであるかといふと、彼等は必ず他に夫妻相尅の缺陷をもつてゐるのである。たゞ眼胞廣き故に、他の女性の年齢に比し、或は社會的地位に比較して、より以上の収入を挙げ、或は高貴の人に接するのであつて、その點では全く富有であるといはなければならず、到底サラリーマンの妻に比較することができない。故にたゞ眼胞の廣狭にのみ取つてその人の吉凶をいふわけにはゆかない。

○色は、一身の光華である。——氣剛にして色のやわらかなるものは心の曲れる人である。言語さわやかにして面微笑するが如く、面貌冷やかなるも人に隠さぬものは、これ勝を好む人であつてかへつて多能である。この色と對照するものは聲であつて、色は外に表はれ聲は内に發する、一身の貴賤この色と聲とにあるのであるから、又これを察するがよい。目前の災福は、氣色の外に出ないものである。

面部はその人の『命』であり、氣色はその人の『運』である、大命も小運もみなこの中にあるのであるから、いづれも整齊亭泰せなければならぬものである。形は一生の禍福をつかさどり、氣色は三ヶ月の吉凶をつかさどるのである。

而して人は氣を以て主とすること説けるが如くであり、内にあつては精神となり、外に現はれては氣色となる。その中にも亦終身の氣色なるものがある、少しく淡くして長く明らかなるものである。壯年には艶があつて老年には淡氣になるものである。また一年の氣色なるものがある。春は青く、夏は緑であり、秋は黄色く、冬は白い色である、また一月の氣色がある、月の朔には森發し、望月の後に隠躍するものこれである。一日の氣色もある、早朝は青く、晝は満ち、晩に停まり、に至つて靜かなるものこれである。

凡そ人相は黄色を以て正とする、黄雲の如きが額を掩へば必ず大職に就く、黄色い翹つばのやうなのが髪に入れば、遠からず身を陞進させる、印堂（鼻の上、眉と眉との間）が黄色なれば富貴する、兩眼の素明なのは明年出世をする、若し眼角に霞がかつたやうなのは、利を得るに少しく考へなければならぬ。印堂に紫の色が現はれば動いて小利を得る。紅の暈はは中位を得る、或は佳兒を得美嫁を迎へ、息子が結婚する、兩頬に紅潤の色がさせば兄弟などが發祥する。準頭まうたい（鼻筋の上）の黄色なのも利財を得る。

色の白きはよろしくなく、青きもよくない、この白色と青色とには見所があるが、白い色が眉端に現はれ、青い色が眼底に現はれることがある。いづれも心事の憂勞するをつかさどる、青いのが凝つて墨の如き色になれば、禍ひ生じて測るべからざるものがある。青きがもし煙の如く浮いたならば、酒色に憊倦ひげんしたのである。白い色が羊の伏したやうに現はれると、災ひが人に迫つてくる。白きが粉の如く、又或は青くして紫を帯び、この色が金形の人に現はれると財産を飛してしまふ、白くして光りがあり、この色が土金形の人に現はれる却つて富貴することがある。

白色の最も不可なるものは、額の兩角、即ち月角月角を夾むものであり、また額一面に白色現はれ、兩頬には桃の花のやうな色が散じ、地額また白色なるものは、前程退落して禍患再三その身に

及ぶものである。

○色のやわらかなるものは一時の色であつて雑色である。たとへば春花の開いて久しからざる如きものである。今の相法家は只色のあるを知つて色のないの知らない、常に無い色をも観なければならぬ。色の動かす、萌さず、發せず、その靜かなること地の如く、枯木の如きは、謂ゆる至人の色なるもので、生來富有であり、或は功成り名遂げたものにあるものである、巨費を投じて建築を起すも、大金を投出して別荘を購ふも、土地を買ふも子女の結婚するも、親族間に不幸があるも常人の如く色が激しくは發しないものである。至人富豪と云はれる人にあつては、「失ふものは又得る」といふ道理に安定してゐられるからである。日常の生活を少しも苦痛としないからである。所が常人にあつては日々の經營について僅かなることなども心を動かし易く、朝夕の生活的現象が、日々の重荷となることが多いために、心を勞することが多く、従つて激しく精神を動揺し、氣色がそれに伴ふて鮮明に顔面に現はれてくるのである。

色は心と相應じ、氣と相合ふものである。物のよく心に應ずるなく、心を引くことなければ、即ち色も動かす發せず、平靜であるのである。外に生活の是非がなければ、内に心の得失がないのである。故に色が顔面に萌し動くことはない、元來靜と陰とは同じ徳である。然してその靜かなること

と地の如きものとする、心がもし死灰の如くであれば、色も亦槁木こぼくの如くである。(槁木とは乾いた木で枯れた木ではない)寂然として日中に立つが如くである。これ即ち至人の色である。

○色は浮雲の日を掩ふ如くである發して外にあるものである。

○光は秋光の天に連る如くである。表裏のうちに隱約として見るものである。

○神と氣とは相合ふ、尙母の子を養ふが如きものである。

○神はよく氣を留めるが、氣はよく神を留めることは出来ない。氣はよく色を留める。色はよく氣を留めることは出来ない。——往古のよく人を相するものは、その形を見ない、その形を囚はれて觀るときは、神と色との區別が分らない、神と氣と色とは形の如何によつて始めて良否があるのではない。故に形貌悪しく、形備はざるものも亦大功を擧げ、大財をなし、世上に著傳するのである。實は氣があつて始めて形あるものである。氣とは精神であるが、又一つにはその人の生命力である。呼吸の源素である。身體組織の科學分子である。氣によつて生ずれば、形によつて質が異なる。故に人の氣質といふものは常に在るものである。而して神と色とは日々に變して留まるところのないものである。故に人の喜怒哀樂の機あるものは、内に萌して外に發する、則ち吉凶禍福の非なるものはこゝに於て、踵をめぐらさずして顔面に現はれるのである。故に神が散じ色の亂るゝのはよ

ろしくないと云ふのである。

○神散じ色の亂るゝ人取るべからず。——神散すれば即ち心が亂れ、心が亂れば形色が變ずるとへ剛氣があつても、秋花の盛んなるが如く、久しくは保つことが出来ない。神の散するといふのは中々説明しにくい、大たい顔に活氣なく、艶なく、光りのないものである。即ち印象しがたい顔面であり、これに顔色がムラ／＼と變つてゐるものである。即ち色の亂るゝものは又神の散するもので、精神の動搖するものである。

今かゝる顔面の人と見たとして、この上に顔の隅に黒暗色が出てゐれば住居の變らんとするものであり、その人の運は悲觀的であり、赤黒ければ遠方に行かんとし、また鼻頭に赤色むら／＼と發すれば金錢を多く費すことがあり、失敗が續き、鼻が黒暗なれば金錢に窮し、邊地のあたりに白色があれば親戚に不幸があり、眼胞黒く眼下に白色が出れば子女が病ひにかゝり、印堂が黒暗にして額に霞かかつたやうなれば失職中にあると推するの類で、氣色はみな人の吉凶禍福を示すのである。○面おもてに、無求むせうの色いろといふいふののがある。——舉動屈すべからざるの氣、内に重き人である。即ち『頼むところのある人』の面貌である。何事も他には求めず、みづから敢然と世に立つ所の自信力ある人の氣色である。

人の心は意と色相と表裏をなすものである。その心がこのやうであり、その意もこのやうであれば、色相も亦そのやうであるはずである。その人はその心を以て人にかくれる。茲に於てかその人に無求の色、求むるなきの色がある。求むるなしといへども全く求むなきのものはない、人の世の財寶名聲を求めないのである。たゞ求ないといふ心を求めてゐる、故に求めるといふ色が又ある筈である、物をなしても亦人に屈せざるの意もある、精神ひとり衆に抽でんとする心がある、故に又無形の求心がある。従つて色もある、色もあるが外に發せずして内に重い。

無求の色は黄である。面貌全體黄色をなして沈靜するものである、これも亦至人の色である。

### 三、視ると聴くと

○三、倚、凶、を、な、す。……三つのかたよれる相、一は眼目の露出すること、子なきの相をなす、二は喉骨のあらはれること、孤獨の相をなす、三は眼に四白をなすこと、四白とは目の玉小さく、瞳球小さくして四方に白球體のあるもの、この四方眼は女子にあつては夫が悲命に斃れることがあり、輕きは發狂、さらに輕きは孤獨にして夫がない、有つてもその夫は役に立たぬデクの棒であり、人生の落伍者である。

○五行の眞定。——背、腰の、有、無、を、取、る。人相學上に木火土金水の骨相ありとして色々説明してゐるけれども、この五行なるもの、形をとらへることは實はたやすくはない、然し次の如くにすれば大凡五行の形がわかる。即ち腰あり、背あるものは眞の火形である、腰ありといふのは腰に骨肉あつて肥大するものである。腰のないものは坐して身體を動搖させ、腰のあるものは動搖させない、即ち坐して動かない、女性の骨盤太きものは美人の中に入れぬけれども、由來「美人に腰なし」と稱して、これは不遇者の中に數へてゐる。「美人薄命」と稱するのは、即ちこの腰なきものであるからである、腰のないものは生活力が鈍い。

金形も火形も土形も水形も皆腰と背の形を取つて云ふのである、(その外皮膚の色にもある)ひとり木形のみは只腰を取つて背を取らない、木形は本來瘦形であるからである。背は別の言葉で、「三王」といひ、骨筋と左右の肉とが別れて盛り上つてゐるやうな形でなければいけない。背が駱駝のやうに瘦せたのは即ち背のない形で吉祥がない。腰のないものは貴からず、背のないものは富有でない、即ち貴人には腰があり、富人には背あるものである、背あるのは肩幅があり、たゞ木形のみは背を取らない、この形は瘦せてもよろしい、腰のないものは坐立が不正である。背のないものは背髓が前屈してゐる、その形で五行を取れば誤まらず、又その貴否を云ふことが出来る。尙こ

の外に視ること、聴くことの吉凶がある。

○名を天下に動かすものは、「神」と「氣」のみを取らないで、視聽の表裏と背と腰とを取るのである。——人の神氣の貴いことは前に述べた、さらにまた腰と背とを相さなければならぬ。腰と背とが全ければ、また視聽の表裏をみなければならぬ、視聽と耳即ち視ること聴くことである。これらの機關がそなはるものは聰明の人である。古書にも視ること遠ければ明らかなり、聴くこと徳あればこれ聰なりとある、これ即ち人の聰明の實である、物を蔽はず、情にひかれざるは即ち視聽の表である、耳目外に秀づれば誠明らかに内足る、これ視聽の裏である。かくの如きもの名を天下に動かすの英傑である。

即ち視聽の表裏なるものは、その形よくととのひ秀明であれば、これに籠るところの感覺も亦聰明ならざるもの、名をなさぬもの、富を作らぬもの、出世發達しないものなどの目や耳は、或は倚形であり、或は小さく、或は醜く、他の器管又は顔面に比べて、はるかに見劣りするものである。

○視るものは『神』であり、聴くものは『心』である。——即ち眼は心を現はし、耳は心を表はすのである。馬鹿か利口かは眼と耳で區別されるものである。耳が顔面より白ければ聲で天下を動かす故に聲樂家などの耳は常に面よりも白きものである。術業を以て人を動かすもの又これであるが、

相が備はらないでたゞ耳が面より白きものは何の得る所もないものである。故に聲樂家などの天下に名あるものは必ず、男女とも容貌の秀麗なるものである。醜男醜女に聲樂家などはない、若し有りとなれば一時の名聲だけである。

○眼には上下堂（眼胞の肉と幅）あるを欲する、鼻は圓くして光りあるを欲する、さらに眼にあつては三陰三陽陥らず、鼻にあつては尖偏倚なきをよろしとする。三陽三陰は左右の眼である、男子三陰は右の眼、三陽は左の目であるが、女子はこの反対とする、（右が西で左が東である）又これを太陽太陰とする、今三陰といふのは、大體眼の上下と眼とをいふのである。三陽といふのも亦同じ、即ち上下の眼胞と目とを云ふのである。誰でも眼の凹んだものはよくない、然し西洋人の見方はこれと違ふ。目の凹んだものは多くは父母の陰徳がなく、遺産も残されず、早く父母に別れ、辛苦の中に人となり、家庭をなしては兒を失ひ、或は親ゆづりの家屋敷を失ひ、一時浪々身となり、又は妻をも害することのあるものである。

鼻は途中で折れたのはいけない、鼻筋の通らぬものは産を成し難い、又父母と相尅する、祖先の道徳がない、子縁が浅い、女にあつては夫縁がない、あつてもその夫は碌々成すなき人間であり、或は幾度か夫縁が代るものである。

鼻は圓く力があり、又他の部位に缺陷があれば、類面に比べて大きくもよい、小さいのは財があつてもその生活は狭小である。

○鼻の折れてないやうなのは、口の上方を取る。——鼻の梁が折れても眼胞が方満し、左右の頬がこけて皿のやうにならず、この邊に骨肉あつて豊滿に、且力があつて口の周圍に肉あり幅あるものは貴福をなすものである。政治家の濱口雄幸、若槻禮次郎男、實業家の大川平三郎、根津嘉一郎文藝家の菊池寛の如き、概ねその類である。

○さらに眉は上つて長きを欲する。——また呼吸の長いのを觀るべきである、眉の長いのは眉毛の長いのを云ふのである。横に長いのではない、眉毛が長く、目を覆ふやうなのがよいのである。人の呼吸も亦長いのがよい、呼吸が綿々として長いものは長命の人である。呼吸をするのかしないのか靜かで聞えないのが好い、平素ハアハア息するものは短命である。眉毛の長いのも亦長命である。昔、莊子といふ人が言つた言葉に、「至人の息は踵を以てし、衆人の息は喉を以てす」といふのがある、喉を以てする息はよくない。

○眉あらはれて骨を露はさず、目あらはれて睛をあらはさず、眼光うすきもの。——この露はれて露はれぬものは破相をなす、露はしてあらはさずとは、在つて秀でないものである。又行露はれ

て臂をあらはさず、立あらはれて肩を露はさずと云ふことがある。歩くときに肩がそば立ち臂が出るのは俗人で福のないものである。坐する時は肩が張り臂が出るのがよい、だから行くに臂をあらはさず、立つに肩を露はさずと云ふのである、人が坐した時は虎が踞したやうな姿が好い、虎は踞した時は肩が張り臂が出てゐる、立つて歩む時は肩を落し臂をすほめてゐる。故にこの反對に往く時肩が張り臂が出るのはよくない、多く俗人である。俗人は往くに肩で風を切り、臂を振つて行く、壯士などにこの姿があるが、壯士などに高貴なものはない。

然しこの破相のものに却つて時に大人もある、目の露はれるのは凶死する相であるが、この相のものに又貴にして壽命の有るものがある。これは人相の逆を行くものである。即ち極すれば又返るで、凶の極は吉になる場合がある、人相中の「永樂問答」に、官となれる貴人が刀劔の難に遭ひ朝中の大臣が薄貧であるのは如何と永樂帝の質問に答へて、柳莊が、吉相中又大凶相のある所以を説答してゐるのは一半の消息を傳へるものであるが、今は詳しく説かない、この四つのは心用けば張り、收まれば藏すると同じで、用けば露はれ、收まれば露はれざるもので、露はして露はさずといふ消息は極めて微妙なるものである。

○眉眼が全く露はれ、黒睛のまた深きものは極法の人であつて、この相は悪い。——演戲も繪畫

にも極悪の人を現はすに大きな目、太い眉、大きな口、高い鼻などの人物を表はすのはこのためである、わけて太く濃い眉毛、大きく露出した目は悪人の代表となるのを見れば、相法上かくの如きものは決してよろしくないのを知るであらう。然し西郷南洲翁の如き眉の太く露はれた人がある。この型は謂ば貴人となれば大貴人、悪人となれば極悪人となるの相である。

○鼻の勢ひが邊地より起れるものを、名づけて學堂の址しといふ。邊地は眉尻のやゝ上部に位するその邊から勢ひが起ると云ふのは眉骨が張り、眉骨に續いて鼻柱が立つてゐるもので、目と目の間が折れたやうになつたのは學堂のあとのないものである、それはいかに學問が有つても社會の上表に出られない。蔭にかくれた學者である。即ち印堂（印綬——學問の位とする）がないものである。然し「命門」の邊をも學堂と稱する、命門と云ふのは耳の穴の前一寸ばかりの所である。こゝもむつくり盛り上つたやうならなければいけない、「學堂」は衆善の歸する所とする、鼻が邊地から起り、學堂が豊隆なれば、學問をもつて世に現はれて第一流の人となるものである。

○人中にんちゆう及印堂いんたうにあらず。——人相の善とするところ、人中（鼻下の二本の筋）及び學堂にありとするが、富貴にして壽命の全きものは、學堂が豊隆して光澤あらねばいけない、學堂は或は方、或は圓、或は大、或は小、何れにしてもよいが、その形の備ふをよしとする、目の上下も亦學堂をな

す、目の光りも學堂をなす、耳も鼻も口も皆學堂をなす、この部分に入つの區別がある、即ち

眉を班筆學堂はんすうがくたうとなす、耳を聰明學堂となす、目を光明學堂となす、顔を高明學堂となす、額角を高廣學堂、印堂を光大學堂、口唇を忠信學堂、舌齒を廣德學堂となす。

何れもその人の性格を表はすものである。たとへば眉の秀でたものは壽命がある。耳の秀でたものは聰明である。目に神のあるものは先見の明がある、額の廣いものは度量があり、爵祿があり、額角の張つたものは威武がある、印堂の高いものは學名がある、口唇の豊かなものは忠信の人である、舌齒の清いものは衣食に豊富であるとする如くである。

○齒が枯れて神が散じ、黑睛くろしやうに光りがなく、頬骨が反つて眼瞼が凹みたるものは、かつて意に稱ふ運命が來ないものである。——齒の貴いのは密にしてあつまるものである。枯れたのは齒が透いてゐるものである。齒が白く並んだものは早く財祿を得、且一生不自由せぬものである、齒のちぐはぐになつたものは生活に苦しむものである。神貴きは齒が集つて和するものである。缺陷なきものである。目に光りの無いものは神が無い、目が反つて白球體を露はし、頬骨が高いのは主人が無い、眼瞼の窪めるものは子供が無い、高貴なるものは頬骨圓く高くして角立たず、眼瞼が豊満である。



○鼻の孔が圓形のまま、正面を向いて棒が通るやうであり、その上に鼻梁が有るものは、終りをよくしない、旅に出て、或は病院、又は勤務の場所などで死することが有り、病氣をすれば肺病になる、最も乳が上を向いてゐても左右の小鼻が圓き袋の如くなつたのはよい、財錢多く散すれども又従つて入るものであり、悪死することも無い。

○鼻柱が高く急に盛り上り、目に神の無いものは、壽命は四十才、五十才を出ない、これを一に鶴鼻と云ひ、驚鼻と云ふ。——鼻の黄なのは自然と勢ひあつて隆高するものであり、神の貴なるは眼の深重なるものである。

○氣、柔かに骨の散ずるものは、財、祿が有るとも多難で有る、神重く肉のゆるむものは老に至つて貴福を得る。——骨を主とし、氣を客とする、(氣は肉であり、神は目である)神は氣の主である、骨が散ずれば又氣が宿らない、骨の散ると云ふのは目鼻口の如き五官が美醜なりに描はないものである。前に「一身の精神兩眼に且はり、一身の骨相、面部に具はる」と云つたのもこの事である。今主客融和せなければ即ち心に稱ふところがない、即ち又目的が達しられぬ、神重きものは晩年に發達する神の重いと云ふのは目がキラつかず、目に重みのあることである。

○神重く肉緊れば作事準あり。——作事準なるは、爲すことに準序あつて着々功を擧げることである。

ある。神の重いのは、目に底力のあるものである。このものは思慮幽遠である、遠きおもんばかりを持つてゐる。やがて「作事あるの日を期待してゐる」、且肉も引緊らねばならぬ、若年の中に贅肉あるはよろしくない、且又笑つて齒ぐきを露はすものはよくない、靜かに笑つて深く齒を露はさないものは精神を深藏するものであり、端正の人である。

笑つて齒ぐきの赤きを現はすものは夫妻相尅である、男子は妻を尅し、女子は夫を尅す。

○坐して斜めに見るものは、所思正しからざる人である、物言ふ時に淺くして舌を露はすものは賤相であり、身に刑傷を帯ぶるものである。

○齒が漸く唇を覆ふものは、一生心が定まらない、また刑傷する、また家道を破る、口が淺くて齒を見すものは、老年になつても立所がない。——この相また夫妻相尅である。下唇の短かいものは心が足らない、唇の薄く寒く小さいのは貧相である。笑つて大なるものはこの限りでない。

○歩行坐立不正なるものは、多く自強を好み、或は小技藝がある。——これは腰なく背無きものである。たとへ長所があつても技藝の小なるものである。

○五行の形はみな正しいのがよろしい、目紋が長く耳に入るものは貴官となる。——眼紋の長く耳に接するのは笏紋といひ、權あるをつかさどる、男女ともこの切目の長いのは貴い。

○耳白くして潤ひあるものは名聞天下に聞ゆる、少年の入學試験に及第するものも又耳白くして潤ひあるがよい、他色は及第せぬ。骨細くして肉に膩あるものは早年に發祿する。

○耳の根に二つの黒子あるものは道中に死する。眼胞に黒子あるものは刑罰に遭ふ、鼻の端正なるものは、動五等以上に至る。

○骨細くして嫩(若)からざるものは三等に至る。——骨を主とし色を客とする、相應して粗雑ならざれば皆三品の相である。

#### 四、鼻と印堂と

○耳の深きものは學問廣記である。眼に角なきものは作事機無し。——眼の三角なものは神の深いものである、眼の圓るのは神の浅いものである。

○神が散じ氣が聚れば少年に孤にして家を破る、氣が散じて神が聚れば、作事少しく定まる、鼻が尖り、準頭(鼻の尖)が少なるものは少祿しか得られない。——神が散じ氣が集るといふのは眼が茫乎として肉に色のあるものである。氣が散じ神が聚るといふのは、肉色がむら立ちて眼光にのみ力あるものである。鼻の隆高なるのは貴く、準頭の高大なるは祿が高い。

○耳堂の塞がるものは智慧が浅い、肥滿せる人にして耳の下に肉のないのは貴なきの家である、その下の肉の陥るのもよくない、この邊を『懸崖』と呼び、肉のないのは財もない。

○骨が細くて肉の重いものは老年に至つて發達する、早く發達すれば災が多い。肉の重いのは皮膚の硬いものである、謂ば多角型のものである。かゝるものが早く發達すれば年四十を出ない、著者の如きは骨が細くして肉が硬い、四十までは勞祿多難であつた、四十一才より發達した。面の肉が燥きすぎてゐるものは年五十を出ない、五十三才か五才はよろしくない、肉に横紋があつて赤色にすぎれば壽命が短かいのをつかさどる。

○驛馬(額の角、鬚のあたり)或は先に發達し(色が發することである)、『祿庫』、また分明ならざるは貧中俄かに高位を得ることがある。祿庫といふのは額の眞中、人相上「天中」と稱する所、この二つは何れも肉が豊厚でなくてはならぬ、驛馬、祿庫の共に陥つたのは二十四、五才命を失ふことがある。驛馬、邊城の陥けたのも同様である、「天中」のみ拇指で押したやうに凹んだ人があるが、かくの如きは男子は作事なすなく長じて官祿なく、田宅なく、或は刑獄の難に遭ふことがあり女子は夫がなく、あつても惰夫である。この二部は共に缺陷のないのをよろしとする。骨肉の豊厚なのは少年にあつてすでに吉祉をうけるものである。

○眉が長く印堂（眉と眉との間）に交れば中年に命を失ふことがある。壽命は四十を過ぎない。男子は子を害し妻を尅す、眉が印堂に交はるはよろしくない、人に印堂がなければ四十才に至るも未だ名を成さない。

○眼胞が廣くとも肉が相應しなければいけない。——眼胞の狭くとも陥らぬがよい、肉の豊厚なのがよい、陥つたのはよくない、骨肉が相應しなければいけない、眼の下に「蠶肉」と稱して蠶の如き肉の盛り上つたものは子供がない、この蠶肉は眼瞼の廣きものにあるものである。

○さらに暗氣を加ふれば、學問があつても位がない。——謂ゆる氣が休して肉下にあるものである、暗慘として分明でないのは、氣と肉とが分明でないのである、かくの如きは學ありても位がない。

○神の剛なるものは妻を尅す。——神の和するものは吉である。神は又氣色である。

○印堂の邊に黒子あるものは官の讎めをうける。——印堂もし平滿にして滋潤すれば、學問が現はれる。黒子が一つあれば印綬（學問の星を破る）、故に學があつても世に出ない、及び官災がある。○立つて肩を露はす人には子がない。面の平らかなるものは子が貴い。耳低きは少壯にして名がある。耳そばたつて眉をすぐるものは名譽である。印綬落つるともこの缺陷を補ふものである。

○鼻梁小なるものは膽氣がない、大にすぎたものも同じである、面上に黒氣多きものは女兒が生れる。黒氣は北方（坎）の色だからである。

○眼下の肉の方圓なのは亦高位にのほるものである。子孫も繁昌する。——眼下の肉の豊厚なものを臥蠶紋と稱する、今の蠶肉とは別である。蠶肉は更に盛り上つた肉である。臥蠶紋はふつくりと豊かになつた肉である。この相は福の厚きをつかさどり、貴子を生むことを主るものである。

○頭の頂きに龜の甲の筋の如き骨があり、更に鼻梁が高く、印堂が張れば華族に列せられる、頭頂がたゞ圓いのは僧侶か隱者である、名僧知識となるものはまた頂骨が高い、羅漢の如きものである。頂骨が龜の背のやうであるものは、常人にあつても必ず、人の上位に立つものである。

○唇がうすく齒が均齊であれば、或は富貴の人となるが、然し生涯中には是非の事がある。耳の輪と眼胞とに黒子があれば妻の尅をうける。「魚尾」（左右の目尻）に黒子があれば、妻が財産を持つて嫁して来る、或は財家の養子となる。若し行くとき腰を振り、語る時に舌を見せるものは財祿があつても失ふものである。

○身長く腕短かければ五十を過ぎず。——貴人の肢體は上下相稱し、腕の長きもそれに應ずるものであるが、大貴なるは腕の却つて長きがよい。手の長いのは泥棒の相など世俗に云へるが、手が

長く腰をすぎるものなどは大富人である。若し手が長く身が短かければ必ず壽夭をつかさどるものである。

○法令紋（小鼻のわきから下る皺）が口角に入るものは老年に至つて餓死する如き窮乏に逢ふものである。——この相は又短命であるとする。

○耳、鼻、口、眼、印堂ともに清明なるものは大學にも入り、父母に善根がある。

○耳の明らかならぬものは三十歳を過ぎない。——耳の不正なるものは聴くこと遠からずといふ

○眼明らかならぬものは三十八才を過ぎない。——視るに清徹ならざるものである。

○鼻明らかならぬものは終身祿がない。——その位が陥没せる如きものである。然し小鼻に力があり、地閣（下顎）が張つて力あればその缺點を補ふ。

○骨明らかならぬものは四十二才を過ぎず。——骨明らかならぬものとは面に骨がないやうなものである。

○印堂の不明なものは二十四才。——この部の陥入せるは、壽命があつても失職などがあり、一生の大轉期がある。——氣が浮んで色の不明なるものは二十六七才を過ぐ、その外眼胞の落込みたるは財祿に絶し、鼻梁が張つてゐれば四十二才よりよくなり、鼻が落込んでゐれば五十一歳頃より

少し好運を得るものである。神氣の不足するものは福がない。

○終生貴なるものは神思淳淡にして、嬌嫩の色がない。嬌嫉はなまめかしく柔らかな色である、主に男子に云ふ。

○貴人にも軽きがあり厚きがあり、清きがあり秀でたるがあり、粗なるがあり、細なるがあり、瘦せたるがあり、肥えたるがあるが、みな秀媚なところがなくてはならず、只形骨が完全であればよしとするのではない。形骨が完全なのは五行が完全なのであるが、而も五行の聚るところは媚秀の氣をなすのである。即ち五行の氣が完全なりといふのは、木、火、土、金、水五つみなその中に備はつたのではない。五氣何れかゞ完全なのである、即ち五行の何れかの氣の聚る所が形骨の美をなすのであるが、而も貴人と雖も亦全く完全なものはない、時によつて大いなる凶兆を起すこともある、それらは五行の何れが一方に傾くか、又はその尅害をうけるかするためである、大臣大官にして獄中の人となれるもの、ある如き、又は悲命に斃れるごとき、即ちその害をうけるからである

○秀媚の氣は五行の氣の秀でたるものである。而して肥肉淺くして秀媚の氣のあるものは必ず後に至つて貴人に近づくことができる。肥肉深くして秀媚の氣のあるものは、三十歳後貴人に逢ふものである、或は瘦薄にして骨の清きものは聲望がある。早年貴人に近くといへども運には延滞があ

る、また行儀を以てこれを助けなければ發達しない。

○さらに秀媚の氣のあるものは、六十才後に至つてまたに顯達する。——五行あつまる所秀氣をなす、人面五行備はる所、貴をそこに集むるのである。

○面に黒色を生ずれば疾病がある、赤色は破財を主どる、白色は哭泣（悲しみ）、青色は憂驚を主どり、黄色は喜慶がある。凡その色は四時季を分つてこれを用ゆる。春三月（寅卯辰）は青色が旺じ、赤色が相し、白色が囚はれ、黄黒二色は死する。夏三月（巳午未）は赤色が旺じ、白黄二色は相し、青色は死し、黒色は囚はれる。秋三月（申酉戌）は白色が旺じ、黒色が相し、赤色が死し、青黒二色は囚はれる、冬三月（亥子丑）は黒色が旺じ、青色が相し、白色が死し、黄赤二色が囚はれる、若し五行の色がこの時に旺相すれば吉を得、死囚すれば凶となる。

春は木、即ち青色である、夏は火、故に赤色である、秋は金、即ち白色である、冬は水即ち黒色である、四季の土用は土、故に黄色である。

○眼胞の上下が黒色であり、或は青色であれば、妻又は娘が重病にある。——或は近親の場合もある、及び憂苦をつかさどる。

○眼に溟濛（雨降り）の日の空の如き色が生ずれば、「天羅」眼に入ると稱して凶である、天羅は

土である、即ち土色である。その色淺ければ家を破りて身に災ひ、深ければ財を失ひて下賤となる。庶人にあつては死期が近づくことがある、眼に氣の浮むものは心多く貪である、貪らんのためにかへつて大敗する、終身過ちのないものは、眼の明潔なものである、視ること遠きものは多智の人である。下を視るものは多謀である、平らに視るものは徳がある、斜めに視るものは心上こしまである。瞳を幾度も動かして視るものは奸智である。

○悠然として靜かに、淡然として止り、驚いて瞬きせず、言葉歩行に隨はず、默止に上らぬものは貴人である。——その心が世間に關することなければ則ち目動搖しないものである。故に運のよきものは少く瞬きし、運の悪しきものは多く瞬きする。心が常に動搖してゐるからである。

○凡そ視ることに力のないものは大事をなすことができない。大抵瞻視（能く視るもの）は力のあるのをとめる、精神は浮いて溢れないのを求める、初めて視て若し浮んでも、久しく視て愈よ徹すれば害がない、害がなければ運には滞りがある。

○垣根は薄ければ壞れ易い、酒が薄ければ酸し易い、絹が薄ければ裂け易い、人が薄ければ亡び易い。——骨の淺薄なるものは即ち人の薄いもので謂ゆる蒲柳の質なるものであり、線病質なるものである。

○貧賤をその地閣に決する。——地閣は顎の邊一體である、豐滿なのは貴い、二重頤になるものは田宅を有し、又は財産がある、淺薄窄狹なるものは田宅がなく、或は貧賤を主とする。

○智慧をその毛に窺ふ。——肌膚細膩にして毛髮柔澤なるものは多く智慧がある。頭髮の濃いものは多能である。禿げるものは單純である。

○苦樂を其手足に觀、その音聲に察する。——手足は身の技幹である。若し節多くして薄きものは謂ゆる收財であり、勞苦をつかさどる、手足玉の如く、筍の如く、滑らかにして苔の如きは富貴の人である。音聲は神氣の表現である。聲の寂び枯れたるものは勞苦の人である。澄んで明朗なるは財あつて安慰の人である。

○上は聲に察し、中は色に察し、下は骨を見る。——凡そ相をなすにはまづ聲を先にし、次に氣色、次に形骨を見る。聲は心の源である。五臟虛實の證である、色は精の候、骨は肉の本である。然ればすなはち聲徹して和し、重くして透れば上相である。色は明らかにして潤ふ、中相である。骨柔らかにして立ち、聳えて圓きは下相である、三者ひとしく備はれば純粹の人である。

## 五、遺傳と體質

○最近厚生省は國民の保健に就て、將來は遺傳學並に優生學上の立場からも大いに研究の上施設する處がある由、新聞紙上にて知つたが、我々はこの點では學說としては或は古いかも知れないがワイスマンのマトビズムを實驗してゐるものである、此の事は古く自分の著書中にも發表したが、今又歸納的實驗學の上からこれを述べて、人の徳性の磨くべきを暗示したい。

○我々は常に人相學上の立場から、男子にあれ女子にあれ、骨太く肉附よく、豐肥せる人を見て祖母系の遺傳なりといへば必ず的中する、又男子とも瘦せ形のものに對して祖父系の遺傳なりといへば必ず的中する、この場合一方は母に似、一方は父に似ることがある、又眼胞の廣きものを見て母方の遺傳なりといへば必ず的中し、眼胞の狭きものを指して父方の遺傳なりといへばこれ又的中する。

○それらは人相學が歸納から今度は演繹する一つの事實であるが、ワイスマンの説は「孫はその父に似ずして、祖父に似る。」といふのが眼目である、この式を記すのは煩しいから示さない、又その學說も遺傳、變異、雌雄生殖、應化、系統進化、再生其他生物學上のあらゆる大問題を控へてゐる。

て、それが相互に關聯する處の甚だ複雑した一つの學問であるから、かような短篇の上で一々説明もできない。然しワイスマンの提案はその原形質に二つの異つたものがあり、更にその遺傳質は細胞核の内にあるものとし、その上細胞分裂の際に現はれる染色體の内にあるものとしてそれにイドと稱する粒子名を與へた、イドは染色體の更に小さな各個の流體から成り、染色體はイダントと呼ばれ、各個のイドは一つの完全な生物を形成するために必要な、あらゆるものを藏する生殖の一部から成り、これが即ち「個體の基原」であるとするのである。

○イドの中には更にデテルミナント（決定子）と呼ばれるもの、及びそれが決定された時に呼ばれるデテルミナント即ち選傳片といふものがある。デテルミナントはデテルミナント許りではなく更に其上にピオフォル（擔生單位體）といふに分れる、これらの性質が他の因子の細胞の細胞質に働いて、次での胎をなし、次での體をなすのであるが、これらの生殖細胞は祖先が持つてゐたと同數のイドで代表された「祖先の體肉質」を、遺傳の肖似によつて現はしてくるもので、その化學的和親力は一つの法式で表はすことができる、その模式はこゝにあげぬが、何れにしてもその結果に於ては、子は父に似ずして祖父母に似るといふ事になる。

○故に我々は人生觀的の立場から考へて、我が子女の身身體や健康を思ふ時は、それは我々が兩

親として子女に傳へた健康や身體を思ふ時は、それは我々が兩親として子女に傳へた健康や身體ではなく、我が父が傳へたそれであると知らねばならず、我はまた祖父母の再現であり、我が孫は又我れの肖似再現（これが所謂先祖かへりである）であると知らねばならぬ。

○従つて兒の健康を考へる時は同時に孫の健康を考へねばならず、あとにも先にも三代づつの體質と及び性質とを考へねばならぬことになる。従つて國民の健康問題を考へるものも、將來單に次代の國民の健康を考へるばかりでなく、次々代の國民の健康をも考へねばならぬことになる。

○人の徳性の問題も大凡これと同じである。徳川時代は「唐様で書く三代目」と稱し、三代目の人物は多く凡様成すなきものゝやうに喻へたこともあつたが、事業家にまれ學者にまれ、人物の出るのは三代目であることは欺けない事實である、所謂天下に名をなせる人物にしてその祖父が偉大な人物であつたといふやうな事實はその例が澤山にある、これとは又反對に名家に二代なしで、名家の子の凡庸にすぎたものも甚だ多く、世上幾多その實例が少くない、山縣有朋公の二代、板垣退助翁の二代、大隈重信侯の二代、澁澤榮一子の二代等、尙屈指に暇なき有様である。

これらは決して性質上の徳不徳が、人間的に影響するのではなく、遺傳學上の生物學乃至化學的な機構事實がまづ本質的にこれを左右したものとし、之に外界に依る變化が生殖質淘汰の能動とし

て加はつたために、次代には却つて劣等な性質の現はれを來すことになつたので、全く一つの傳移的なメカニズムにすぎない、従つて人は次代のよりよき人間を作るには、單に次代の人間、即ち兒の健康、知徳の健全を計ると同時に、その目標を自己より三代目、即ち孫の健康、知徳の健全を策する上に意を注がなければならぬことになる、此の點よりすれば我は父母のみではなく、同時に祖父母であり、祖先であるといふことになる、すでに祖父母であり、祖先である我れにあつては、人間として最もすぐれたる處の知徳と健康とが望ましい、これは今日すでに父母となつた既婚者に對してのみ云ふ言葉ではなく、これから父母となるべき青少年子女に對しても云へる言葉である、然し身體の健不健に就ては、幾分天然のものがあつて、既得せる身體の組織如何に就ては、或は人為的作用の及ばざるものがあり、胸圍の身長に比して狭き、まことに悲しむべき一例と言はざるを得ないが、その他の缺陷は又或點まで人為的作用（運動等）によつてこれを補ふこともできるのであるから、常に最善の方法を執ることを心がけて次代乃至後の代の子孫にその惡質を残さぬやうにこれ計るのが人としても亦國民としても當然の義務なのである。往時、戰國の時代に、我國の勇士が、勇壯なる子孫を獲んとして、好んで巴板額流の女子を選める話のあることは、自然の理法にも叶つて、ほゝゑましく、又森嚴な感じをさせる話である。然るに今日の結婚の如きは、やゝもすれ

ば、變愛主義に流れ、種族の保健と云ふ議題の如きは考慮の中になく、只趣味感情の一致を求めて夫婦の理解的生活を念とするのみである、人には是非ともこれら遺傳學上に於ける獲得形體のメカニズムを知る必要がある。

○元來貧乏人の顔面には皮膚に圭角があり、富有なる人の顔面は皮膚が圓滑である。——とするのが人相上の定義である、皮膚に圭角があるといふのは醫學上の言葉であつて、人相家が假に設けた作り言葉ではない。

○皮膚に圭角があれば顔面の線は鮮明でない、皮膚が圓滑なれば顔面の線は鮮明である。とするのも第二段の言葉である、通俗にいへば前者は顔がぼんやりし、後者は顔がはつきりしてゐる、この二者は精神生活ともに天地との相違がある、従つて富めるは身體の血行もよく、貧しきは血行も悪い、故に一見して貧富の差を知られるのであるが、更に之を一步進めて富める國の人の相貌と富まざる人の國の相貌とを比較する時は、全く雲泥の相違を見ることがある。

○早い話が文明人の相貌と、未開人の相貌とは全く異つてゐる、歐米人とアフリカ大陸の土人と相貌は全く異つてゐる、統治國と被統治國の人種の顔も違つてゐる、さういふ點からすれば我々日本人の顔と、歐米人の顔とは違つてゐる。



○洋の東西に於ける相貌の相違は、我々は單に人種上の相違とのみは見ない、それは一面に於ては「持てる國」と「持たざる國」とも見られる、といつて我々は白哲人種が尊く、黄色人種が卑しいとするのではない、黄色人種は黄色人種として嘗ては大なる文明をなした、支那は思想的には西洋を壓倒した時代もあつた、スピノザ、ヘーゲル其他の哲學者が、支那哲學の受賣である所もある仁義の教へは支那が元である、印度からは佛教が起つたクリスト教の如きは小亞細亞は於ける宗教の衣服を着て美々しくなつたものである、數學は殆どアラビアのものである。所が西洋は早く物質文明の域に入つたので、その機械力で東亞を制覇して今日の富有國となつたのである。

○従つて人種もその點に於て磨きをかけられた、そこで更により多くの人爲的壯重さを加へたのであるから、我國が今後東亞民族の興隆にたづさはり、地下に埋藏される幾千數億かの限り知られぬ天然資源を醒し起し、機械力を應用してその文化を向上せしむる時は、さらにその相貌の如きは壯重謹嚴なものに化するであらうと思はれる。これがためには國民は或る人の云ふ如く、「犠牲を忍ぶ」ことを「崇高なる義務」としなければならぬ、而もその義務たるや、敢て戰場ばかりではない所謂銃後に於ける後援も納税も、義務も、消費節約も、皆その中に籠められてあるのである。

## 六、風土刻應

風土刻應といふのは、風土によつてその相を斷すべしといふのである。昔中華に於てはその國土廣きを以て東南西北を八洲にわけてその人物を觀相した、今日日本もその地理極めて廣範になれるを以てその風土に就て相を察しなければならぬ。

然し今日九州人と東北人と人相の上に於て格段の相違があるのではない、由來日本人は凡そ六七種の人種によつて結合せられてゐるだけ、各人により蒙古型あり、滿洲型あり、朝鮮型あり、アイヌ型あり、歐洲人型ありて一様でない、又頸の長きものあり、短かきものあり、鬚のあるものあり無きものあり、色黒く鬚のないのはニグリート族、カルマツク族、印度支那族などであり、ツングース族は疎髯であり、アイヌ族はことに毛深い、これに白哲人が交ることは九州地方の人に謂ゆるナポレオン型の鼻と口と顎と及び紅毛とを持てるものあるのを見ても知られるであらう。

従つてこれら民族的人種の形質について、それ／＼の特長もあるが、今相法上格段と辨別することは容易でないが、然し凡そその風土が齎した所の特異の氣質については多少なりとも觀者の胸中にこれを推察することができる、故にこれらの條件を知るのも、亦觀相上の一手段である。

然しまた唐學といへる人は、相を論ずるに形をいふを好まずしてよく色を言ひ、言聲を云ふを好まずしてよく氣を云つとたいひ、その後これを説くものあり、近時我國にては故櫻井大路先生、深くその妙を得て一家をなし、近代氣色家として人の仰望する所となつた、然しその後先生の後を襲ふものがない。

けだし聲と形とは一定して變せざるものである、ゆゑに見易い、氣色はしばく變じて而も一つではない。ゆゑに見がたい。然るを故櫻井先生の如きは、よくこれを極めて氣色の論をなして唐學の肩をも摩したのである。唐學の言へる言葉に「それ氣色はみな内の心に發するのである、肺に營み、肝に觸れ、腎に散じ、脾に暢ぶ、故に色光は則ち心靜かなれば血に通じ、飲食流暢し、喜福の候をなすのである、氣色が若し昏迷すれば則ち心亂れ血滯り、飲食進まず、憂苦の候をなすのである。外にあらはれては則ち薄氣が日をおほふ如く、内にあらはれては則ち隠れて玉に瑕あるが如くにする、或は發し或は伸び、長きは絲の如く、細きは髮の如く、圓きは粟の如く、長きは麥の如く、(みなその大さをも示す)斜めなるは竿の如く、尖れるは筆の如く、或る時は蚯蚓の如く、顔面全體を横切つて現はれることもあり、雲の如く半面に現はれることもある、これらの色は目力を致し、徹視する如くしなければ中々分らぬものである。」と。

嘗て著者が故櫻井先生の名を藉りて氣色について記せることがあつた。多くは茲に出づ。

## 七、人の香氣

○高貴なる花。凡そ花には匂ひがある、高貴なる花ほどよい匂ひをもち、雜草の花などには匂ひはない、それと同じやうに高貴なる人は體に匂ひを持ち、下卑た人には匂ひがない、一軒の家にしても家業の繁榮する處は匂ひを持ち、生業の衰微してゐる所は匂ひを持たない、一軒の家に匂ひのあるのはこれは厨房の匂ひであつて、家庭が充實してゐれば自然臺所で煮たきすることも多くなるから、その匂ひが家にこもり、一種甘く温き匂ひをなすのであり、衰微してゐる家は勝手で火を用ゆる場合も少くなるので自然匂ひもなくなるのである。

そこで花のよしあしが自然人にわかるやうに、人のよしあしも自然、人はわかる譯であるが、人の匂ひといふものは、日本人にあつては一種の感で西洋人のやうな體臭ではない、西洋人は入浴する度數が少いと、洋服を着るのと膩勝の多いたべ物をたべるのとて、腋香のあるものが多くこの匂ひと汗ひとがカクテルして、一種の體臭を待つてゐる、そこで現代の尖端を行くといふセンチメンタリズムは人の體臭など歌にうたつたりしてゐるが、これはただ文字の上で模倣してゐるだけ

で深い観省があつてのことではな。

○人相上の體臭。古くから支那人は人相學上で、この體臭の事を本に書いてゐるが、今明らさまにこれを傳へることができない、少しその要領をもらせば男子は○○の匂ひだといふである。女子も亦それに順するが勿論それは好い意味での言葉であり、下卑た考へではない、従つてそれに香氣があることをいつたもので、この觀察法は人相學上の最後の意義にさへなつてゐるのである。

然し觀相などの場合、一々その人の體臭などかぎわけてゐられるものではない、又日本人は清潔だから特種の職業家以外にめつたに體臭などするものではない、然し高貴な人に面接すると、自然微妙な體の臭ひの如きを感じるのである。

高貴な人ばかりではなく、金が泉のやうにわく人にも、こうした匂ひがあるものであつて、中にはこの匂ひばかりで運を保つてゐるものもある。自分は最近五六年間に一千萬圓からの財産を作つた人に逢つた、現在の住宅が數百坪、土地が一萬餘坪、鎌倉の別荘が建築費だけ八萬圓、伊豆の別荘が四五萬圓のものである。

○黒壯丹の花の如し。その人はまれに雑誌などにも寫眞が出たやうにも思はれ自分は初對面であつたが、少しも想像とちがはなかつたので別段それに對しては感じを新たにしなかつたが、只その

人と對座した時に、實に形容しがたい香氣に満ち満ちた人だと感じたのであつた。

香氣に満ちみちたといつて其人は香水などつけるのではない、實は何にも匂ひなどはしてゐない然しその時自分は黒牡丹の花をながめてゐるやうな思ひがした、その人が黒づくめの高貴な着物を着てゐたからそんな感じもしたのであらうが、顔は黒く膩があつて紫になり底に幾分の黄色を含み芬として所謂神香を發つやうなのは、窓外の音葉の色と反映して文字には現はしがたい氣色をしてゐる。

相法上からいつても春三月に黒い色の光輝あつて現はれるのはよい、時に四月であるが實際的には三月節である、「春、黒氣に逢へば榮權を主どり」「春、紫色に逢へば喜び重々たり」とある、又「春、黄色に逢へば資財を旺んにす」とこれあるものである。

此人は別に特異な相貌などは持つてゐない、なだらかな鼻、やさしい目なざし、紅色をした婦人のやうな唇、全體が上品で高尚でその態度なども物やさしい、それでゐてその黒く紫に輝く顔には或る光のまぶしさがある、それが謂ふ處の神光で、人相上の神光などいふものは、結果の論として第一級の人にしか現はれないものである。

○體の養ひ。人相學上の言葉に「貴人の食をくらへば貴人の齒を生じ貴人の衣を着れば貴人の體

を生ず」といふのがある、人の生活がゆたかになつて貴人のたべるやうな食物をたべてゐると自然貴人の齒のやうに美しくなり、貴人の着るやうな衣服をつけてをれば自然體も備つてくるといふ譯で、この言葉は結果からの演繹であるから、人はまづ生活をゆたかにしなければならぬ、生活を豊かにしなければその人の體の匂ひといふことも起つてこない、體の匂ひを起して運をよくしようとするには又體の養ひをしなければならぬ、體の養ひは衣食の養ひを堅とし又心の養ひを横としてつとめ勵まなければならぬ、心の養ひといふのは何も宗教を信じたり、修養書を読んだりすることのみが能とするのではない、精神の潔白、言語の正直、在る所のものを皆眞なりとしてこれを奉ずる虔虚な心構へである、この心が出来て一つの職業をとらへたならば、それによつてそれ相應の運は開けるものである、そうして段々自分を作り運を作つていつたならば、やがて含蓄あり香氣ある人となり得るのである。

## 八、髭と顎

○人の顎の形といふものは、實際上大きな運命の役割をつとめるものである、伊太利のムツソリ、ニ首相が、獅子のやうな顎をしてゐるのは意志の堅剛なるのを示すと共に、そのスケールが大き

く、先途の見通しがかなり正しく透徹せるバービンチャーたるの素質を備へてゐるものである。そこへ行くとかつての總理大臣林陸軍大將の如きは、髭だけは偉大であるが、顎に力がなく、柔弱で軽い、だからさつぱり前途の見通しがつかない、又髭の長大なのは孤獨の相である、林さんは首相になつてから孤獨となつたのである。軍部の支持もやがて切れた、越境將軍だとか何だとか云つて世間からおだてられたのはその髭までの運勢である、髭から先の運勢はない。

この顎の運勢がないので政治上悲惨な末路をとげたものは鈴木前政友會總裁がある、總裁で味噌をつけ、代議士落選で味噌をつけ、總裁辭任で味噌をつけ、首相の桂冠をまつて幾度も素通りされて、漸く貴族院議員で身の納りをつけたが、半身不隨の病態は、その寫眞顔と共に悲惨である、病馬のケツのやうにすほんだ口邊から顎にかけて觀察すると、いひやうのない陰慘な形をしてゐる、この人に政治的將來は髭から先になくつた。

○ヒットラーの顎は尖つてゐるが、顎の先が前分につき出してゐる、これが人相上で云ふ「朝してゐるもの」である、朝するとは人が手を組んで至上のものを拜む形を云ふのである。又この式の顔に若槻首相がある、又實業家の大橋新太郎さんは顎の上下の狭い人であるが、この人は口と共に顎がつき出て居り、且横顎が張つてゐるので力を持つてゐる、同民同盟總裁の安達謙藏さんも、

一と頃は首相にも擬せられた人であるが、何分顎の狭いのが缺點である、狭ければ二重顎三重顎になると好いのだが、安達さんの顎は力があるが二重にならぬ、それだけ包容力が小さい事になり、ミニスターの上位に達せぬことになる。政界の惑星久原房之助さんなども全く顎のない人で、口こそ大きい、顎は猿の腰かけ程もない、これでは晩年がよからう筈はない、或る人が久原さんの盛んな時分、此の人が内閣を組織する可能性なきにあらずと發表した事があるが、まだ顎まで目が届かなかつたのであらう、人相上の謂ゆる中停（顔の中部）が長く、下停即ち鼻から下の短かいものに最後の人生を飾る壯美宏大な運があると思ふのはまちがひである。

○結城前藏相も地閣即ち顎の張つた方であるが、相棒の前日銀總裁池田成彬さんにはそれがなく、池田氏は將に將たる器としては聊か缺くる所がある、池田氏が三井王國を築きあげたのは、三井といふバツクがあり光背があつたからである、その後も何かしらバツクとしてゐるのであつて、結城さんもよくおのれを知るものと云へる。

○さて始めにかへつて林さんの髯は本來髭と書くべきである、髯は頬ひげであり、鬚は顎ひげである、上唇は人相上の祿であり、下唇は人相上の官である、上唇の髭深く長き時は祿あつて官がない故に位がない、即ち祿財運動を得ざるのかたちとなる故に祿が官を生じた後は官の寒滞となる。

六十二三歳は地閣の地庫になる、地庫がこそげ落ちたのでは官位が空亡する、即ち祿餘りあつて身を尅する、故に人と和して以て政事を推行することができない、あの髭といふものは林さんに取つて無用の長物である所が却つて害をなすものである。

○昔、やはりプロペラーのやうな髭をもつて僅かに飛行界に氣を吐いた長岡外史といふ將軍があつた、林さんも髭を取らぬ限りは長岡氏の第二世となる外はない。

○人の口髭は立てよし悪しである、林さんのやうに鼻のしまつた人が、あんなに長い髭を立てるといふ法はない、髭を以て祿を尅するから官が起らぬともいへる、財餘りあつて官は殺星に化するともいへる、殺星なるものが旺すれば身を尅して人の和を得ない、獨りきめの身勝手主義者になつてそのインコレクトが増長するばかりである、従つて諸政の革新などは成功するものでない、軍人中には得てこゝろいふ人物がある。

ヒットラーのやうに小鼻の流れた人は髭のないのもよいがヒットラー式の髭は子を尅する、池田さんの髭は無難であるが、小鼻の流れてゐるのは子運に弱いしである、結城さんの髭は狭く短かっただけによろ。

## 九、夫婦縁

一七八

○一夫一婦の制度といふものは、人間社會のすぐれた組織でもあり、理想でもあり、實際でもあるが、然しその中には、幾度か妻が變り、夫が變るものがある、男子は妻の代るのをさほど苦にしないものであるが、女子は夫の代るものを甚だ苦にするものである、その中女優とかダンサーとか藝者とか女給とかいふたぐひの婦人は、男子の代るのを一向苦にしないものもある、然しそれらの職業婦人にしろ、最後は人の妻となつて、一身を托したいと云ふのが、一般の理想である。

○所がさうした職業婦人は得て夫の代り易いものだ、一般の婦人にあつてもさういふ人はいくらかもある、それは表面に出ないから分らないだけで、生涯二度三度と結婚するものも澤山にある、さういつた婦人の共通の型をいふものは實は幾通りもある。今二三を個條書にしてみよう。

一、額の左右、眉の上から逆の八字形に骨が現はれて、髮際に及んでゐるもの、この骨は筋の様に高まつてゐるもの、丁度兜の前立のやうな形をして居る、これは再縁孤獨の遺傳あるものである、母は早くヤモメになつたものである、本人は結婚に破れるか又は孤獨である。男子も同様である

一、山根即ち鼻の附根が落ち、年壽 即ち鼻の上邊が低く、力なきもの、かゝるものは結婚しても

夫の運が破れ、再縁、三縁し、その度に夫が失敗し、遂に孤獨になるものである。チヨンポリした摘みツ鼻もそれだけではいけない。

一、鼻の穴が上向けるもの、又は正面より見ゆるもの、小鼻が破けた如くにして形なきもの、右の如くして眼胞の廣きものは皆夫を扶養しなければならぬ女だ、職業婦人にかかる人相の多いのは驚くべきほどである。かゝる女性は男を立引いて食はせてゐなければならぬ、力倆ある人を夫とする事はできない、又力倆ある人を夫としても次第に衰運に向ひ、果は夫を養ふために女給や女中などになつて行くものだ。

一、藝娼妓、女中、女給などに眼胞の豊満なものが多いものであるが、これらも亦夫を養ふ組である、他の部に於て相形よきものは夫を内助する賢婦人となる、眼胞の凹める女は内助する女性ではない、至極我儘である、眼胞の凹める男は妻の内助を得る、此部の廣きは妻縁變り、或は他性に交渉重きものである。

一、眼胞狭く、鼻柱低きものは、氏素性の低き生れである。眼胞廣く、鼻大なるはよろしき生れである。わけて鼻の大なるは高貴の人を祖先に持つたものである。また鼻の大なるものは、他の部に缺陷があるも財力がある、女子は財政を握つて夫を支配するものである。

一七九

一、女子の耳の骨の外に反りかへつたのはよろしくない、第一に早くから外に出る、諸種の職業婦人にこの類が非常に多いものである。耳の反らぬ女性は職業婦人になつても後に必ず内助の人となり、家庭を納める、耳の反れる女性は家納りがたきものである。ダンサー、女優の如き容貌を専らにするものも、その耳を見れば猿の腰掛、キクラゲの如く、ゲチャ／＼として異形をなし形圓く美しきものはない、良妻としての女性を選ばなければ、この耳の美しくしき人を選ぶべきである。

一、然し耳ばかり美しくとも鼻のひしやげたのはよくない、若し鼻が小さければ、眼も口も小さいのがよろしい、おかめの面は即ちその吉相を示したので、目も鼻も口も耳も皆小さく描かれて居る。

一、小鼻のしまれるものは豊かな生涯の中に生れ、中年苦勞があるとも、遂には安樂の身になるものである。

一、女性は柔和な相を以てよしとするが、顔の線にしまりのないものはいけない。

## 一〇、毛 髪

○頭の毛といふのは山に草木のある如きものであるから、毛のないのはよくないが年を取つてから無くなつたのは構はない、色は密にして潤ひ、黒くして光りあるのがよい、粗硬なるもの色の赤いものなどはよくない、まだ四十歳にならぬうちに白髪になるものは血の衰へたもので、運氣はそこで止る恐れがある、禿げるのもよくない、金が溜らぬ、女は髪の毛の薄いよりも軟かく濃い方がよろしい、男の髭はうすいよりは濃い方が好い、濃くてもあまり深いのは却つて妻子を尅することがある、眉毛は濃く黒く太いのは下品の相となる、高貴な人に眉毛の濃く太いものはない、このやうな眉毛は又兄弟の相尅となり、鬢にせまつたのは母を害して早く母を失ふことがある。

○眉毛の濃いものは下品な商賣がよろしい。知識者とか藝術家とかは多く眉毛のうすいものである、女も眉毛の太いのは下品で、これも水商賣などによい、この相は又孤獨の形をなす、腕に毛のあるのもよくない、わけて女子の腕の毛の深いものはこれも下品な商賣に好い、胸毛は澤山あるよりも五六本長く生へたのがよい、耳の毛もこれと同じで二三本長く生えたのがよろしい、耳の毛は萬人が萬人皆生へるものではないが、あれば何れも吉相となる、胸の毛の多いのも妻子相尅のかたちをなすと共に晩年が振はない。

○これに反して足の毛のあるのはよい、然し女の足が毛むくじやらではチトお座がさめる、従つ

て女の足の毛の深いのはこれも悪しき相となる。男の方はある方が好い女の眉毛の太いものなどは三十二歳厄年に悪いことがある。男も眉の毛のせまつたのは三十一、二歳厄がある。その外適所の毛がある、それは人に依つて濃いのもよいし薄いのもよい、身體の他の部分に毛が深ければ薄い方がよい、他の部分の毛が薄ければこゝは深い方がよい、女が毛深いために立身出世をしたためもある、反對に全く毛がないために薄命に終るものもある、毛は何れにあつても赤いのはよくない、黒くそして少し青味を帯びた方がよろしい、前に言つた脚の毛は男も濃い方が好いが、然しそれは柔かでないければならぬ、粗にして濃く熊の足のやうなのは却つて貧賤の相となるものである。

### 一一、富貴な人の相

○人は自然に天地五常の性を持つてゐるものである、然して此の五常の性を持つてゐるものは謂ゆる陰陽二つの氣の合つたものであるが、幾萬人あつても人の容貌といふものは決して同一ではない故に人の相を見るものは決して單純ではならない、まづ人の相を見るには、始めは髪の生際から額を見、次で額に至り、その左右の高低をうかゞひ、身體の前後を眺め、富貴賢愚を眉や目の間に考へて、貧賤を額、額の上に検査し、智慧を髪や皮膚の上に察し、苦樂を手足の上に見るのである

上相なるものはその聲を察し中相なるものはその色を考へ、下相なるものはその骨を審かにしなければ眞の貴賤が分らないものである。富の有無は鼻の格構如何にある、鼻の形が筒を截つたやうであり、膽囊をかけたやうであり、鼻の根が廣いものは富有である。腰が圓く背の厚いのも富有である鼻に梁があり、左右の顴骨(頬)が起つて力があり、地閣(顎)が廣く一文字形になり、肉のあるのも富有である。その上に氣色が美はくし潤ひがあり、皮膚が細かくて脂があり、正面の平滿なものは、或は反對に古怪清奇なものは富有である。手足背などが厚く、行くも立つも坐るも食事するも端正なるものは富有である。腹が重なり背が重なるものも富有である。一見して敦厚謹嚴なるものは富み、一見して薄燥なるものは災多く或は夭折する、丈高くして容貌の秀麗なるものは天があると稱してこれは貴い、山縣有朋公や西園寺公望公の如くである。丈低く肥えたるものは地があると稱してこれは富むものである。大倉翁、澁澤氏などその典型である。形が厚くドツンリとして靜かであり、氣が滑らかで聲がはづみ、眉に潤ひがあり、耳が厚く、唇が紅く、鼻に骨があつて堅く顔が聊か角ばつて背に厚みがあり、腰まろく、皮膚が滑かであり、腹が垂れて、齒が揃ひ、鵝鳥の行くやうに歩むものは富相の人で、謂ゆる實業家として巨財をもつものはかう云つた形のもが非常に多い。坐れば石のやうであり、歩けば浮いた雲のやうであり、耳は大きくして頭部に着き(貼



肉耳である。面は黒く、身體は白く、背は盛り上つて鐘のまわりのやうであり、背又ひろく胸平らであり、腹大きく、顔の上、中、下部とも平均し、五嶽(面の五部をいふ)とも高まり、五長とも揃ひ、又は五短五露などの完全なるもの。又眼は鳳凰のやうであり、聲は太く澄んで鐘のやうであるものなども俱に富相である。實業家にはかういふ形のものが多い。

○前にも述べたやうに、鼻が筒を截つたやうであればその人は衣食が豊かであり、準頭(鼻のさき)が豊かに起つておれば富貴を争ふほどになる。従つて小鼻が流れ又は鼻の先に力のないのはよくない、準頭が圓く肥えておれば食が足つて衣服に豊かなる人であるが小鼻の流れたのはよくない鼻準が廣くまっ直であれば富貴に極りがない、鼻が膽囊をかけたやうなれば家に巨萬の財を蓄へる人である、鼻の上に光澤があれば富貴が家に盈つる人である、耳が大きくして光りがあれば家屋敷を廣げる、目が短かく眉が長ければ愈々財物の收獲が多い、眼が鮒のやうであれば家には十分の富がある、耳たぶが口に向いておれば衣食の糧が少くない、手が柔かで綿のやうであれば衣食が充満する、指が芽を出した時の筍のやうであれば衣祿の極まる時がない、耳の門が後に垂れてゐるものは富貴長久である。口に朱を塗つたやうであれば富貴の盡きる所がない、頭大きくして顎の張るのも富貴長年である、口が紫で顔が方(角張る)なのは廣く田畑家屋敷を持つ人である。舌が紅蓮の

やうなものも土地を持つ人である、齒が栢榴のやうなのは海外にも投資をする人である、頸に肉があつて別に盛り上るものは食が足り衣が餘るもので財物を澤山に持つ人である、腹の大にして下に垂れるものは福祿の自然に生ずるものである。耳に垂珠があれば衣食の倉に満つるものである。

○又三停(顔の上、中、下)平生なれば終身衣食に缺けることのない人である。額、兩頬、鼻顎が何れも高いものは一代資財のあり餘る入である。額が高いのは少年の時代に富貴である、顎の豊かなのは晩年になつて榮昌する。口を水星とする、口は一生の財祿の有無を定める所である、だから口の大きなのはよい、鼻を財星とする、中年の運の善悪が定する所であるから締つたのがよい頬が豊満なれば多くの奴僕を従へるほどである。地閣(顎)が豊かで掌でうけるやうに平かであれば必ず家を富まし、財を積む者である、五行(五官)が不正であれば始終薄寒であり、俱に豊かであれば錢財を廣く積む人である。天庭(額)が廣く高ければ早く學問に發達する人である。歌曲の大家になるものなどは多く此の廣額である。掌が紅のやうなれば富んで財が多い、五露の全くあるものは高位に陞る人である、小鼻が豊かに満てば金銀を藏に貯へる、坐れば虎の踞するやうなのは富有である。顔が満月のやうであれば家道を隆んにする。(五露は目、口、鼻、耳、咽喉骨の高まれのものを云ふ)。以上はこれまで説き來つた福相の入の總合である。

## 二、貴い人の相

一八六

○人の貴相にも實は様々の區別がある。生れながら自然に得來るものもあり、修養に依つて此相を得來るものもある。修養中に來るものはその形容敦厚にして舉動も嚴整である、然して人の貴相あるものには必ず奇骨のあるものである、それは遠山に奇峰の秀景ある如きものである。奇骨は必ず眉や額の上に出る。而して又眼、耳、鼻、口に眉を加へて五官とする。第一に此の五官が法に外れずして清明なれば貴い相なのである、目は肝臟に屬し、目を司親の官と云ひ謀慮の出づるところである、考へ事をする時に眼をつぶるのは此のためである。耳は腎臟に屬する、耳を作強の官と云ひ、伎巧の出づる所である、耳を傾けて考へるのは此のためである。鼻は肺臟に屬する鼻を相傳の官と云ひ人の節度を治する所である、故に鼻筋の流れて力のない人、小鼻の判然せぬ人は節度の亂れ勝になる人であるから、かような者には大事を託されない、重大な仕事も授けられない、ビジネスでない。之に反して鼻の縮るものは節度がありビジネスである、事業家、實業家などで成功するものは皆この鼻の力のあるものであるから試して見給へ、これ鼻が相傳の官として力ある故である口は脾臟に屬する、口を倉廩の官と云ひ、五味の出づる所であるが又食祿でもあるから口の大きな

のがよい。小さければ縮つて四角であり、且色の赤いのがよい。口の赤い人に貴相のあることは前に述べた。印堂（眉と眉との間）は一面の表と云ひ、内に心に應ずる所であるから、之を君主の官とする、神明の氣出づる所である。だから人が不快な表情をする時は眉間が暗くなる、従つて又眉間の明るい人は愉快である。高尚である。凡そ人の相は少しく清奇古怪なものを以て貴とし富貴とするの相である。ノツペリ顔ではいけない、美人薄命は女子ばかりではなく、男子にもある。美貌ばかりではいけない、奇がなくてはいけない、俳優も亦美貌ばかりでは永く榮えない、顔はどこことなく不思議な相をするものがよい、濱口雄幸氏、大倉喜八郎氏などの顔は清奇古怪である、人が大巨となり、大實業家となつたものは皆一種奇なる容貌をしてゐる、さういふ例が知事や會社重役、將官などに多いから試して見給へ。此の中清奇な容貌のものは名を高め位を顯はす、古怪な容貌のものは財を積み寶を重ねる、身が短かくして顔の長きものは貴い人である、面が角ばつて横に長いのも貴い人である。扁背の重く厚きものは貴い人である、龍のやうな眼で鳳凰のやうな瞳のものは貴い人である、額に角のやうな骨が小高く二つ起るものは貴い人である。聲が清亮で、耳が白く頭に稜のあるものも貴い人である、鬚が堅くて鐵のやうであり、手足が玉の如きは貴人でなくとも富有となる人である、顔が黒くて身が白く、面が粗くて身が細く、脚が短かくて手が長く、身が小さ

一八七

くて聲が大きく、鼻が仰向いて口が大きく、面が短かくて眼が長く、肉が少なく頭の頂き平らなのも皆貴い人の形である。若し之等のものが功名を求めたならば、即ち高官貴顯にのほることができるのである。財利を求めたならば巨萬の財を積むことができるのである。額に日角月角が起り、伏した犀の背のやうな骨が頭の頂きを貫き、眼が黒く澄み、額の中央の骨が高く天に向ひ、立つて両手を延せば膝に垂れるほど長く、口は拳を容れるほど大きく、舌は自分の鼻を嘗るほど長く、速かに行き緩り歩み、鳳凰の睡るが如き眼をしてゐるものは大貴相の人である。耳は面よりも白く、眼は漆を黠したやうに黒く、身體の上部長く下部短く、口を結んだ所は四の字のやうであり、齒は三十六枚であり、龍の如くに廣く又虎のやうに大きな口ばたのものはこれ中貴の相である。額が高く聳え、顎が方（角）にして圓く、齒が白くして面が大きく、眉が疎にして目が秀で、口は弓のやうな形をして居り、唇は朱の如きものは小貴の相である。貴人にも輕きものがあり、厚きものがあり清きものがあり秀でたものがあり、疎なのがあり細きものがあり、瘦たのがあり肥つたのがあるが皆秀媚の氣があつて形や骨や顔面の各部位の完全しないのがよい、形や骨や、各部位等の餘りに完全せるものは人間として秀媚の氣の薄いものである。

○それであるから、人の行く時は流水のやうに靜かであり、坐れば動かぬ石のやうに靜かなもの

は朝廷の臣となつて高位に列するものである。兩耳の肩に垂れたものは、大貴人の相である。耳に刀の鏢のやうな圓みのあるものは最貴の高官にのほる人である。眉が秀でて鬢に入れば華族に列する人である、眉が高く聳えて秀づれば威權あつて高祿を得る人である、眉が清くしてまつ直なれば清い職に就くことができる。目が秀で、長ければ必ず玉尊に近づく人である。眼が鳳凰の目に似てゐれば必ず高官に昇ることができる。龍のやうな瞳があれば必ず食祿が重い、兩眼に神を藏してゐれば（目に含蓄があつてドンヨリせぬ）、富貴功名二つながら得る人である、口に朱を蒔いたやうなれば食祿榮華する人である。口が角弓のやうなれば清高にして富貴である。口が角弓のやうであると云ふのはまづ第一に大倉鶴彦翁の口のやうに厚くなくして張つたのを云ふのである。此口は又却つて威があつて多くの人を號令するものである、軍人となれば將軍となる。河目海口と稱するは食祿が山の如くにある、河目とは河のやうに細長い目、海口とは四角な廣い口である。鐵のやうな面で劍のやうな眉のものは威權があつて軍事上に發達する。眉の上の骨が分れると兵馬の權を執る眉の上の骨は軍人によくあるものである。胸廣くして長ければ貴い人である。顔の方（角ばる）であり耳が大きければ名を四海に馳せることができる、學者には最も此の顔が多い、學者ならずとも海外駐在の大使公使となる人、スポーツマンなどに此顔のものが多し。

○更に身體の全部に關して顔との關係を云へば、まづ頭部の形の好いのは面部の好いのに及ばないものである。即ち肝心な所は頭部よりも面部にある。所が面部のよいのは身體のよいのに及ばないものである。然し三停四瀆の揃つた面貌はよい、五官六府も完成したのがよい。凡そ人が貴人の食べるやうな食物を食べるのは、貴人の齒が必要である、だから貴人の齒が揃つてゐなければならぬ。貴人の齒がなくては貴人の食べる食物は食べられないものである。又貴人の衣服を着るには、これも貴人の衣服を着るだけの備はつた身體が必要である。凡て貴人の頭部には髪が少く、賤い人の身體には毛が少いものである。凡そ貴人でなくとも社會の上表に立ち、その名聲を保ち何の某と仰がれるやうなものは一藝人と雖も頭部が薄く、額が抜け上り髪が少いものである。學者にも亦此の相の人がある。だから貴人の相を見るには只一ヶ所にのみ止めてはならぬ、その形からも觀なければならぬ、形を見るのはその資格の備はるや否やを見るのであつて、まづ腰は圓く肩が厚くなければならぬ、それであれば高位に昇つて玉帶をつけ朝衣を保つことができるわけなのである。骨が聳えて神が定まれば必ず、威權忠節を主とする人となるのである。膚が凝こつ脂あぶらのやうであり、肉に垢をとめなければ、體が蘭麝でなくとも身に餘香があるわけなのである、剛毅汪洋であれば天朝にも咫尺することができるといふのである。途を行く時、龍の騰るやうであるのは、その人の膽志たんしが

群に超えてゐるからである、坐れば虎の踞するやうなのはその人が英雄の中から抽んずる資格のあるものである、虎のやうに歩み、鶴のやうに行くは名を高め要職に就く人である、鳳凰のやうな形の者、又は龍のやうな面の者に決して凡庸の輩があるわけではない。凡庸なものはやはり凡庸な類形をしてゐる、高貴なものは前にも云ふやうに神奇なる形をしてゐるものである。面が方（角張る）にして耳が大きければ従一位にも至る人である。眉が堅く目が長ければ至尊の御側に仕入ることのできる人である、兩の眉が高くなつて髪に連なれば大臣、長官に至る人なのである、狼のやうに尖つた頸で燕のやうに短かい頸をしてゐれば、檢事、警務の長官となるものである、雞のやうに行き虎のやうに歩むものは參謀官となる人である、獅子のやうな鼻で龍のやうな瞳があれば補佐の官となるものである。濱口雄幸氏などはその典型である。天庭（額の上の角）が起つて後頭部に入るものは位人臣を極める人である、臍の穴が李を入れるやうに凹んでゐるのは大に貴い相である、（出臍のものは貧賤である）口に拳を容れられるものは朝廷の玉階をのぼる身となる（華族にも列する、大倉鶴彦翁、東郷大將の如きは此の口の所有者である）、足の裏に龜紋があれば華族に列する、足の裏の黒子は英雄となつて萬人を壓する相であるとするが、而も面が不正であればその資格がない、天庭（額の中部上方）、邊城（額の上の角）に骨が起つてゐれば武名を四海に擧げる人となる、輔骨